

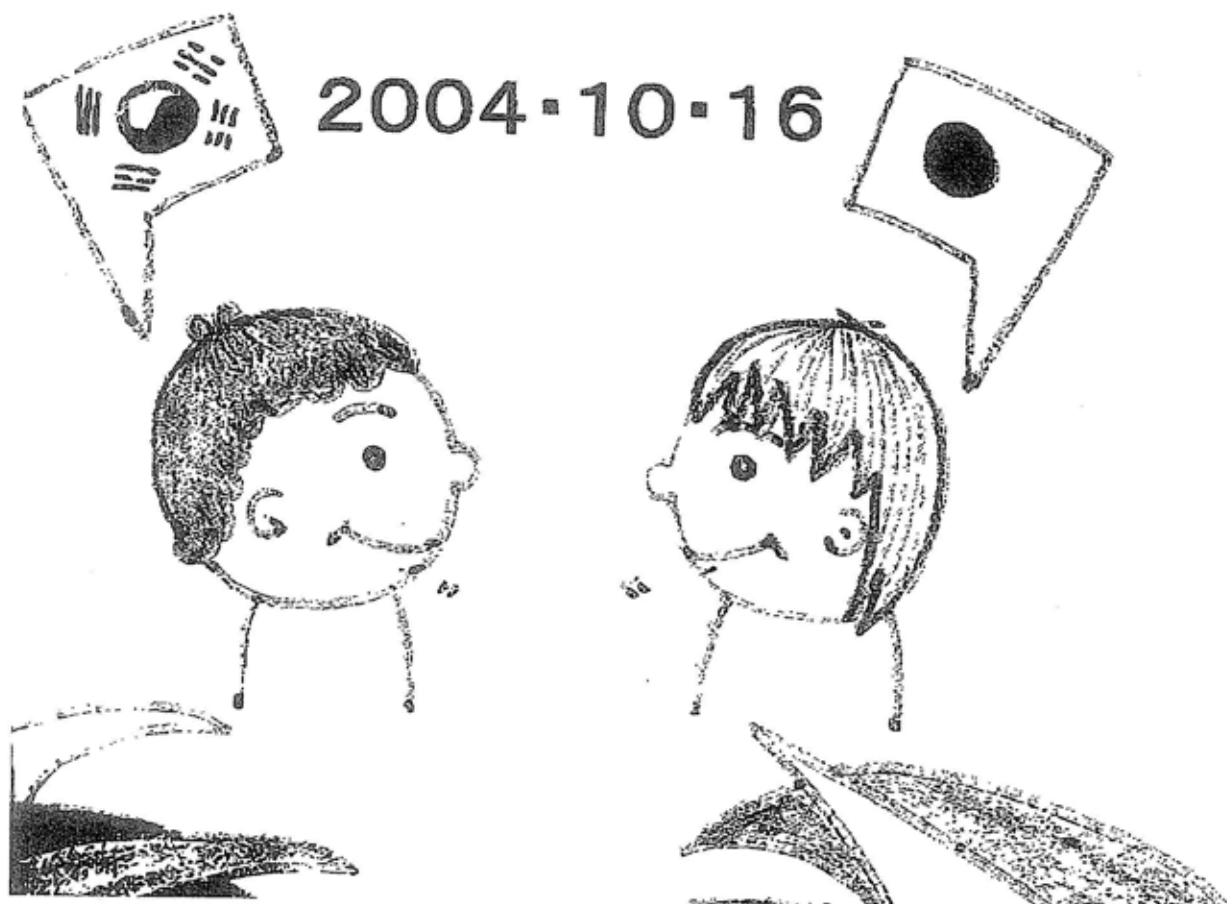
2

目 次

人間自然科学研究所 活動紹介 No2

2004 年 10 月	韓日共同ディベート 日本海・東海名称問題を考える報告文集 (資料作成：尹)	1
2006 年 7 月	韓国雑誌「市民時代」	28
2006 年 10 月	韓国釜山木曜学会講演	56
2012 年 7 月	韓国雑誌「市民時代」	71

韓日共同ディベート
日本海・東海
名称問題を考える
報告文集



目次

はじめに

謝辞

活動経緯

当日の流れ

日本海・東海の名称問題に関して

ディベートとは

肯定側メンバー&立論

否定側メンバー&立論

議事録講評

参加者感想

浅井 遼 (1年)

足田 利伸 (4年)

石原 司 (4年)

姜 炳淑 (3年)

佐藤 恵 (2年)

高橋 隆太 (3年)

寺脇 史人 (4年)

馬場 茜 (4年)

前田 啓介 (4年)

室屋 友則 (1年)

尹 熙峻 (4年)

渡邊 郁夫 (1年)

おわりに

資料

はじめに

まず、10月16日に私たちの『韓日共同ディベート』にお越し頂きました方々に心からお礼を申し上げます。大学祭の初日に朝早くにも関わらず70人もご出席していただきました。また、ディベートが終わってから、多くの方から励ましのお言葉を頂きまして、私たちが次のために頑張る力になりました。真にありがとうございました。

私たちは今年5月に、ディベート倶楽部「QCLC」とアンヨンハセヨ韓国文化研究クラブ、そして韓国の留学生が問題意識を持ち集まりました。最初にこのような企画を考えるようになったきっかけは、日本と韓国が抱えている歴史・外交的な問題を学生の立場から、相互理解できる範囲まで考えてみたかったからです。そして、それを通してもっと多くの方

がこのような問題を他人のことだと考えずにみんなで話し合う輪を作りたいと思ったからです。

もちろん、日本海・東海の名称問題は竹島問題とともに両国の間の外交的な問題として、もっとも敏感な部分です。そういう理由で、私たちがこの問題を取り上げようとした時、周りから目に見えないプレッシャーと心配の声があったのも事実です。しかし、誰もが同じ考えと思想をもっているなら、この世の中はいつになっても変わることはありません。むしろ、固定観念から脱出することによって新たな発想と思想が生まれると思います。つまり、今回の企画も周りからみんなが懸念するからこそ、私たちにはチャンスであり、使命感を強くもてたと思います。

私は最近一つ強く感じたことがあります。それは、愛国心という定義です。私が韓国にいたときに、身についていた愛国心というのは、どんなことがあっても国のことを守る、そして、国のモノを愛する、それに、国の勝利のために頑張る。言い換えれば、盲目的な愛国心でした。しかし、今回の企画を進めるうちに、その愛国心に対して、もう一度考えるようになりました。果たして愛国心というのは何か。私はいろいろと資料を探し、メンバーたちと熱く議論するうちに一つ悟ったことがあります。それは、私が愛国心ということを考えているとき、相手もそれぞれの愛国心を持っていることを忘れてはいけないということです。つまり、盲目的な愛国心では相手はもちろん、自分さえ傷つけることがわかりました。それは、つまり対立の連続とつながることでした。

その対立を防ぐためには盲目的に国を愛するのではなく、賢明な愛国心が必要です。それは、自分のことはさることながら、相手も知ろうとする前向きな姿勢と、相手のことを尊重しあうこと、そして、間違ったら間違ったと認める広い心から始まると思います。

今回の企画をきっかけにもっと多くの方、特に島根県立大学の後輩たちが日韓だけではなく、日中・日米関係などの問題意識を高め、みんなで話し合える輪を作ってほしいです。それは、今回の企画に参加した学生たちの最後の意見であり、願いであります。

これからも私たちの活動を暖かく見守っててください。

ありがとうございました。

2004 年 10 月 23 日

韓日共同ディベート総合責任者 尹熙媛

謝辞

2004 年 10 月 17 日の第 5 回海遊祭において、韓日共同ディベートは、約 70 名の観客を集め、当初の目標であった「韓国と日本の間に存在する、問題の関心の輪を広げる」を達成でき、大変嬉しく思っています。

しかし、本企画の成功には多くの人たちのご支援と叱咤激励があったからだと考えております。我々参加者一同を育ててくださった御家族、傍で支え、相談にのってくれた多く

の友人たち、我々に学問の尊さを教えて下さった宇野学長を始めとした本学の先生方、ディベートのご指導をして下さった松本茂先生、ディベート倶楽部「QCLC」の顧問である浅野雅巳先生、アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ顧問である朴容寛先生、私たちの企画に興味・関心を持ち、松江から視察に来て下さった小松電気産業株式会社社長の小松昭夫様、また最後まで本企画を追跡取材して下さった山陰中央新報社の田中輝美様、リサーチ・打ち合わせ場所を提供して下さったメディアセンターの皆様、レジュメ・本誌の印刷にご協力して下さった赤松裕作君と売店の皆様、食事会の場所を快く提供して下さった「居酒屋きんさい亭」の皆様、我々の活動の場である第5回海遊祭を成功させて下さった実行委員会の皆様、そして、当日会場にいらっしゃったお客様の皆様。誠に参加者一同、心より厚く御礼を申し上げます。

また、私たち4回生が卒業した後、後輩たちがこのような企画を続けていくと思います。彼らも私たちと同じように、多くの方のご支援が必要です。ですから、皆様からの一層のご指導、ご支援、叱咤激励を彼らにも賜りますようお願い申し上げます。

2004 年 10 月 23 日

韓日共同ディベート 運営責任者
ディベート倶楽部「QCLC」部長 寺脇史人

今日までの活動の経緯

- ・ 2004 年 5 月上旬 尹熙竣がディベート倶楽部に企画を提案。
- ・ 2004 年 5 月中旬 韓日共同討論会の企画に韓国入留学生(尹熙竣・姜昶淑) アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ、ディベート倶楽部、一般有志(室屋友則・渡邊郁夫)が集まる。
- ・ 2004 年 6 月上旬 ディベート倶楽部「QCLC」によるディベートの指導と練習。
- ・ 2004 年 10 月 1 日 肯定側・否定側のチーム編成が決まり、本番までチームごとで調査・練習。
- ・ 2004 年 10 月 6 日 小松電気産業 社長 小松昭夫氏の活動視察と懇親会。小松昭夫氏より『北朝鮮年鑑 2001』『北朝鮮 2000』を寄贈していただく。
- ・ 2004 年 10 月 16 日 第5回大学祭 韓日共同ディベート「日本海・東海の名称を統一すべきか、否か」を開催(来場者数 約70名)。
- ・ 2004 年 10 月 18 日 県立大学メディアセンターに小松昭夫氏から『北朝鮮年鑑 2001』『北朝鮮年鑑 2000』を寄贈。
- ・ 2004 年 10 月 26 日 韓日共同ディベート報告文集が完成。

当日の流れ

【司会・議長: 寺脇史人 (4 年) 議事録: 石原司 (4 年)】

1. 開会
2. 日本海・東海の名義問題のレクチャー
3. ディベート・レクチャー
4. 公開ディベート 「日本海・東海を統一すべきか、否か」
5. 判定・批評 (勝者: 否定側)
6. 企画立案者 尹熙峻あいさつ
7. 閉会

—日本海・東海の名義問題に関して—

文責: アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ

前田啓介・高橋隆太・佐藤恵・浅井遼

・ 名義問題の発端

現在、世界的に認知度の高いとされる「日本海」という表記・呼称をめぐり、日韓で論争が起こっている。1992年、第6回国連地名標準化会議において、韓国が初めて「日本海」に対して異議を唱え、「東海」と改めることを公式要求。その後、韓国側が併記論を展開するも、日本はこれに反対している。

歴史的観点より「日本海」と「東海」どちらの表記が早かったか、他国ではどちらが多く使われているかなど、両国政府間で論争が続いている。

2. 日本側・韓国側の主張

○ 日本側の主張・・・「日本海」単独表記維持を主張。

- ・ 1602年、イエズス会のマテオ・リッチによる『坤輿万国全図』で最初に登場した。
- ・ 19世紀以前には、既に「日本海」の呼称が世界的に確立されていた。
- ・ 2000年、外務省が世界60カ国の地図392枚を調査した結果、97%以上が英語での”Sea of Japan” および日本語での「日本海」に呼称を使用している。

○ 韓国側の主張・・・「東海」、あるいは「東海/日本海」のような併記を主張している。

- ・ ユーラシア大陸の東側に位置している。
- ・ B.C. 37年 (三国時代)、既に「東海」の記録があることから、2000年もの間使われてきたことを主張している。
- ・ 1809年および1871年の世界地図に、日本人の地図作成者による「朝鮮海」の表記を認める。

- ・ 1929年、国際水路機関（IHO）による『海と海洋の境界』初版発刊の際、韓国は日本統治下にあったため意見できなかった。

3. 名称問題をめぐる混乱

- ・ 中国・ベトナムは、東シナ海・南シナ海をそれぞれ「東海」と呼称しているため、「日本海」を「東海」と記載することは、混乱を招くことになる。
- ・ 関係国以外の国の表記・呼称が、関係国から指摘され非難されるという現状。

以上

—ディベートとは—

文責：ディベート倶楽部『QCLC』副部長 足田 利伸
赤松裕作 石原司 小田久美子 寺脇史人 馬場茜
浅井遼 姜珉淑 佐藤恵 室屋友則 渡邊郁夫

ディベートとは…

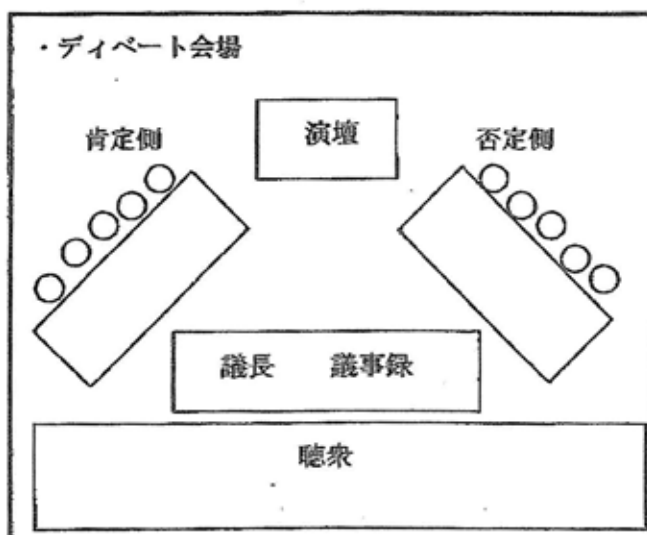
一つの論題に対して、対立する立場をとる話し手が、聞き手を論理的に説得することを目的として議論を展開するコミュニケーションの形態。

・ ディベートの構成要素

1. 論題
2. ディベーター（対立する立場をとる話し手）
3. 聞き手

・ ディベートの進行形式

肯定側立論	4分
否定側質疑応答	2分
準備	1分
否定側立論	4分
肯定側質疑応答	2分
準備	1分
自由討論形式の反駁	20分
計	34分



・ ディベートの仕組み

立論：自分たちの立場を擁護する全ての重要な議論を提示する。

- ・ 肯定側立論…プラン（論題を具体的にしたもの）を導入すると、新たなメリットが

生じるという議論を展開する。

- ・ 否定側立論…論題を採択すると新たなデメリットが生じるという議論を展開する。

質疑応答

- ・ 不明な点の確認…議論の構造の確認、聞き漏らしたことの確認をする。
- ・ 反論・反駁のための土台作りをする。

反駁：主な目的は、自分たちの議論を立て直すこと。

- ・ 相手側の議論に反論する。
- ・ 自分たちの議論を立て直す。
- ・ 自分のチームが勝っていることを説明する。

注) それまでのディベートで触れられていない新しい議論を展開することはできない。

- ・ ディベートの審査 (ジャッジ) の方法
- ・ 偏見を捨て、ディベーターと論題に対して中立な立場になる。
- ・ メリットとデメリットの強さは、立論での証明 (理由付けと証拠資料) の優劣で判断する。
- ・ 相手チームからの反駁には、どう反駁したかを考える。
- ・ メリットが少しでも上回る→肯定側の勝ち。
- ・ デメリットが少しでも上回る→否定側の勝ち。
- ・ まったく甲乙つけがたいという場合→慣習的に否定側の勝ち (最後の最後的手段)。

以上

肯定側メンバー&立論

馬場茜 (4 年)、前田啓介 (4 年)、^{かんぴやんすつ}姜萌淑 (3 年)、浅井遼 (1 年)、室屋友則 (1 年)

肯定側立論

現在、韓国と日本は日本海の名称に関して、国際舞台において対立しています。この原因は、1929 年に IHO (国際水路機関) によって国際名称として、日本海と決定されたことに原因があります。この時、韓国は日本の植民地であったため、国際的な発言力がありませんでした。その歴史を背景に現在になり対立するようになりました。

この対立は現在、「どちらの名称が古くから使われた」、「どちらの方が多く世界で使われているか」といった同道巡りの議論ばかりで、平行線をたどっています。また、世界各国の名称を扱う出版社やメディアに、日本海単独記載か併記かに関して圧力をかけ、多大な迷惑をかけています。この状況を我々は日韓両国の国際的イメージの悪化、日韓関係の悪化といったデメリットであると考えました。これを防ぐために、日本海・東海の名称を統

一すべきであると主張いたします。そして、次のプランを提示します。

プラン1・2008年までに決定する。

プラン2・日本、韓国、北朝鮮、ロシアの四カ国において決定する。

プラン3・IHO・国連地名標準会議など、国際的に使用されるものとする。

プラン4・統一までは暫定処置として、日本海・東海を併記する。

そして、我々の提案として次の名称を主張いたします。

「緑海」 「ノクセ・パダ」 「ゼリョニューイ・モール」 「GREEN SEA」

そして、プランを実行することによって次のメリットが生まれると考えられます。

メリット1 4カ国の友好関係が上がる。

まず、名称による対立のしこりがなくなります。現状としては、名称をどうするかといったことで気を使っています。例えば日本海単独記載となった場合、韓国側が不快な思いをし、それを火種として友好関係を悪化させているのが現在です。しかし統一されることで、不快になる機会が減り、より良いコミュニケーションが可能となります。これは、「どちらの名前が先か」、「通訳の直訳による間違い」、「印刷物に記載された名称による外交的圧力」などが解消され、気がねなくコミュニケーションが取れることを意味しています。コミュニケーションはよりよい関係を作っていく上で非常に重要なものです。それが気がねなくできるということは、名称による対立を防ぎ、友好関係の促進につながると考えられます。

メリット2 経済的効果が生まれる

日韓ワールドカップの際、日本・韓国どちらが名称が先かで議論になりました。この時、日本と韓国の二国間でそのため会議、通信、出張が行われました。この名称のために時間、労力、費用といった非効率がありました。

また同じように、日本海・東海においてもこのような非効率は存在します。しかし、名称を統一することによってこれらの非効率を解消することが可能となります。これは経済的効果であると考えられます。

さらに、別の観点から、プランにおいて世界的統一名称に変更されるのですから、日韓は足並みを揃えなければ、互いの関係を悪化させることとなります。これを防ぐために統一名称を普及させなければなりません。そのため、例えば地図・看板・パンフレットなどは改訂版を出さなければなりません。つまり、出版社、看板会社、印刷会社、流通業界といった場所で莫大な経済効果が生まれると考えられます。

また、新名称統一の新しいイメージを使ったブランド構築、統一名称を利用した観光政策などが可能となるとも考えられます。

以上の点から、我々肯定側は、日本海・東海の名称を統一すべきであると主張いたします。

以上

否定側メンバー&立論

足田利伸 (4 年)、尹熙峻 (4 年)、高橋隆太 (3 年)、佐藤恵 (2 年)、渡邊郁夫 (1 年)

否定側立論

私たちは東海・日本海の名称を統一することに反対します。それは次の 2 つのデメリットがあげられるからです。

第 1 のデメリットは、統一名を作るということにより、日韓の反発がおこるということです。というのは、国際水路機構の決まりごととして、「地名に関してお互いの努力により統一できない場合は併記を認める」ということがあります。ということは国際的な風潮として必ずしも統一名称は必要とされていないことが分かります。また、現在日本は「日本海」を、韓国は「併記」を主張しており統一名称を作るとは両国とも望んでいないことです。強制的に統一名称を押し付けるということは完全に現在の流れにそぐわないことで、このことを推し進めるなら日韓の国民は反発をおこします。

第 2 のデメリットは、アイデンティティーを喪失させてしまうということです。それは日本海・東海に慣れ親しんだ人々はもちろん、韓国には「東海市」という市もあります。また何と言ってももっとも重要なことは韓国の国歌に「東海」という歌詞があることです。国歌とは国民が母国を意識するもっとも身近な存在であり、また国の象徴の一つであると同時に国の誇りでもあります。このような重大なことを無視し統一名称を作るとは韓国人また日本人のアイデンティティーを否定し喪失させることにつながります。

そこで私たちは「日本海」・「東海」を永続的に併記すべきだと提案します。それは「併記」という手段は国際風潮の 1 つといえるからです。というのは、ドーバー海峡として有名なイギリス・フランス間の海域は、国際的な世界地図ではイギリス側の海域はドーバー海峡、フランス側の海域はカレー海峡です。また 2004 年 9 月に英国の世界大手といわれる教科書出版社の教科書で日本海・東海の併記がなされているということまた、以前まで「東海」を主張していた韓国が 1992 年から併記の提案をしているということから、日本も韓国の歩み寄りに応えるべきなのです。

そして私たちは 4 つのプランを提案します。1 つ、2008 年に行われる国連地名標準化会議において韓国側が「併記」の提案をします。2 つ、地図の表記に関して、韓国側の海域に「東海」と、日本側の海域には「日本海」と表記します。3 つ、表現に関して国際的なものには、国際慣習にのっとりアルファベット順に表現し、国内的なものに関してはその国の表現の自由を尊重して、自由にしてもらいます。最後 4 つ目として、併記することが決まれば国民に対してこれを PR します。

これらのプランを導入することにより、今よりも深い友好関係を築くことが出来ます。それはお互いの地名を認めること、国歌という国民としてのアイデンティティーの根本を尊重することにつながるからです。韓国、日本、どちらにも言えることですが、現状として、留学生や観光客が東海を東海と言えなかったり、また通じなかったり、「あれは日本海

だ」と訂正されてしまうことで、その人は個人または国民としてのアイデンティティーを否定された気になってしまいます。しかし、併記することで、自分の慣れ親しんだ東海を、また国歌にでてくる東海を認められるということがその人のアイデンティティーを尊重されたと感じ、また自分も他人のアイデンティティーを認め合うことで国民レベルでの強固な友好関係を築くことが出来るのです。そして PR 活動を通して広く国民に知られるのでこれらのような問題を防ぐことが出来ます。大切なことは名称を統一することではなく、このようにお互いを認め合うことです。それは国際協調を深め、これからの未来を明るくする一つの要因になるのです。

以上

議事録講評

文責：ディベート倶楽部「QCLC」 石原司

今回のディベートでまず評価したいのは、参加者全員が個人の主張をしっかりとしたことです。そのために多くの時間を割いて行ったリサーチも当日、それぞれの意見を主張するよい材料となっていたと思います。全体の流れも、論議が横道に反れることなく、論理性もあり大変に良いものだったと感じました。特に、経済面とアイデンティティーの論議は非常に良かったと思います。経済面では、利益と損失という点での意見の相違から、ブランディング効果、新しい地図の出版コストなどいくつかの細かい例や提案を出しての論議が目を引きました。また、アイデンティティーについての論議では、日本海と東海の名称を統一することで、今まで一人ひとりが持っていた、日本海、東海というアイデンティティーを喪失するという否定側の論点に対して、受身な姿勢では何も解決しないという肯定側の主張はとても興味深いものがありました。中でも、私個人特に注目した点は、名称統一に伴って、韓国国家の歌詞にある、東海というフレーズを変更するのか、しないのかという論点で、これに対して、肯定側から変更しないことでアイデンティティーを守るという主張は印象的でした。

全体の流れは非常に良かったが、日韓の友好関係についての論議が目立たなかったこと、また、否定側からデメリットについての主張が少なかったことが、今回のディベートの残念な点だと思います。経済的損失、または利益についても、アイデンティティーについても、確かに大事な論点ではあるけれど、今回のディベートで最も論ずるべきは日韓、さらには名称問題に関係しているロシア、北朝鮮などの友好関係ではないかと私は思います。経済効果にしても、アイデンティティーにしても、結局は日韓それぞれの国内での利益によるところが大きく、国家間での友好関係という国際規模での利益を論議することがより大切であり、また聴衆も興味を持っていた点だと思います。否定側からも、日本海と東海の名称統一がアイデンティティーを喪失するから、統一せずを守るのだ、という論点で押すのではなく、アイデンティティーを喪失することの重大性、危険性をより論ずるべきだっ

たと思いました。

最終的には否定側に判断を下したわけですが、その最大の理由は否定側の立論でした。肯定側と否定側の論議は聞いていてほとんど互角だと感じました。ディベートの目的はあくまで論理的に相手を説得することですが、論理性で優劣を判断できない場合は、どちらがその論理を力強く訴えることができるか、聞き手を魅了できるかだと思います。その点で、今回の否定側立論は肯定側に勝っていたと感じたので、今回、否定側に判断をしました。しかし、本当に最後の最後まで、充実した論議だったと思いました。

以上

参加者感想

浅井 遼 (1年・アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ・ディベート倶楽部 所属)

「韓流ブームと日韓問題」

今日、韓国ドラマ、映画などが、とくに2002年の日韓共催のサッカー・ワールドカップ以降、日本で幅広い世代で人気を得ている。

とくにNHKで放映された韓国ドラマ「冬のソナタ」や「美しき日々」などは中高年女性を中心に高い人気を得ており、「冬のソナタロケツアー」・「美しき日々ロケツアー」などの韓国旅行ツアーは高い需要を誇っているという。まさに韓流ブームの到来だ。

また、島根県立大学は複数の韓国の大学校(大学)と交流協定を結び両国で相互の交流を行なっている。私がアンニョンハセヨ韓国文化研究サークルに所属していることもあり、島根県立大学へ5月から1ヶ月間、蔚山大学校生が、またその後2週間、慶道大学生が研修に来たとき友好的な交流を持つことができた。

私は夏休みには2週間、慶道大学へ島根県立大学の儒教文化体験プログラムに参加し訪れた。

慶道大学と同じ慶尚北道にあるテグ市で昨年アジア・ユニバーシアードが開催されたが、その際、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)代表も各競技に参加した。その時、現行の北朝鮮の政治体制に反対する市民団体と北朝鮮当局の関係者との間での衝突を見た。慶尚北道は方言がきつく、保守的な人が多いと聞いていた。このようなことがあり、私は慶道大学にいくにあたり反日的な人が多いのではないかと、少なからずこんな不安を持っていた。

しかし、日本語のできない慶道生と仲良くなり、ほぼ毎日、焼酎を飲みながら英語で両国のアイドルや映画の話で盛り上がるなど、『反日』を感じない2週間だった。

上記ように韓流ブームも手伝って日韓の交流は盛んになっているが、日韓の間には靖国問題、教科書問題や竹島(独島)、日本海(東海)にみられる領土権・名称問題などの問題が依然解決されていない。

私がこの韓日共同ディベートのテーマが両国の微妙な問題で不安を覚えたこともあるが、参加した理由は韓流で無関心、避関心になりつつある日韓問題を考えたい、そして、知っ

てほしい、そんな思いが強かったからだ。

20世紀は日韓問題について自国の考え方をぶつけ合うだけで解決につながらなかったと思う。21世紀は問題解決のためにニュートラルな政策も考察し、話し合える関係を築くことが大切ではないだろうか。同ディベートはその架け橋を築くきっかけに少なからずなったのではないかと。私は今後、アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ、ディベート倶楽部「QCLC」をとおして日韓問題を考えていきたい。

足田 利伸 (4年・ディベート倶楽部「QCLC」副部長)

私は、今回のディベートを通して、いくつか良かったと思えることがある。

その一つは、対話を通して分析することの大切さである。私は、5月のメンバーで集まった頃、ディベートには非常に関心があったが、「日本海・東海の名称を統一すべき」という論題について、問題意識もそれ程感じることがなく、関心があった方ではなかった。しかし、私は、今回のディベートの準備において、日本海の名称について、韓国人留学生から意見を聞き、韓国人の気持ちを考えることで、韓国側の立場から論題を考えてみた。日本海の名称が一般的である現在の国際社会において、東海の名称を使用する韓国人は、東海に隣接している韓国国民であるというアイデンティティーを傷つけられていると知った。4500万人もの韓国国民が、少なからずアイデンティティーにダメージを受けることは大きな問題である。これは、日本政府の伝える情報からは得ることが出来ない。これは、相手の立場に立って考え対話することで得られた貴重な知識である。対話を通して相手の気持ちを考えることで、見えないものが見えてくると知った。

また、メンバー同士の絆の深まりも良かったことの一つだ。難しい論題ではあったが、ディベートを成功させるために、メンバー1人1人がやる気と責任感を持ちつづけ準備し、お互いを助け合った。このような中で、メンバー同士の信頼関係や親しみが増し、より絆が深かったと思う。

さらに、私はディベートをさらに理解することができた。私は、当日のディベート説明など何度かディベートに関してプレゼンテーションをしたが、その準備段階において、新たな知識を得たこともあったし、知識の再確認をしたこともあった。当日のプレゼンは、緊張して息苦しかったが、ディベートの理解が深まりうまくまとめられたと思うので今となっては非常に良い経験であり、良い思い出。

今回のディベートにおいて、課題としていくつか修正すべき点は見つかったが、私個人としては、今回の海遊祭での日韓共同ディベートは、上出来だったと考えている。私は、この活動に参加して、上記のような価値あるものを得ることができたし、大きな達成感を感じることができた。今回の活動は、大学生活における約3年間のディベート活動におけるフィナーレとして、最高のものであると思っている。

今回のディベートのメンバーを含めこれまでお世話になった方達には、本当に感謝している。ありがとうございました。

石原 司 (4年・ディベート倶楽部「QCLC」所属)

「名称統一問題を論議して」

今回の共同ディベートを通して私は二つのことを学ばせてもらいました。一つは、お互いが価値観を共有し合うことの大切さ、もう一つは常識という枠の狭さです。

今日、グローバル化がますます進展し、社会環境が次々と変化しています。それらに柔軟に対応していくために、今後は一人ひとりがより広い視野、考え方を持つことが必要になります。今回学んだことは、私の視野と考え方を広げてくれる良い刺激になりました。これからの社会は共存共生の時代だといわれています。その時代の中で、何より大切なのは、お互いの価値観をきちんと認め合うことだと私は思います。それによって、お互いの理解が深められ、お互いが人としてより成長します。もちろんその成長は、個人レベルのみでなく、コミュニティーレベルでも国のレベルでも可能であり、また必要であると考えます。価値観とは一人ひとりが生まれてから、自分を取り巻く環境によって形成された個人の考え方、またはその人自身であって、それを形成する環境を変化させることは、その人にとって大きなストレスを与えます。日本海と東海を併記することこそ、お互いの価値観を認め合うことだと思いました。併記はお互いがお互いの言い分をきちんと認めることで可能となり、それは価値観を共有するスタートラインに立つことだと思っています。また、統一は常に争いを生みます。一方的に押し付ける統一はもちろん、お互いが統一を望まない状態での統一も、本質的にはお互いの価値観を認めることとはかけ離れています。統一はお互いがそれを望んだときのみ有効な手段だと私は考えます。無理に新しいものを創るのではなく、既存のものを認め合うことが、今後は必要だと今回のディベートから学びました。また、今まで常識だと思っていた、日本海の名称が、少し視野を広げてみればまったく常識ではなかったこと、自分達が持っている常識が如何に狭いものかをディベートを通し勉強しました。常識に囚われることは、その人の視野を極端に狭いものにする危険性があると感じました。今後ますます激しくなる社会変化の中、常識に固執することは、その変化を受け入れる柔軟性を奪ってしまいます。先に話した価値観の共有も、常識という狭い枠で考える限り、不可能なことだと思っています。今後は常識という枠に囚われず、常に違う視点からものと見る姿勢を持ち続けたいと思いました。

最後に、今回、韓日共同ディベートに参加できたこと、また参加するチャンスを与えていただいたことに感謝したいと思います。このディベートを通して学んだことは、私にとって、非常に有意義なものだったと思います。今後は、今回のことをただ学んだで終わすことのないよう、実行するよう努めていきたいと思っています。日韓共同ディベート、本当にお疲れ様でした。とても楽しかったです。

姜 晴淑

(3年・ディベート倶楽部「QCLC」所属)

『韓日共同ディベート』を終えて

今年5月に、尹さんから日本海・東海の名義問題について『韓日共同ディベート』と一緒にやってみないかと声をかけられたとき、最初は遠慮しました。その理由は、島根県の交流留学生として、両国の敏感な問題に関わりたくないという気持ちもありましたし、また、女性としても周りの視線が気になったからです。その時、尹さんが「もし、姜さんのように、みんなが逃げ出したら、日韓の問題はいつまでも足踏みになってしまうんじゃないか。私たちが問題意識をもって民間交流の柱である大学で日本人学生と考えてみよう。今こそ、留学生である私たちの使命を果たすべきじゃないか。勇気を出して一緒に頑張ってみましょうよ。」という言葉が私の心を打ちました。そこで、5月から企画に参加するようになりました。しかし、外国人としての言葉の壁と、論理的に話す自信もなかったため、途中でやめたいという弱い気持ちをもったこともありました。しかし、いろんな不安が少しずつ解消され、だんだん楽しくなりました。それは、一緒に勉強していくうちに、分からなかったことが理解できるようになったからです。そして、ディベートがどういうことかも知らなかった私に、寺脇さんをはじめ、日本の学生たちが言葉の使い方やディベートのやり方を親切に教えてくれました。時間が経つにつれて私は自信がもてるようになりました。

夏休みが終わるところで、チームが肯定側と否定側に分けられました。私たちは自分に与えられた役割に最善を尽くしましたし、いつの間にかそれぞれの考えが韓国人であれ、日本人であれ、それは問題ではなくなりました。私たちの考えは一つになっていきました。

今、考えてみるとすでに、そこから真なる交流が始まったのではないかと思います。

今回の日韓交流ディベートのきっかけで、誰にでもできる当たり前のことから出発し、だれにもある当然の不安を、一步一步形を変えていくことが留学生である私と現代の日韓の大学生に与えられた新しい使命であることが分かりました。

そこで、「新しい共同体意識」が必要だと思います。歴史問題を歴史問題として論争してみても、領土問題を領土問題として論争してみてもなかなか解決は見えません。しかし、「新しい共同体意識」が誕生すれば、その問題も徐々に解決されていくでしょう。その「新しい共同体意識」は民間交流である日韓の大学生から始めることができると思います。とりわけ、総合政策学部で学んだ広い視野を一つの事柄に対して多角的に考えて、その考えを伝え、交換することだと思います。将来、韓日の間で関税がかからずに人の往来が自由に行われ、先ほど申し上げているような状況が生まれたときに、日本海・東海がどちらのものかというようなことがそれほど深刻な問題にならないのではないのでしょうか。

大学祭が終わった今、私はみんなに次のように話しかけたいです。「共同体意識をもって日本海・東海の問題を分かち合ったからこそ、相手に対する理解や思いやりが持てるのでしよう。」と。そういうものが困難な問題も解決していくだろうと私は信じています。

佐藤 恵 (2年・アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ・ディベート倶楽部 所属)

「韓日共同ディベートを通して」

アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブの間に竹島問題について韓国の留学生とディベート倶楽部とで話し合おうというメールが流れてから、今回の韓日共同ディベートを開催するまで、あっという間に五ヶ月が経った。

この活動に参加した理由は、韓国の留学生が竹島問題についてどのような考えを持っているのか知りたかったからである。そこで、初めて日本海・東海の名称問題について知ることとなった。今までは日本海は、どこの国でも日本海と呼ばれていると思っていたので、この事実を知ったときは驚いた。

そして、海遊祭におこなうディベートの題材をこの名称問題に変更し本格的な活動は始まった。ディベートはゼミの一環として何回か経験したことがあったが、情報を持っていても、それをなかなか自分の意見にすることができない私は毎回失敗の連続だった。そんな私だったが否定側の立場になってから日本海・東海について資料を集め、何回かこの名称問題について肯定側と否定側が集まってディベートを繰り返し、指摘されたことをメンバーと共に議論していくことがとても楽しかった。

この活動を通して、一つの物事に対して大勢で議論することによって他の人の意見を聞くことができ、それから自分なりにまた考えられるようになったことは私の中で一番成長できた点だと思う。また、自分の意見を自信がなくても主張することにより以前より積極的な自分になれたと思う。今後ディベートを重ねる上で、相手の意見を聞き素早く分析理解し、論理的に即座に返答できるような力を身につけたい。

また、ディベートだけではなく韓国についても新たに学ぶ点があった。現代、日本では「冬のソナタ」など韓国のドラマにより韓流ブームがおこり、韓国では 2004 年元旦に日本文化が全面的に開放されたことにより、日韓両国の距離はグッと縮まっていると言える。しかし、こういった面も存在すると共に日韓の間には竹島問題や今回挙げられた日本海・東海の名称問題、日本の教科書問題など様々な問題が存在している。こういった問題、日本が辿って来た歴史を現代の日本人はどれだけ知っているのだろうか。このようなことを知っている日本人は少ないのではないかと考える。今後、日韓がますます友好関係を築く上で、日韓の間にある問題や辿って来た歴史を知っておかなければならないと改めてそのように思った。

一緒に活動してきた 11 名の皆さんへ

今回、皆さんと一緒に活動できて本当に良かったと思います。今まで大学生活を送ってきて一番、達成感を感じることができました。まだまだディベーターとしては未熟な私ですがこれからもよろしくお願いします。

佐藤 恵

高橋 隆太 (3年・アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ所属)

私は現在授業で韓国語を学んでおり、また日本と韓国を含めた東アジアの歴史や国際関係にも関心を持っている。現在の日本、韓国、北朝鮮、中国、ロシア沿海地方など、北東アジアと呼ばれる地域は、古くから政治的、経済的、文化的に交流があった。それは多くの面で発展をもたらしてきたが、歴史の中では争いや国際的問題も発生し、現在でも解決されていない問題も存在している。

私はそのような歴史や問題についてより深く理解し、現代の世界や将来への課題を探りたいと考えていた。

このようなときに、今回の企画についての知らせを受けたことがディベートに参加するきっかけだった。

さて、今回のテーマは日本海の名称問題についてであった。これは日本で日本海と呼ばれている海が、韓国では東海と呼ばれ、諸外国でも表記に違いが出ているということであるが、一般的にあまりなじみのない問題ではないだろうか。私自身、この問題について少し聞いたことがあるだけで、あまり深く学んだことはなかった。しかしこの問題を含め、現在日本と韓国の間で歴史認識の違いによる対立がある。

両国の良好な関係の構築、そして相互発展のためには、双方の歴史や社会の状況を正しく認識する必要がある。そのうえで正しい認識・理解をしなければならない。今回の日韓のディベートに参加し、問題についての情報を集め、話し合ったことは、現代の日韓関係について理解し、これからの社会を考えていくきっかけになったのではないだろうか。もちろんこのことは、現代の歴史問題の一部ではある。しかし今回の企画を通して知識を深めたことは、韓国の社会や考え方を理解していくための要素として意義深いものであったように思われる。

また今回の企画によって始めて大きな場でディベートを行うという経験をした。海遊祭の準備のため、私たちは事前にディベートの練習や資料集めを行ってきた。

このような体験を通じ、人前で自分の意見をまとめ、発表することや、相手に意見を説明することの方法やその難しさを学んだ。これは簡単なことではないが、これからの生活や仕事を行うためにも必要なことであろう。このような意味でも今回の体験は意義があったように思える。

今回の活動を通じて、私は日本と韓国の歴史をめぐる問題についての理解を深め、また討論の方法についても学ぶ、良い機会であったように思う。

日本と韓国は近い距離にあり、様々な面で交流が行われているが、複雑な問題も抱えている。両国の往来が活発になる中、一般市民も両国の正しい歴史や社会を理解することは重要だと考えられる。今回のディベートは、このきっかけになったのではないか。これからの学習や生活を通じ、国際関係や歴史についてもっと知り、外国事情についての理解を深めたいと思う。

寺脇 史人 (4 年・本企画運営責任者・ディベート倶楽部「QCLC」部長)

私は、今回の韓日共同ディベートに参加できたことを誇りに思うと共に、幸せに思っています。そして、この企画に関わる多くの方に感謝しています。特に、韓国人留学生の尹熙媛君には、ディベート倶楽部の引退を飾るこのような素晴らしい企画を提案してくれたことを非常に感謝しています。また同じように、不甲斐ない私の企画運営を支えてくれたディベート倶楽部部員一同、アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ部員一同、本当にありがとうございました。人間一人では何も出来ないということを、皆とやってきて深く再び実感することが出来ました。

さて、今回の企画は、日本と韓国の間が存在する一つの問題を、日本人学生と韓国人留学生が共に、半年間真剣に議論を積み重ねてきました。これは県立大学にとって大きな意味を持つ第一歩であると考えられます。今現在、県立大学内には多くの愛好会・サークル・クラブが存在します。しかし、このような留学生と日本人学生が共に、アカデミックな問題を議論する組織・企画は非常に少ないです。島根県立大学には、日本・韓国・中国・ロシア・モンゴルを専門とされる先生方、北東アジアに関する論文が多く所蔵されているメディアセンター、そして留学生など、北東アジアの善隣関係を議論・研究していくのには最高の環境が整っています。今後この環境を学生が今以上に活かし、私たち 4 年生が卒業した後も、後輩たちの手によってこのような留学生と日本人学生による共同企画が、開催されていくことを祈っております。また、そうすることが大学の建学の理念である「諸科学の総合と社会における実践」の具体的な形の一つにもなると思います。そのような意味で今回の韓日共同ディベートは、今後の島根県立大学において留学生と日本人学生が、共同で何か企画していく上での大きな参考になると思います。

最後に私は今回の企画をもってディベート倶楽部「QCLC」を引退します。4 年間ディベートを通じ論理・弁論と言うものが何なのかを考えてきました。そんな私が考えてきた核心をつく言葉に最近出会えたので、この場をかり紹介したいと思います。

「論理・論理的思想は簡単でいくらでも聞ける。だが、古来より聞き難きものは道なりと言ひ、道理・真理となつてくると実に難しい。なかなか考え難い、言い難い、解し難い。われわれが生きてゆく上に於て先づ目を開かなければならぬことは、この問題である。」

安岡正篤『人間としての成長』より

つまり、私は今まで論理・論理的思想を追い求めていましたが、私自身が本当に追い求めなくてはいけないことは、道理・真理であるということが解りました。この言葉こそ、私が 4 年間ディベート通じて得た真理であると思います。また、今回の韓日共同ディベートにおいても、名称問題の解決法の真理に近付くことできたと考えています。今後は、仕事など実践を通じて、人生における真理・道理を追い求めて行く所存であります。そして、ディベート倶楽部「QCLC」を引き継ぐ後輩たちもこの言葉を肝に命じて、ディベート倶楽部「QCLC」の活動や県立大学を盛り上げて頂ければ幸いです。

馬場 茜 (4年・ディベートクラブ「QC LC」所属)

「活動を終えて」

2002年8月、異文化理解研修でアメリカに行った時の事だった。学校の廊下にはってある世界地図の「Sea of Japan」の文字はペンで消され、「Sea of Korea」と書き直されていた。私にとって「日本海」は当たり前でも、違う背景を持った人が見れば「日本海=日本の海」と捉えて不快に思う人がいる事を知り、ショックだった。思い起こせば2年前の時点で、私はアメリカでこの問題に出会っていたのだ。

縁あってこの韓日共同ディベートに、私はディベート倶楽部「QC LC」の一員として参加する事になった。前半の活動では就職活動やバイト・他のサークルとの兼ね合いで、なかなか参加できなかったため、議論についていくのが精一杯でメンバーには迷惑をかけてしまった。

議論を本格的に始めるまで、私は心の中では韓国側の主張に多少疑問を持っていた。それは、外務省やインターネット上にある日本語の情報だけを収集し、日本側の主張だけしか頭の中に入れていないという落とし穴であった。近年になって世界中に東海という名称をアピールして併記を求めている韓国側の主張に関しては、図り知ることは難しかった。

しかし、この活動が面白い物になったのは、日本語を学んでいる留学生がいらっしゃったからだ。友人が海外で働いている日本人に話を聞いた時、「言語がなければ真のコミュニケーションはできない」と言い切ったそうだ。確かにちょっとした会話ならジェスチャーで事足りるかもしれないが、自分の考えや主張を正確に相手に分かってもらう為には、両者共通の言語を使って、誤解の無いよう選んだ言葉で表現しなければならない。

留学生の方々は韓国側の主張の理由を、韓国の今の流れを、心の奥底にある気持ちを日本語で表現してくれたからこそ、両者の主張に納得でき、「名称統一」という次の議論に進む事が出来たのではないだろうか。

スタートは出遅れたけれど、本番当日は自分なりに充実した議論が出来たと感じている。終わってから「もっと議論を続けたかった」という願望が湧いてきたのである。肯定側はリサーチ不足・相手側反駁への対策不足・そしてメンバーと議論を深める時間が少なかった事が敗因だった。聴衆の皆さんにはもっと聞いて頂きたい事がある！その思いが「もっと議論がしたい」という気持ちにさせたのだろう。

私は改めてこう思った。ディベートは勝ち負けだけが重要なのではない。自分の考えを越え、色んな視点で物事を見て、どれだけ論題について考えを深める事が出来るか。そしてその考えを聴衆に問題提起できるかということが重要なのである。そのきっかけがディベートというものではないだろうか。聴衆の方々はどうな事を感じたのだろうか。確かめることは出来なかった。でも、ユンさんの最後の言葉に対して大講義室に大きく響き渡った拍手を、私は信じたいと思う。

前田 啓介 (4年・アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ所属)

2004年10月16日(土)、島根県立大学第5回海遊祭で日本海と東海の名称を統一するか否かについてのディベートを行いました。メンバーは、ディベート倶楽部「Q・C・L・C」、韓国からの留学生、学生有志、そして、私を含めた「アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ」で構成されています。

今回の論題となった日本海・東海の名義問題、このディベートに参加する以前から知ってはいたのだが、この問題について今回のような形で、しかも留学生を交えて議論するのは初めてのことでした。

当日、私は新名義統一を提案する肯定側につきました。日本海という名義が定着している日本においてはあまり知られていませんが、現在、日本と韓国は、日本海・東海の名義について対立しています。どちらの名義が多く使われているか、早くから使われていたかという両政府の調査も日韓で違ふため、ひたすら水掛け論を行っているという状況です。

最近、日本では韓国ブームが到来し、韓国俳優の受け入れや、韓国へ旅行する人が増加しています。しかし、それらの良い面ばかりが目立ってしまい、歴史的な問題などはどうしても隠れがち(と言うか、見ないようにしている?)です。今回、留学生および「QCLC」から名義問題についてのディベートの話を持ちかけられた時、素直に良い機会だと思うことができました。ディベートに関しての経験は浅いので、その辺の心配ではありましたが、「QCLC」の皆さんから指導を受けるなどして、未熟ながらも徐々に技術をつけていくことができました。

海遊祭当日は、それまでの練習よりよく議論できたのではないかと思います。しかし、否定側から出された問題に対して触れることが出来なかったなど、やはりまだまだ未熟なものでした。今回のディベート参加メンバー全員の共通意見としては、「国際統一名義を提案する」ということにあります。肯定側の準備不足というのもあったのですが、それでも肯定側が勝利を収められなかったのは悔しかったです。

しかし、今回のディベートに参加することで得られたものは大きかったです。資料を集めるうちに日韓両国政府の調査状況なども分かり、名義問題がもたらしている現状や、他国の名義問題にも突き当たりもしました。日韓関係の良い面だけでなく、障害となっている問題を深く調べる良い機会になりました。また、ディベートを使った今回の討論、論理的に話し聞き手を説得するという技法は、将来的にも役立ちそうです。なかなか難しかったのですが、資料の重要さ、話し方など、知ることは多かったです。

日本海・東海の名義について話し合った今回のディベート、何より1年生が積極的に参加してくれたことが嬉しかったです。ほとんど留学生の尹さんと同じ部屋の学生でしたが、こういった国際問題に関心を持ち、ディベートに参加しようという姿勢を見せてくれたことは、今後の島根県立大学としても喜ばしいことなのではないでしょうか。今後もこういった機会が設けられるかは分からないのですが、もし機会があるなら是非積極的に参加して欲しいと思います。

室屋 友則 (1年・ディベート倶楽部「QC LC」所属)

私は大学に入ってこのような経験をするなんて、入学前には思いもしなかったことであり非常に貴重な経験をさせてもらい感謝しています。5月頃、尹さんから紹介されてこのサークルがあることを知りました。私は緊張していましたが、皆さんは優しく迎えてくれたのを覚えています。ましてディベートなんて1・2回くらいしかやったことがなかったのですが、基礎の基礎のから分かりやすく教えてもらいました。

日本海と東海名称統一するか併記するかというテーマが決まったとき、身近な問題ではあるが知識や認識が薄かったというのが本当のところでした。しかし自分なりに、インターネットや書籍などで調べたつもりです。そこで今まで知らなかったことなどがすこしずつではありますが理解できるようになりました。これまでの経験の中で、きちんと考える機会はありませんでしたので今回の機会は本当に自分にとって勉強になりました。夏休みも終わりいよいよ、海遊祭が近づくと組決めも決まり両軍ともに士気が高まって、みんなが集まってひとつの目標に向かって一生懸命になっていました。海遊祭の2週間前には尹さんの会社の小松昭夫社長さんと話をする機会もありました、そこでは、日ごろ聞けないことも耳にすることができました。

そしていよいよ海遊祭がやってきました。私はこの問題のプレゼンテーションをすることになりました。たくさんの人の協力を得て原稿を完成させることができました。そして説明は何とかすることができました。ディベートでは一回発言しましたが、もうちょっと発言できたのではないかと思います。

このディベートをやった感想は本当にいい経験をさせてもらったということです。またもう一度この問題について自分から調べてみようと思いました。最後にこのような体験をさせてくれた、寺脇さんをはじめ多くの人に感謝したいと思います

尹 熙媛 (4年・韓日共同ディベート企画立案・総合責任者)

『韓日共同ディベート』を終えて

今年5月に『韓日共同ディベート』を企画してから、みんなと悩んだり、喜んだり、助け合ったりして、ようやく10月16日の学園祭で『韓日共同ディベート』を無事に行うことが出来ました。最初にこの企画を考えたときにはうまくいけるかと心配もありましたが、みんなの力を信じて今日まで歩んでくることができました。

この企画を立ち上げるにあたり、きっかけを与えてくださった方がいました。その方は小松電機産業株式会社の社長でいらっしゃる小松昭夫氏でした。小松社長は「今、あなたの立場を考えてみなさい、日韓友好関係と世界平和のため問題意識を高め、みんなと話し合って議論することができる絶好の立場ではないか」そして、「変化というのは他人が変えてくれるものではない、自分の力で変えることに真の意味がある」などとお話を聞かせて

いただきました。正直にその時まで、私は留学生という立場であり、日本の方とのトラブルや議論に巻き込まれたくなく、日韓の間の問題意識を抑えてきたのが事実でした。そんな中で、聞かせてもらった小松社長のお話は私が今まで忘れてきた、留学生の本分の役割を見つめ直させてくれましたし、また、新たな自分を発見させてくれました。

そこで、その気持ちを忘れずに、日本人学生と『韓日共同ディベート』を企画するようになりましたし、それによってお互いの問題意識を高めたいと思いました。幸いに良い仲間ばかりと出会い、国境を越えた友情まで得ることができて、人生の中でこれ以上のプレゼントはないと思います。最初から今まで共に頑張ってくれたメンバーたちにはこの場を借りてお礼を申し上げたいです。本当にありがとうございました。そして、これが終わりではなくこれからまた、新たな問題意識に向けての出発点になってほしいです。

最後に今回の『韓日共同ディベート』を自分なりに評価してみたいと思います。

一良かった点：

- ①日韓の大学生が一つの問題意識をもって一緒に悩み、努力するうちに共同意識もち、新たな文化の形成を生み出す希望を見付けたこと。
- ②お互いの立場と主張を知ることができ、それに対する対応策とこれから進むべき道が見えた。
- ③『韓日共同ディベート』を通してもっと多くの方々が、このような問題に興味を持ってくれたので、もっと幅広いネットワークを築けることができた。
- ④一生の忘れない永遠の仲間を得たこと。

一反省点：

- ①本番の時、無意識の中に勝負心理が高まり、細かい問題をしつこく攻撃し、幅広い議論になれなかった。
- ②メンバーの中で、自分の意見に対して遠慮すぎて、あまり発言できなかった人がいたので、バランスある発言ができなかった。今度からはもっと自信をもって発言できるように訓練が必要である。

—以上—

渡邊 郁夫 (1年・ディベート倶楽部「QCLC」次期部長)

今回、私が韓・日共同ディベートに参加させてもらうきっかけになったのは、企画者である尹(ユン)さんから私もこの企画に参加してみないかと誘っていただいたことです。私はアジアにおける諸外国の関係と平和について興味がありましたが、初めこのお話を尹さんからされたときに私は悩みました。なぜなら私は韓国と日本の関係についてそれほど詳しい知識は持っていませんでしたし、大学に入りたての私なんかがそのように大きく、またシビアな問題に首を突っ込んでいいものなのかと考えたからです。私は一週間以上考えた結果、参加させてもらうことにしました。それは、尹さんの韓国、日本に対する想い

の深さを知ったことと、私自身、失敗を恐れ何もできないような態度ではこれから先も何も得ることはできないという考えに至ったからです。現在おかれている状況をしっかりと考えた上で失敗を恐れることなく挑戦しようと思いました。

この企画に参加させていただくことにしてから実践的なディベートの練習と日韓における歴史的な事実を確認するという作業が始まりました。初めのうちは「人に見せられるようなディベートはできていない。」とディベート倶楽部部長の寺脇さんに指摘されていました。初めてのことで当然と言えば当然ですが、そのようなことも言っているほど時間は余ってはいませんでしたから、私は相当焦っていました。しかし本番まで何度も何度も練習を重ね、きちっとしたディベートをすることができました。また立論まで任せていただいき、なかなかよいものをつくれたことは偏に気を長くご指導をしてくださったディベート倶楽部の皆さんのおかげでした。

また、10 月に入りチームに分かれて会合を開くようになってからは石原さんや足田さん、尹さんがチームをひっぱり、私はただただついていくことに必死だったように思います。本番ではより深いディベートにしようと私も精一杯討論させてもらいました。結果として私は大変満足しています。この何事にも変えがたいほど貴重で、楽しい時間をみなさんと共有できたことはいつまでも私の心の中で輝き続ける大事な記憶となるでしょう。これまで私を支えてくださったみなさま、大変感謝しています。みなさんとともにこれだけのものを作り上げることができたことを幸せに思っています。この経験が無駄にせず、私は私らしい人生を歩み、外の世界にあるものを掴みとっていかうと考えています。

最後に、今回私にこのような機会を与えて下さった尹さんにお礼を言わせていただきます、どうもありがとうございました。

おわりに

今回の日本海・東海の名称問題に関するディベートは、島根県立大学で初めて留学生も交えたディベートとなりました。そのため、学生間でこういった問題を扱うということは、北東アジアに焦点を置く本大学の方向性に沿った論題だったのではないのでしょうか。また、今回のディベートに参加したメンバーはもちろん、当日聴きに来てくださった聴衆の方々にも何かしら心境の変化があったことと思います。少なからず、今回取り上げたような名称問題が現実にあるのだということを意識し、関心をもていただけたのならば、メンバー一同嬉しく思います。

最近韓国ドラマなどの影響により韓流の波が日本に到来し、日本人も韓国の人や文化に興味を抱いてきています。しかし、実際には今回取り上げたような日本海・東海の名称問題、竹島（韓国では「独島」）などの歴史的な問題が未解決のまま残され、日韓関係に悪影響を与えているという現実もあります。こういった問題を蔑ろにしては本当の友好関係は築けないと考えます。そこで私達は、今回のディベートを通じて日本海・東海の名称統一を提案しました。

今回は韓国人留学生 2 人を交えてのディベートとなりましたが、今後もこのような他国の学生を交えて国際問題解決の糸口を探る企画が、ここ島根県立大学で盛んに行われることを期待します。

最後に、この文集を最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。また、協力してくださったたくさんの皆様、当日ディベートを聴きに來てくださった聴衆の皆様にも感謝の意を表明し、おわりの言葉とさせていただきますと思います。

アンニョンハセヨ韓国文化研究クラブ

前田啓介

参加者一同

(本番後に大講義室にて撮影 撮影者：田中輝美様)



島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科

第 5 回海遊祭 韓日共同ディベート「日本海・東海の名称を統一すべきか、否か」報告文集

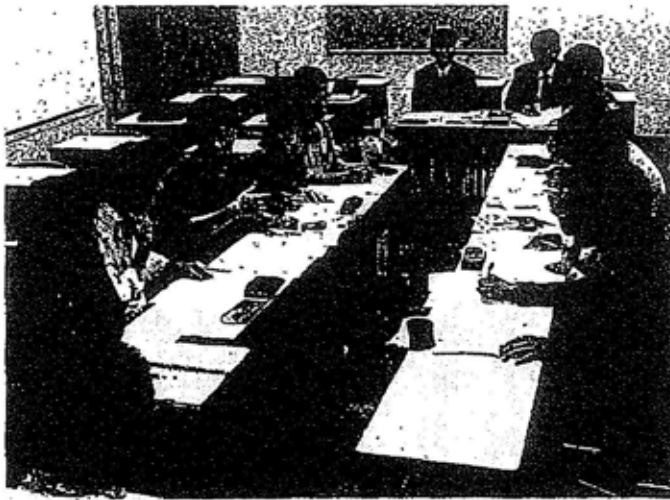
韓日共同ディベート参加者一同 発行者

馬場 茜 表紙

2004 年 10 月 26 日 発行

資料

2004年(平成16年) 10月16日(土曜日) 山陰中央新報



県立大

論争続く「日本海」呼称問題

きょう日韓学生が討論

日本と韓国の間で論争が続く「日本海」の呼称問題。日本は十九世紀に世界問題をテーマに、日韓の大学生が十六日午前十時半から浜田市野原町の県立大で公開ディベートを開く。「日韓両国がお互いを考えるきっかけになれば」とメンバーは熱い願いを込めている。

日本海呼称をめぐる日本海は、韓国は植民地主義の結果と主張し「東海」

日本海の呼称問題をテーマに本番前から意見を戦わせる学生

への変更が併記を要求。日本は十九世紀に世界で広く使われ始め、日韓併合とは歴史的に無関係として、平行線のまま。

メンバーは同大のディベート倶楽部「Q・C・L・C」と「アンニョンハセヨ韓国文化研究クラ

乙、韓国留学生二人の計十二人。「対立のままでは不毛。日韓の懸け橋になりたい」と韓国出身の四年生尹熙媛さん(三十九)が発案、五月から準備を進めてきた。

当日の題は「日本海・東海名称を統一すべきか否か」。勝敗は来場者のジャッジで決める。

議長を務める四年生寺脇史人さん(三十九)は「時にぶつかりあひながら真剣に準備してきた。浜田でも国際化が進む中、日韓の問題に注目してもらいたい」と会場を呼び掛けている。

2004年(平成16年) 10月17日(日曜日) 山陰中央新報

県立大学園祭

「日本海」呼称テーマに

日韓学生が公開討論

浜田市野原町の県立大学で十六日、学園祭「海遊祭」が開幕し、サークル活動展示や模擬店など多彩なイベントが開催された。中でも「日本海」の呼称問題をテーマにした公開ディベートでは日韓の学生が激しく意見を戦わせ、国家間の問題を身近に考えるきっかけを示した。

ディベートは「日本海」や看板などを改訂するた

・東海名称を統一すべきか」をテーマに開催。呼称問題は「東海」への変更が併記を要求する韓国側と、日本側の主張が対立している。

学生たちは、名称統一の肯定側と否定側に五人ずつが分かれ、議論を展開。肯定側は▽名称による対立のしこりがなくなる▽名称統一に伴い地図や看板などを改訂するた

め経済効果が生まれる」と主張。否定側は、韓国の国歌に「東海」が登場することなどを挙げ、親しみある現在の名称が変われば国民のアイデンティティーが喪失すると反論した。

会場を埋めた四十人の聴衆が、個人の考えではなくどちらの主張がより論理的であったかをジャッジした結果、



「日本海」の名称統一の肯定側と否定側に分かれ、活発に意見を戦わせる学生たち

否定側に軍配が上がった。

企画した同大ディベート倶楽部「Q・C・L・

C」の寺脇史人部長は「盛り上げていくきっかけは「留学生と一緒になったのでは」と話して企画した。日韓関係を」した。

読売新聞 2004年(平成16年) 10月17(日)

新

聞

石見 地域ニュース (34)

石見

浜田支局

〒697-0027
浜田市殿町17
の3 日本興亜
浜田ビル4F

☎0855-22-1101

FAX 22-1102

松江支局

〒690-0886
松江市母衣町
95の1

☎0852-23-1411

FAX 23-1413

通信部

大田 0854-82-0451

益田 0856-23-7331

出雲 0853-22-3388

名称巡り公開討論

統一か併記学生熱弁

県立大大学祭

日本海? 東海?

『日本海』という名称が使われているなど反論している。討論は同大の韓国人留学生が発案し、ディベート倶楽部や韓国文化研究クラブなどの協力で実現。『日本海・東海』の名称を統一すべきか、否かこのテーマで、韓国人留学生二人と日本人学生八人が肯定と否定に五人ずつ分かれ、双方に留学生が一人ずつ加わった。

肯定側は「二〇〇八年までに『東海』という名称で統一し、それまでは暫定的に『日本海』と『東海』を併記する」と主張。友好関係が築け、観光客増などの効果も見込めるとした。一方、否定側は「永続的

では本来の意味で友好関係は生まれない」と強調した。討論後、会場で挙手による判定では、否定側が優勢だった。ディベート倶楽部長の四年寺脇史人さん(22)は、「微妙なテーマだったが、日韓関係を考えるきっかけになったのでは」と話していた。

同祭は十七日まで。

浜田市野原町の県立大で十六日、大学祭「海遊祭」が始まり、初日は、日韓で論争になっている『日本海』の名称をテーマに、両国の学生が大学祭で公開討論を繰り広げた。

韓国側は、日本海という名称が「植民地時代に世界に広められた」として、同国で使われている『東海』か、日本海との併記を主張。これに対し日本側は、「十八世紀ごろから世界地図で



日本海の名称について主張する学生ら(浜田市の県立大で)

등록 1990년 11월 16일 / 등록번호 부산라·01159 / 발행 2006년 7월 1일 / 정가 3000원

시민시대

통권 261호

7

A journal exploring
the frontiers of monthly magazine

2006

활빈당식 경제정책의 실패와 철학의 빈곤 5.31 지방선거 평가와 향후 정국 전망 존폐의 기로에 선 러일전쟁 승전탑



韓·中·日의 平和運動展開하는
日本の 中小企業人 小松昭夫(코마츠 아키오)氏
법정에 간 기장문화원의 반문화적 작태



필자는 지난 3월과 4월 두 차례에 걸쳐 독도영유권 문제로 우리들에게 많이 알려진 일본의 시마네(島根)현을 방문한 바 있다.

3월 10일의 첫 방문은 財團法人 人間自然科學研究所가 주최한 「平和 環境健康特別區」신청 특별 국제 심포지엄에 참석하기 위해서였다.

필자가 이 행사에 참여하게 된 동기는 木曜學術會의 회원인 李斑錫 先生の 권유로 비롯되었다. 일본의 역사와 문화에 識見을 가진 李先生이 우연한 기회에 인간자연과학연구소의 이사장이면서 小松電氣(株) 社長인 코마츠씨와 그의 독특한 활약을 접하면서 한번 만나보기를 권했기 때문이다.

하지만 필자는 개인적 인간관계로 그를 만나는 것 보다는 公的이고 명분이 있는 만남을 통해 필요에 따라 「시민시대」에 다루어 볼 작정으로 李先生을 포함한 10명의 한국인 참가단에 합류했던 것이다.

부산에서 시마네현으로 가는 길은 단순하지 않았다. 김해공항에서 인천공항, 일본 돗토리현의 요나고 공항을 거쳐 시마네현의 중심도시인 마쓰에(松江)시로 들어가야 했다.

부산에서 아침 7시에 출발하여 목적지 마쓰에시까지 5시간이 소요된 정오쯤에 도착한 것이다. 요나고 공항에는 코마츠 이사장과 연구소 직원이 나와 우리 일행을 편안하게 맞아주었다.

오후 2시부터 심포지엄이 개최되는 것을 감안하면 그 행사를 총괄할 코마츠 사장이 공항까지 나온 것은 그 만큼 우리 일행에 대한 그의 각별한 관심을 드러내기에 충분한 것이었다.

필자의 두 번째 시마네현 방문은 4월 23일이었다. 지난 3월의 방문은 심포지엄 참석과 코마츠 이사장에 대한 정보수집이었다면 4월 방문은 그에 대한 취재가 목적이었다. 두 번째 걸음이라 단신으로 갈수 있었지만 한국의 사업 동반자인 조수환 동우기연(주) 사장이 동행했다.

두 번째의 방문 때도 요나고 공항에는 코마츠 이사장이 우리를 기다리고 있었다. 짧은 기간 동안 외국인과의 재회는 드문 일이었다. 3월의 만남은 공식적인 틀 안에서 이루어지다보니 개인적 친분을 나눌 수 없었을 뿐 아니라 국제행사를 마련한 그로서는 개인적 관계에 한계가 있을 수밖에 없었다.

두 번째 그와의 만남은 차림새부터가 편안했다.

필자가 한 달여 사이 두 차례나 그를 만나고 취재에 관심을 기울인 것은 중소기업인으로서 그의 삶이 독특할 뿐만 아니라 기업인으로서의 행동반경이 한국기업인들에게 값진 교훈을 줄 수 있는 하나의 전형(典型)이 될 수 있으리라는 기대 때문이었다.

사실 그에 대한 여러 가지 자료를 수집하고 그의 이름을 딴 회사를 방문, 답사하면서 필자는 한국과 숙명적으로 결끄러울 수밖에 없는 일본인에 대한 취재를 하는 것이 과연 타당한 일인지 몇 번이나 고개를 주억거리면서 망설이곤 했다.

하지만 필자는 한사람의 일본인이기 이전에 자유와 평화의 가치를 신봉하고 역사의 가르침을 새기며 문화를 사랑하는 품격을 갖춘 특별한 존재를 조명하는 것이야말로 「시민시대」 독자들에게 색다른 화제가 될 수 있을 것이라 생각했다.

코마츠(小松), 그는 누구인가

한자풀이로 보면 그의 이름은 작은 소나무라는 뜻을 지니고 있다. 이 같은 뜻을 연상해 보면 일본의 전통적인 분재에서 볼 수 있는 양증맞은 소나무를 그려볼 수 있을 것이다.

올해로 62세의 그는 전형적인 일본인의 풍모를 가진 사람이다. 작달만한 키에 조금은 마른



▲ 코마츠씨의 창업 고사 장면

체형이 왜소해 보이긴 하지만 전체적으로 그에게서 풍기는 체취는 강건한 의지가 꼭 찬 단아한 이미지를 느끼게 하는 사람이다. 그러면서도 촌스러운 순박함이 물씬 하면서 온화함이 드러나 부담스럽지 않은 인상이다. 세상에는 이 같은 유형의 사람들 가운데 출중한 인물들이 많은 것을 볼 수 있는데 이를테면 자질구레한 일상사는 따뜻하고 유연하게 하면서 결정적인 승부를 해야 될 경우는 냉정하고 단호하게 대응하는 스타일을 말할 수 있을 것이다. 그와 많은 시간을 보내지는 않았지만 공식, 비공식 자리의 다양한 분위기에서 그의 행동양식을 관찰한 바로는 그는 분명 걸출한 인물들이 지닌 공통적인 분모를 가진 사람임에 틀림없었다. 그가 태어난 곳은 시마네(島根)현에서도 山村이라 할 수 있는 <야츠카 군야쿠모>라는 곳이었다. 시마네의 뜻은 섬의 뿌리다. 섬나라 일본열도의 뿌리로 해석되어 일본의 역사에 신화적 요소가 있는 것이 아닌가 생각되었지만 예부터 한반도와 얽힌 역사의 뿌리는 우리가 아는 것 이상으로 깊이 박혀있었다.

특히 이즈모(出雲)시에 자리한 이즈모대신사에 대한 전설적 신화는 이 지역 사람들에게 한반도와의 운명적 관계를 되새김질하게 만드는 상징적인 곳이었다. 하지만 시마네란 이름은 최근 한 일간에 독도영유권 문제가 비등하면서 한국인들에게 각인 된 곳이다. 그들이 자기들의 영토라고

주장하는 독도는 그들 이름으로 다케시마(竹島)로 규정되어 그 행정구역이 시마네현에 소속되기 때문에 독도문제가 불거질 때마다 시마네현이 오르락내리락하여 어쩌면 그 지명은 이제 한국인들에게 고약한 이름으로 비쳐지고 있다.

역사적으로 현실적으로 불가분의 관계에 있는 이곳은 일본의 도(都)·부(府)·현(縣) 중에서도 소득수준이나 문화수준이 중위권을 유지할 정도로 비교적 물산이 풍족한 곳이다.

그리고 자연적인 환경은 일본 유수의 경승지에 비해서도 전혀 손색이 없을 뿐 아니라 오히려 월등한 조건이라 해도 과언은 아닐 듯하다. 시마네현 전체로 보면 사포지향(四抱之郷)이라 할 수 있다.

山과 江, 바다 그리고 일본 어디에나 있는 아주 뛰어난 온천을 갖춘 곳이다. 여기에 세계제일의 은광(銀廣)을 비롯, 일본에서도 철(鐵)생산지로도 잘 알려져 있을 뿐만 아니라 일본 제일의 쌀(人多米)가 생산되는 곳이기도 하다. 또한 한국의 질 좋은 재첩이 대량 채취되고 그 밖에 바다와 강이 어울리는 중해(中海)와 신지호에서의 풍부한 물산은 이 지역이 가진 아주 우수한 경쟁력이다. 특히 시마네현의 중심도시인 인구 약 25만의 마쓰에(松江)시는 한마디로 중해와 신지호에 둘러싸인 물의 도시로 네덜란드의 수도 암스테르담을 연상시키기에 족했다.

필자는 두 번째 방문때 코마츠씨의 초청으로 마쓰에시(松江市)의 정통 일본요리집에서 저녁을 함께 할 기회를 가졌다. 도착한 날의 저녁이었다. 그 요리집은 규모가 크지 않은 5층 빌딩이었다. 빌딩전체가 요리집이었는데 빌딩이 얇은 자리가 절묘했다. 1~5층까지 각 층에서 호수를 바라보고 마쓰에 시를 전망하기에 좋도록 치밀한 각도로 설계된 건물이었다. 가는 날이 장날이라고 일요일, 그 집은 쉬는 날이었지만 시마네현의 기인이며 유력인사인 코마츠사장의 특별한 부탁



으로 그의 일행을 위한 개점이 이루어졌다고 기
모노를 착용한 중년 접대부가 귀뜸을 해주었다.
특별한 대접을 받는다고 생각하니 머쓱하기까지
했지만 땅거미가 내려앉는 석양의 신지호를 바
라보면서 그의 특별한 배려에 고개를 조아릴 수
밖에 없었다. 과히 환상적인 야경이었다. 술이 빠
질 수 없었다. 평소 술을 즐기지 않는다는 코마
츠 사장도 멀리서 찾아준 벗들과 어울리기 위해
작정이라도 한 듯 술을 사양하지 않았다. 역시
음주란 어디서 누구와 함께 하느냐가 술맛을 달
리할 수밖에 없다는 걸 실증시켜주는 자리였다.

그리고 다음날 아침, 조강을 위해 일찍 일어나
호텔 정문을 나섰을 때 코마츠씨의 주도면밀한
배려를 이내 알 수 있었다. 호텔 앞 큰 차도 건너
맞닿은 호수에 수백 척의 재첩잡이 배들이 이제
막 동해 저편에서 떠오르는 햇살이 호수를 물들
이며 남실대는 광경이 순식간에 밀려오면서 필
자를 움짱달짝 못하게 하는 것이 아닌가. 참으로
신비한 광경이었고 황홀감에 닭살이 돋는 것 같
았다. 바로 이 세계를 음미하라고 전날의 요리집
과 호텔을 선택해 주었구나 하는 생각이 머리를
스쳤다. 얼마나 자신의 고향을 사랑하고 자랑스
러워하는지 그 몽클한 마음 흡족하게 헤아려야
했다.

이같이 수려한 자연환경을 배경으로 성장한 코
마츠씨는 1963년 시마네현립 마쓰에 공업고등
학교를 졸업하고 10여 년간의 직장생활 후 그의
출생지에서 작은 사업을 시작했다.

1973년 불과 10만 엔(한국돈 100만원)의 현
금과 중고차 한 대, 공구상자 하나로 그의 동생
(현 코마츠 전기상무)과 시작한 사업이 일본전역
에 대리점망을 구축하는 알짜배기 중소기업으로
뿌리를 내리게 된 결정적 계기는 1985년 개발한
스피드 샷터에서 비롯되었다. 이 새로운 제품은
한때 일본시장의 60%이상을 점유하는 괴력을 보
여주면서 그의 기업은 일약 성공한 벤처기업으
로서 언론과 경제계의 비상한 주목을 받았던 것
이다. 그 역시 이러한 성공에 힘입어 기업을 부
동의 반석위에 올려놓았을 뿐 아니라 개인적으
로는 많은 부(富)를 축적할 수 있었던 것이다.

한국기업에 무상으로 기술이전

그가 개발한 스피드샷터는 우리 주변의 상가
나 공장 등에서 흔히 볼 수 있는 방법용 철재 샷
터와는 그 재료부터가 달랐다. 특수 비닐제품의
반투명제로 무게가 가벼운 것으로 스위치를 조
작하는 순간 열리고 닫히는 기능을 가진 것으로
철재에 비해 설치조건이 용이하고 경제적이어서
수요가 폭발한 것이다. 그의 제품이 일본에서 성
공을 거두고 있을 때 한국의 이 방면 사업가 한
사람이 조용히 시네마현으로 잠입하여 코마츠 사
장을 만나 기술이전을 조심스럽게 타진했다. 조
수환이라는 40대 초반의 사업가가 그를 찾은 때
는 1990년이였다.

물론 조 사장은 국제관례대로 소정의 로열티



▲ 코마츠씨가 인솔한 방문단의 독립기념관 답사

를 지불한다는 전제로 코마츠 사장과 상담을 시도했다고 한다. 그런데 어떻게 된 영문인지 조 사장의 상담을 받은 그는 조건 없이 그 기술을 무상으로 이전해 주겠다고 한 것이다. 조 사장으로서 코마츠 사장의 예상치 못한 결정에 어리둥절할 수밖에 없었을 것이다. 하지만 그것은 사실이었다. 물론 일본에서 성공한 기술이 한국에서 100% 성공한다는 보장은 없지만 당시의 상황으로 그 기술을 한국에 가져오면 때돈을 벌수 있을 것이라는 기대는 클 수밖에 없었던 것이다.

코마츠 사장이 한국에 무상으로 기술을 이전한 것은 특별한 연유가 있었다. 역사적으로 오랜 옛날 일본은 한국으로부터 많은 은혜를 입었음에도 불구하고 몇몇 어리석은 정치지도자들이 한국을 침략하고 지배하므로써 한국민들에게 말 못할 고통과 시련을 안겨준 것에 일본인의 한 사람으로 부끄러움과 죄책감을 느끼고 있다면서 자신의 능력이 미치는데 까지 한국에 보상을 하고 싶은 심정에서 그랬다는 것이다.

필자는 1억2천만 일본인 가운데 코마츠씨 같은 생각을 가진 사람이 또 있을까 생각해 보았

다. 국제 사회에서 이코노미칼 애니멀 (Economical animal)로 회자되는 일본인의 이 해타산적 생리로 볼 때 코마츠씨와 같은 생각을 가졌다면 그건 분명 일본인의 별종이 아닐까 생각해 보았다. 참으로 독특하고 기특한 사람이 아닐 수 없다.

향토사랑운동에 헌신

코마츠 사장의 기업가로서의 성공이 더욱 빛을 발하는 것은 그의 기업이 수도권이나 대도시 주변에 있는 것도 아닌 지방에서 전국적인 히트 제품을 생산했기 때문일 것이다. 한국에서도 간간히 제반여건이 열악한 지방에서 기업을 일으켜 성공하는 예도 간혹 있지만 딱이나 어려운 일이다. 일본 역시 지방에서 전국적인 수요를 창출하는 기업을 경영하는 데는 적지 않은 애로가 있는 것은 어쩔 수 없는 지방의 한계상황이라는 것이다.

더구나 농업이나 수산업, 광업 등 1차 산업이 주종을 이루고 있는 시마네현의 특성으로 보아



▲ 코마츠이사장 일행의 백범 김구선생 기념관 답사

그의 성공은 시마네현의 자랑일수도 있을 것이다.

아무튼 그의 성공은 그에 걸맞는 사회적 객관적인 평가를 끌어내었다.

1991년 〈중소기업연구센터상〉, 〈뉴비즈니스대상〉, 〈지역사회공헌기업인상〉을 비롯하여 일본 경제신문의 〈지역 활성화 공헌기업상〉등 권위 있는 공식기관에서 전국 기업인을 대상으로 하는 굵직굵직한 상을 수상하는 기염을 토했다. 그가 받은 상증에서 지역사회공헌과 지역활성화 공헌 부문이 유독 눈에 밝히는 것은 일개 중소기업인이 자신이 사는 지역을 위해 얼마나 대단한 업적을 쌓았기에 이런 상이 주어지는지 주목하지 않을 수 없었다.

우선 그의 지역발전을 위한 일들을 대략 살펴 보아도 나열하기가 벅찰 정도다. 대표적인 몇 가지만 소개한다.

시마네현의 상공회와 협력하여 젊은 경영인 20명을 규합하여 「지혁숙(知革塾)」이란 조직을 결성하여 지역경제활성화를 위한 상호 정보교류와 학습활동을 주도했고 업종을 달리한 유력한 지

역의 7개 회사를 협동조합으로 묶는 「테크노쿠니비키」를 설립하여 기업의 특성을 극대화시켜 상생의 메커니즘을 정립, 지방기업의 경쟁력을 제고시키는 활동을 이끄는 것을 비롯하여 1994년의 「한 마을 한 지혜운동(一村一志運動)」, 1995년 시마네현의 역사에 전설적인 치수(治水)의 위인 「스도야헤에」의 위인전을 소설과 만화, 아동문학으로 출판했으며, 1998년에는 역시 시마네현의 역사적 인물인 치수(治水)의 위인 「키요하라 타헤에」에 대한 소설, 만화, 아동문학을 출판했다. 예부터 시마네현은 물난리가 많아 물을 다스리는 것이 생존과 직결된 문제였다고 한다. 그런데 앞서 인용한 두 사람의 치수의 위인은 국가의 녹을 먹는 관리(官吏)도 아닌 평민의 신분으로 물을 다스리는데 평생을 바친 사람들이라는 점에서 더욱 큰 의미를 부여하여 시마네현 사람들은 이들을 거의 우상으로 기리고 있다.

코마츠 사장은 이들 위인들에 대한 출판 사업을 비롯하여 이들의 업적을 재평가하는 학술행사는 물론 이들의 동상까지 제작하는 향토사랑에 극치를 보여주었다. 특히 이와 같은 추모 사



▲ 코마츠씨가 대한적십자사를 방문 북한주민돕기 성금전달

업은 적지 않은 예산이 투입될 수밖에 없다는 점에서 시업의 이윤을 격조 있는 고향사랑에 환원하는 코마츠씨의 식견과 안목은 누구나 가질 수 있는 차원이 아니라는 점에서 높이 평가되고 있다.

재단법인 인간자연과학연구소의 설립

1994년 설립된 이 연구소가 지금까지 시행한 사업은 놀라움을 금치 못하게 한다. 코마츠씨가 설립 이래 이사장을 맡고 있으면서 펼쳐온 사업은 모두가 그 자신이 기획하고 주도한 것으로 볼 수 있다. 그의 인생관과 기업관, 그리고 철학과 신념이 고스란히 배여 있었다. 재벌이나 대기업 규모도 아닌 직원 100여명 미만의 중소기업이 얼마나 많은 이윤을 창출하는지는 알 수 없지만 엄청난 자금이 소요되는 사회사업을 알차고도 꾸준히 추진할 수 있다는 것은 한국의 대기업도 실행에 옮기기가 쉽지 않은 일이다. 이러한 뜻있는 사업들이 간단없이 지속적으로 이루어지고 있다는 것은 경영주의 국가와 사회에 대한 무한한 사명감이 발동되지 않고는 불가능한 일이다.

이 연구소가 설립된 지 올해로 12년, 그동안 국내외적으로 실행한 사업실적을 보면 그 규모나 질에 있어 모든 사업이 뚜렷한 목적과 명분을 담보하기에 충분하다.

먼저 연구소가 설립된 해에 개최한 「神在月緣

結び 世界大會-신들이 모이는 달에 인연 맺기 세계대회」를 들 수 있다. 이 대회는 아주 신화적인 전설을 현대화한 상징적 이벤트로 볼 수 있는데 그 내용은 시마네현 이즈모시에 있는 이즈모신사에는 매년 10월이 되면 일본전국의 신들이 모여들어 그 곳에서 신들이 남, 여 간 뿐 아니라 참석한 사람들의 인연을 맺어주는 상의를 한다는 것이다. 참고로 이즈모신사(出雲大神社)는 일본의 천황이 순례할 정도의 국가적 신사다. 이러한 신화적 전설을 배경으로 코마츠 이사장은 일본전역은 물론 국제사회의 높은 이상을 가진 인물들이 모여 새로운 시대를 창조하는 만남의 장을 만드는데 그 목적을 두면서 지금까지 6회에 걸쳐 이 행사를 개최했다.

다음으로는 세계적인 마크로 비오테크(Micro Biotech)지도자 큐시 미치오(久司 道夫)박사를 초청한 「사람·물·음식」 국제심포지엄, 「中海·平庄工區의 미래구상」 심포지엄 등 국내외 차원의 심포지엄 및 세미나를 십여 차례 개최한 것을 비롯하여 수십 회의 강연회도 개최했다.

그리고 앞서 언급한 지역위인들의 전기를 여러 장르로 출판 하는가 하면 공자의 「논어」를 일·중·영어로 번역하여 출판하기도 하는 등 다양한 출판사업도 만만치 않았다.

한국 독립기념관에 100만 엔 헌금

필자는 코마츠 이사장을 취재하고 그에 대한 자료를 살펴보면서 문득 이런 생각이 떠올랐다. '세상에는 참으로 별의 별 사람도 다 있고 희한한 사람들도 많구나' 도대체 이 사람의 시작은 어디며 또 그 끝은 어딘지 종잡을 수 없었다. 그의 사고와 행동패턴은 어쩌면 질서정연하고 논리적, 순리적, 이성적인 것도 같고 또 다른 면으로 전형적인 하고잡이들의 형태처럼 상식적 수준에서 집히는 대로 이것저것 모두 챙겨야 직성



▲ 일본 최대의 중국정원「연조원」에 세워진 공자·맹자 동상

이 풀리는 의식과 감정의 기복이 주체 할 수 없을 정도로 극심한 타입이 아닌지 수시로 헛갈렸다.

하지만 그가 살아온 궤적을 견주어 볼 때 그는 일관되게 이상을 추구한 사람이라는 점을 발견 할 수 있었다. 그렇다고 마냥 부유하는 꿈을 좇는 환상주의자도 아닌 냉혹한 현실의 바탕에서 자신의 나라와 고장, 그리고 일본과 지리적, 역사적, 경제적으로 불가분의 관계가 있는 이웃 나라를 위한 이상적 목표를 향해 왕성한 활동을 마다하지 않고 있는 것이다.

그가 1997년 한국의 독립기념관을 방문하여 자신의 선인들이 저지른 잘못을 통렬히 뉘우치고 용서를 구하면서 100만 엔(우리돈 1천만원 상당)을 현금으로 낸 행위는 일본인 누구도 할 수 없었던 엄정한 역사에 대한 자각과 진심으로 속죄하는 진정성 있는 참회 행위였다.

그런데 그가 이런 참회의 예를 갖추게 된 우연의 해프닝이 있었다고 한다. 사업상 서울을 방문한 길에 택시에서 당한 봉변에서 한국인의 일본에 대한 철천지한(恨)이 얼마나 깊은 것인가를

절감하고 일본인으로서의 부끄러움을 뼈저리게 느꼈다는 것이다. 하지만 이 같은 해프닝은 만에 하나 일수 있다. 일본의 식민정책을 경험하고 일본으로부터 고통을 직접적으로 감수했거나 그들의 직계자손이 아니면 대부분의 한국인들은 속으로는 일본인을 싫어하지만 일본인을 앞에 두고는 그 같은 내색을 하지 않는 것이 통례다. 어쩌다 코마츠 사장은 만에 하나의 경우에 걸려들고 말았던 것에 불과했다. 그러나 그로서는 충격이 이만저만이 아니었던 모양이다. 그로부터 그는 일본이 노략질을 한 한국·중국 등에 유별난 관심을 기울이기 시작한 것이다.

또한 그러한 계기가 앞서 언급한 자신이 개발한 제품의 기술이전을 아무런 대가도 없이 한국에 이전시키는데 작용한 것이다. 그 후 그는 자신뿐만 아니라 시마네현의 지도자 수십 명을 초청하여 독립기념관, 서대문형무소, 백범김구 기념관을 방문했는가 하면 대한적십자사를 찾아 북한동포돕기 성금도 접수 하는 등 일본의 양심을 전하는데 성의를 표하는데 최선을 다했다.

공자·맹자 동상 세운 지혜인

코마츠 이사장의 중국에 대한 관심과 교류는 한국에 대한 것 보다 더 깊어 보였다. 2000년 중국 산둥성과의 문화 경제 교류를 위한 중국 방문 때는 아예 전세기를 이용할 정도였으니 알만하지 않는가.

한반도의 서해안 저편에 있는 산둥성에는 공자의 고향 곡부가 있고 한국의 기업이 집중적으로 모여 있는 청도(靑島), 그리고 미래의 항만도시로 부각되고 있는 대련(大連)과 산둥성의 성도(省都)인 제남(濟南)이 포함되어 있다.

코마츠 이사장은 중국의 근대화 과정에 비중 있는 기능을 하고 있는 이들 도시를 방문하는 것을 시작으로 2001년도에는 80명의 방문단을 구성하여 역시 전세기편으로 제남, 곡부, 서안, 북경을 방문하여 한국 독립기념관에 100만엔을 기부했듯이 「중국인민항일전쟁기념관」에 운영기금으로 100만엔을 기부하고 공자(孔子), 맹자(孟子) 동상제작을 의뢰한 것이다.

여기서 코마츠 이사장이 무엇 때문에 공자, 맹자 동상을 제작하도록 했을까, 대단히 흥미로운 일이 아닐 수 없다.

한 시절 공자의 나라 중국에서는 '도적(盜跖)이 행한 해독은 일시적이지만 도구(盜丘-도둑놈 공자)가 남긴 재앙은 만세에 미친다'고 5·4신문화운동 때 사상가 오우(吳虞)는 공자를 중국을 망친 주범으로 몰아세웠다.

그리고 '비림비공(批林批孔)-임표와 공자를 비판한 운동'의 문화 대혁명 때 모택동은 '나는 진시황을 찬성하고 공자를 찬성하지 않는다'고 밝히면서 '비림비공'에 힘을 실어 주었다.

이 같은 반공자론 때문에 오늘날 중국인들은 공자와 유교에 대한 인식이 희박하다.

다행히 등소평의 개혁-개방정책 이후 우수한 문화를 선양한다면서 공자의 사상을 중화 민족

의 살아 숨 쉬는 원천으로 지켜세우고 대학 캠퍼스에 공자 동상을 세우기도 한다.

중국문화원을 공자연구원으로 바꾸는 등 중국 문화의 중흥을 위해 공자를 적극 활용하기 시작한 것이다.

사실 공자·맹자의 가르침인 유교가 세계에서 가장 화려하게 꽃피운 곳은 한국이다. 그러나 과묵한 탓인지 공·맹 동상이 있다는 얘기는 들은 바 없다. 그런데 유교사상이 퇴락한 일본에다 막대한 자금으로 공자·맹자 동상을 제작하고 그것을 일본에 설치 한 것은 매우 이례적인 일이다.

누가 무어라 해도 코마츠 이사장은 인류의 지혜인 공·맹을 흠송하고 그 가르침이 인류를 구원할 수 있다는 돈독한 믿음을 일본인들에게 새삼 깨우치고 후세에 전하려는 강한 의지가 동상을 세우는 데까지 발전한 것이다. 그가 공자의 「논어」를 영·일·중어로 번역 출간하여 배포한 것을 들추어도 이를 능히 알 수 있을 것이다.

필자가 두 번째 일본에 도착하는 날 그는 공항에서 곧장 공자·맹자 동상이 설치된 연조원(燕趙園)이란 중국정원으로 안내했다. 이 정원은 시마네현과 인접한 돗토리(鳥取)현에 소재한 일본 최대의 중국식 정원이었다. 천호(天湖)라는 호수와 맞닿은 평지에다 기왓장까지 중국으로부터 수입하여 중국 정원을 모방한 것을 보면서 다시금 축소지향적 일본의 독특한 문화를 되새길 수 있었다.

바로 이 정원 광장 한쪽에 공자·맹자 동상이 나란히 존치되어 있었는데 코마츠 이사장이 중국에 제작 의뢰하여 일본으로 공수하여 연조원에 기증한 것이었다.

공항에 도착하는 길로 중국식 정원에 달려온 것은 필자가 먼저 이 동상을 보기를 원했기 때문이다. 공자, 맹자의 나라 중국도 아닌 일본에서 인류의 위대한 지혜인의 동상 앞에서 머리를 숙이는 기분은 숙연함 그 자체였다.

그리고 코마츠 이사장이 수행한 그 많은 사업들 가운데 범인(凡人)들로서 감히 발상하기조차 겨운 이 사업을 막대한 예산을 들여 실행한 것에 경의를 표하지 않을 수 없었던 것이다.

이밖에도 코마츠 이사장은 수차례 중국을 방문하여 일본군의 잔학한 생체실험이 자행된 하얼빈의 「731 부대유적기념관」을 방문하여 자신들의 선배들이 저지른 죄악을 반추하는가 하면 산둥성 조장시의 「대아장대전기념관」에 운영비 100만엔을 기부하는 것을 비롯, 대중국교류에 남다른 열정을 쏟아왔다. 이러한 그의 대중국 민간 외교는 엄청난 자금을 수반해야 하므로 누구나 할 수 있는 일이 아닐 뿐 아니라 설혹 돈이 충족된다 하여도 국제적 관계를 발효시킬 수 있는 순수한 의지와 식견이 따르지 않고는 불가능한 것이었다.

기업인으로서의 NGO운동가

한국에서 기업인이 시민운동을 한다는 건 대단한 의지와 용기를 갖지 않는 한 어려운 일이다. 간혹 기업인들 중에는 시민운동을 후원하는 경우는 있지만 기업인 스스로가 주체적으로 시민운동을 전개하는 일은 특수한 경우에만 가능한 것이다.

그렇다고 일본의 기업인들 중에 시민운동을 주도하는 사람이 많은 것도 아니다. 코마츠 이사장 같이 유별한 사람이 아니면 업두를 내기 쉽지 않은 일이다. 필자는 그가 지금까지 실천에 옮긴 많은 활동들을 살펴본 결과 그는 환경·평화·건강·지역공동체의 혁신을 위해 다양한 사업을 펼쳐 온 것을 알 수 있었다. 그것도 모두 그 자신이 기획하고 추진한 일들이었다.

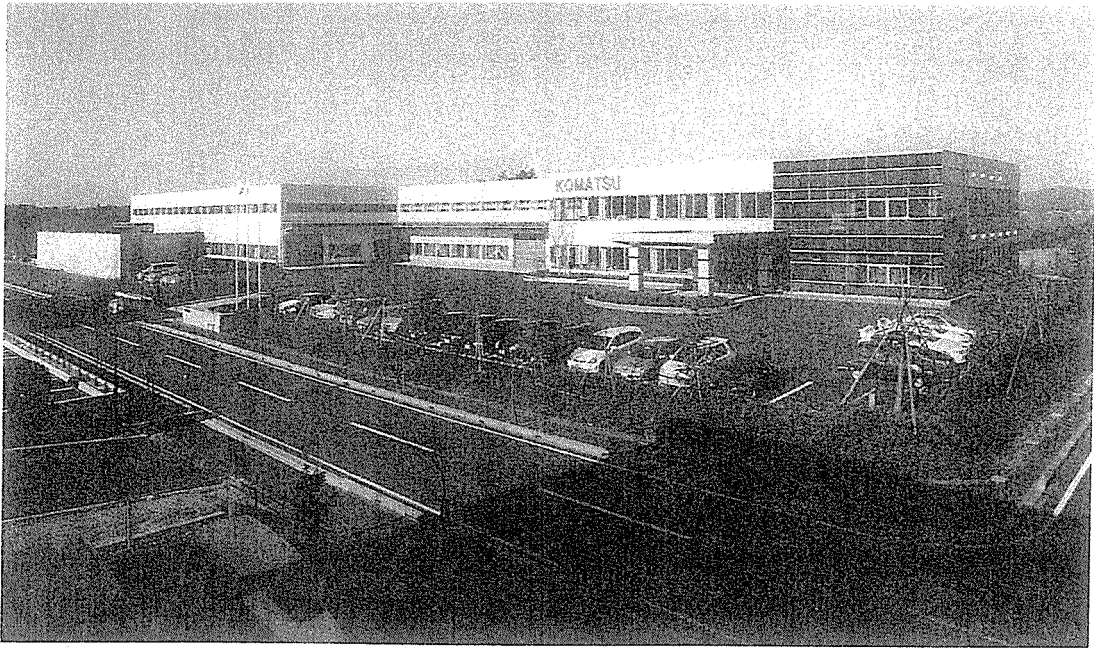
두 번째의 방문 때 도착시간이 마침 점심시간이었는데 중국정원을 가는 길에 도로변의 한적한 식당에 들렀다. 장례식장의 리무진이 몇 대



▲ 코마츠씨가 발간한 각종 서적

정차되어 있는 곳이었는데 그 식당은 그의 부인이 운영하는 자연식 식당이었고 주방장은 아들이 맡고 있었다. 그와 함께 식사를 하면서 별로 장사가 될 것 같지 않은 이 식당을 부인으로 하여금 운영하도록 한 의도를 알 수 있었다. 물론 그의 부인은 중병으로 고생하다가 현미식을 위주로 한 자연식으로 기적같이 건강이 회복되면서 자연식 신봉자가 되었고 또한 그 방면의 전문가가 되어 다양한 활동을 하고 있었다. 자연식에 대한 믿음이 얼마나 확고했으면 아들을 그 일을 계승하도록 했을까. 솔직히 말해서 찰현미밥은 모래를 씹는 것 같았고 코스 요리로 나오는 다른 음식도 입에 맞지 않았지만 약을 복용하는 마음으로 그릇을 비웠다.

돈이 될 것 같지 않은 이 식당이야 말로 자연식 운동의 전초기지였다. 그 식당에는 세계적으로 유명한 자연식연구가이며 운동가인 미국의 큐시 미치오(久司 道夫)박사가 저술한 이 방면의 서적과 각종 자료들이 전시 판매되고 있는 것만 보아도 단순한 식당운영 그 자체가 목적은 아닌 것이 분명해 보였다. 필자를 그 식당으로 안내한 그의 속내를 훤히 들여다 볼 수는 없었지만 그가 펴는 일련의 사회운동이 생명의 건강성에 근간을 두고 있음을 입증시켜 주기에 족한 것이었다. 따지고 보면 돈, 권력, 명예 그리고 사회의 평화도 개개인의 건강한 생명력에서 기인되는 것이기에 그의 건전한 식문화운동이 얼마나 큰 의



▲ 코마츠전기의 공장전경

미를 담고 있는지 새삼 느낄 수 있었다.

그가 100% 출연하여 설립한 재단법인 인간자
연과학연구소에서 막대한 예산을 투입하면서 펼
쳐온 이런저런 사업의 내용들은 모두 시민운동
의 차원을 이루고 있다.

특히 그가 2005년 6월에 〈고이즈미〉 총리에게
낸 「평화환경건강특별구」신청은 지금까지 그가
전개해온 수많은 사업과 운동을 통합하는 상징
성을 담고 있다.

이 특별구 신청은 인류의 평화를 염원하고 그
것을 실현시키기 위한 아주 웅대한 사업으로 국
가적 차원에서 추진되어야 할 규모였다. 지난 3월
10일 시마네현 마쓰이시에서 개최된 국제심포지
엄도 이 특별구의 추진을 위한 것이었을 정도로
그가 이 특별구를 위해 기울이는 노력은 필사적
이라고 해야 할 것이다. 특별구의 개요는 시마네
현과 돗토리현을 아우르는 中海권의 요나고시 사
키츠지구에 있는 77.8ha의 간척지에 인류의 「和」
를 창조하기 위하여 근대 일본과의 전쟁으로 순
국한 각국의 전사자들의 추모관과 그들에 대한
각종자료를 수집하여 보존하는 시설과 「세계전
쟁과 평화」사진영상 기념관을 비롯한 전쟁을 예
방하고 평화를 구축하는 기념비적 공원 등이 포
함된 자유와 평화를 사랑하는 세계인이 함께하
는 이름 그대로의 평화·환경·건강을 위한 특

별구를 조성함을 뜻한다고 할 수 있다. 엄청난 스
케일이며 정치인이 아닌 기업인으로서 이 같은
프로젝트를 구상하고 그것을 실현하기 위한 구
체적인 노력을 기울이는 코마츠 이사장의 야망,
실로 놀라운 것이었다.

마법의 경영인

지난달 9일부터 개막된 2006월드컵이 예선전
을 치루면서 〈마법(魔法)〉이란 말이 심심찮게 등
장하고 있다. 일본과 호주의 경기에서 1:0으로
패하고 있던 호주가 마지막 8분을 남겨두고 3골
을 집중시켜 3:1의 기적 같은 역전승을 이끌어낸
호주 감독의 〈히딩크〉를 일컬어 〈히딩크의 마법〉
이 회자되고 있다.

그는 2002년 월드컵 때 일본과 공동주최국인
한국에 마술 같은 4강을 달성시켜 세계를 경악
케하는 〈마법〉을 보인바 있어 이번에도 그의 〈마
법〉이 통할 것인지 마른 침을 삼키며 지켜보는
세계인들이 많은 것 같다.

그런데 여기에 등장하는 〈마법〉이란 마술이나
요술을 부린다는 의미보다는 탁월한 능력을 포
장한 말에 다름 아니다.

코마츠씨에게 〈마법의 경영인〉이란 마술이나
요술을 부린다는 의미보다는 탁월한 능력을 포

장한 말에 다름 아니다.

코마츠씨에게 〈마법의 경영인〉이라 표현하는 것은 필자의 판단이 아닌 하야카와 가즈히로(早川和宏)라는 저널리스트가 저술한 코마츠 씨의 전기(傳記)에 해당하는 「마법의 경영」이라는 책에서 따온 것이다.

코마츠 씨가 대표이사인(小松電氣産業株式會社)는 크게 나누어 3종류의 사업을 전개하고 있다.

부유했던 집안이 부친의 도의원 선거 실패로 몰락하면서 대학진학을 포기하고 농기계 제조회사에 입사하여 설계부문에 종사하다 그 회사의 도산으로 오사카(大阪)의 빠정코에서 구슬을 줍는 일까지 하며 방황하다가 결국은 고향으로 돌아와 동생과 함께 화장실, 하수구 등의 막힌 곳을 뚫는 하잘것없는 사업으로 연명하는 세월을 삭혀야 했던 그가 오늘날 일약 일본에서도 알아주는 벤처기업가로 성공을 이룬 것만 보아도 〈마법의 경영인〉으로 불릴만한 근거가 된다. 그의 성공은 스스로가 연구 개발한 스피드 샷터가 히트 상품이 되면서부터다. 브랜드로는 〈門番〉이란 이 샷터는 종래의 개념을 원재료부터 달리한 그야말로 혁신적인 제품으로 방한, 방진, 방충성에도 에너지 절약효과까지 겸비하므로써 공장, 창고, 상점 등에 폭발적으로 팔려나간 것이다. 코마츠 씨는 〈門番〉의 개발로 일본의 뉴비즈니스 대상까지 수상할 정도로 주목을 받았던 것이다.

두 번째 사업종목은 〈八雲水神〉이라는 상하수도의 원격감시 자동제어시스템의 개발과 운영이다. 이 시스템은 고도의 첨단 사업으로 세계적인 통신회사인 NTT의 휴대전화의 인터넷 접속서비스를 이용한 상하수도의 관리를 말한다. 이 시스템은 일본 과학 기술청의 〈주목발명 선정증〉을 받을 정도로 일본정부가 공인한 기술로 효율적인 상하수도 관리에 획기적인 기여를 하면서 코마츠씨의 제2의 도약을 담보해 주고 있다.

세 번째 사업은 지구소생사업이다. 코마츠씨는 생산적 기업 활동을 통한 자연환경과 사회 환경의 변혁을 꾀하는 일관된 노력을 해온 것으로 보였다. 주력 제품인 새로운 개념의 샷터와 상하수도를 인터넷으로 관리하는 시스템의 개발도 포괄적으로 환경의 컨셉을 바탕으로 깔고 있다.

그가 특별히 〈물의신-水神〉이라 브랜드화한 의미를 곱씹어 보면 그가 얼마나 물에 깊이 빠져있는지를 알 수 있을 것이다. '물은 곧 神이다'라는 명제는 인류가 가장 중요시하고 심각하게 받아들이어야 할 명제 일 수밖에 없다. 그는 머지않아 석유문제보다는 물문제로 평화가 위협받게 될 것임을 예견하면서 그에 대한 비상한 준비를 강조했다.

그래서 그가 많은 투자를 하면서 단계적으로 성공하고 있는 사업이 바로 미생물에 의한 복합 발효를 통한 폐수 처리 시스템이다. 그의 안내로 두 번째 방문한 농촌지역의 생활하수처리장은 하나의 전기·전자의 기술이 어디까지 발전할 수 있을 것인지 그 가능성을 열어주는 현장이었다.

주민 900여명이 배출하는 생활하수를 미생물에 의한 복합발효공법으로 마지막 방류수는 음용수 수준으로 처리하고 있는 하수처리장은 단 1명의 직원에 의해 운전되고 있었는데 이는 자동 제어시스템을 갖추었기에 가능한 일이었다.

현재는 생활하수를 처리하는 수준에 있지만 앞으로 축산폐수, 공장폐수를 완전 처리하여 자원화 할 수 있는 단계까지 발전시켜 수자원의 부족에 대응하고 아울러 오염된 강과 바다를 복원시키는데 이바지 한다는 것이 그의 신념이었고 사업 계획이었다. 앞으로 시간이 얼마나 소요될지는 예측할 수 없지만 실행 중에 있는 일련의 과정들을 볼 때 머지않은 장래에 그 특유의 〈마법의 경영〉이 지구환경을 소생시키는데 크게 기여할 것이란 기대를 가지게 했다.

한편 그의 「마법의 경영」이 이루어지는 현장인

회사를 두 차례 답사하면서 필자는 코마츠씨의 독특한 성격과 경영관을 감지할 수 있었다.

규모가 어느 정도 되는 회사는 일종의 슬로건적인 사시(社是), 또는 사훈(社訓)이 여기저기 부착되어 있는 것을 볼 수 있다.

한국의 경우는 대개 딱딱한 말들로 채워져 있기 일쑤다. 일본의 일반적 추세는 알수 없지만 코마츠 전기의 사훈은 펴이나 기이한 것이었다.

‘おかしく、おもしろい - 이상하게, 재미있게’가 그 회사의 상징적 슬로건이었다. 이 이상하고 재미있는 슬로건이야말로 마법을 만들어내는 출발점일 것이라는 확신을 가지게 하는 마법을 거는 것 같았다. 그 뿐만이 아니었다. 회사는 신지코 호수변에 위치해 있었는데 차라리 그 자리에는 호텔이나 레스토랑을 앉히기에 적합한 멋진 곳이었다.

공장의 내부 또한 필자의 눈높이를 사정없이 무너뜨리는 기발한 것이었다. 목직인 제품을 생산하는 공장에 몇 안 되는 근로자가 느릿느릿 움직이는 가운데 모든 설비가 자동화되어 물이 흐르듯 하는 광경을 넋 없이 바라보는 것도 하나의 마법에 걸린 것이 아닌가 머리를 흔들어야 했다.

식당이기도 하고 채(茶)실이기도 한 공간에서 통유리를 통하여 공장전체의 움직임을 관찰할 수 있도록 한 무섭도록 치밀한 설계. 그리고 식당에 붙은 Bar에는 신지코 호수를 관망하면서 한잔의 칵테일을 음미하도록 만들어 놓은 것을 보면서 코마츠씨의 휴머니즘과 로맨티시즘을 흠뻑 느낄 수 있었다.

그곳은 바로 사람을 사람답게 하는 참으로 이상스럽고 재미있는 인간의 공장이며 예술적 감각과 안목이 뛰는 아름다운 마법의 공장임에 틀림없어 보였다.

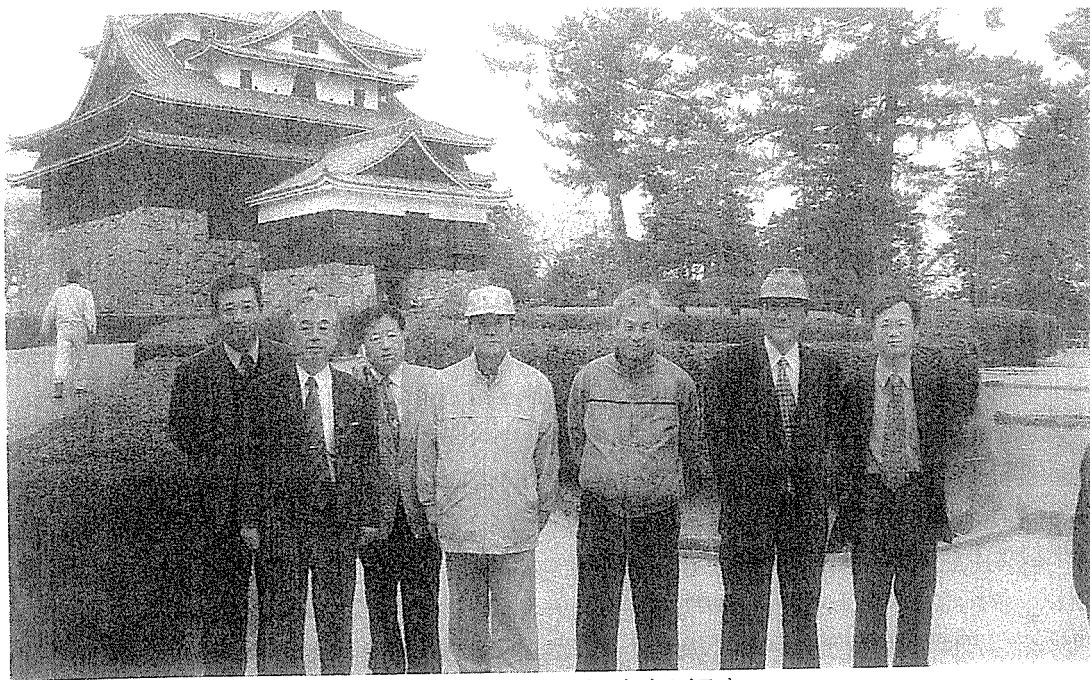
여하튼 코마츠씨는 이상하고 재미있는 사람이었다.

누군가 아주 옛적 이런 말을 했다. ‘자기 자신

만을 위해 노력하는 사람은 소인(小人)이며 타인이나 공동체를 위하는 사람은 큰사람(大人)이다’ 문득 이 말을 떠올리는 것은 이 말이 코마츠씨의 경우를 두고 지어진 말인 듯해서다. 물론 코마츠씨 뿐만 아니라 세상에는 비록 체구는 왜소할지라도 생각과 능력이 큰 사람들은 얼마든지 존재하고 있다. 한국의 속언(俗言)에 “작은 고추가 맵다”라고 했듯이 덩치가 작은 사람들이 큰 삶을 이룬 경우가 그 반대의 경우보다 훨씬 많다.

그런 점에서 보면 가냘프게 보이기조차하는 코마츠 사장이 지금까지 이루었고 진행하는 세상을 위한 일들이 얼마나 광대한 일인지 앞서의 글을 통해서 충분히 인지 할 것이다.

그렇다면 자신의 기업을 꾸러가기도 바쁘고 경쟁업체들의 도전에도 시시각각으로 대처하고 준비해야 하는 그에게 간단없는 사회사업의 아이디어와 그 무서운 추진력은 무엇으로부터 작동되는 것일까. 그가 오늘까지 해온 기록될 만한 활동 리스트를 훑어보았을 때 그가 학교나 공공기관에 초청을 받아 강연을 한 것이 꽤 많았다. 그런데 흥미로운 사실은 그가 책을 잘 읽지 않는다는 것이다. 세상의 흐름을 쫓는 것은 주로 신문을 활용한다는 것이다. 여러 가지 신문에는 아주 필요한 정보와 지식이 넘쳐흐른다는 것이다. 책이 불필요해서가 아니라 책을 가까이 할 시간이 충분치 않다는 것이다. 신문에서 많은 것을 얻는다는 그의 얘기를 듣고 보니 늘 쉽게 접할 수 있는 신문을 생각해 보았다. 신문은 우선 고도의 전문성을 갖춘 지식인들이 광범하게 참여하여 만들어진다. 그리고 세상 안팎으로 흐르는 무수한 지식과 정보를 꼭 필요한 것만 고르고 골라내어 정리한다는 특징을 본다면 그거야말로 가장 값싼 가격으로 비싼 가치를 획득하는 것이 아닌가. 더구나 최근의 신문은 보다 잡지화되어 다양화, 다지화 된 세상의 조류를 반영시켜 주기 때문에 많은 시간을 들여 잡다한 책을 읽는 것보다는 훨



▲ 시마네현의 명물인 마쓰에성(城)을 배경으로 코마츠씨와 필자를 비롯한 한국방문단

신 적은 비용과 시간으로 적정한 정보를 얻을 수 있다.

많은 사람들이 습관적으로 신문을 보는 바에 의하면 큰 제목, 소제목, 정도만 주마간산 격으로 훑어 내려게 되는데 코마츠 사장은 신문을 정독하는 습관을 가진 듯했다.

성공한 사람들에게는 일상인과 무언가 다른 특색과 습관이 있다는 것이 정설이다. 그래서 가장 좋은 교육은 애들이 어릴 때 좋은 습관을 가지도록 하는 것이 최상이다라는 말을 생각해 한다.

그리고 그는 신문에서 얻는 지식과 정보를 그대로 섭취하기보다 나름의 사색을 통하여 내면화시키는 과정을 습관적으로 반복하는 것 같았다. 이러한 그의 특유한 면은 그와의 대화에서 묻어나오는 철학적, 이상적 냄새를 통해서 느낄 수 있는 대목이었다. 그가 설립한 연구소, 그동안 부단하게 실천해온 사회적 활동의 내용이 바로 그의 이상주의적이고 철학적 성향에서 출발되고 있다는 점을 간과할 수 없을 것이다.

어쨌든 코마츠씨는 보기 드문 가장 일본적 기업인이며 대단한 인물이었다.

성공한 기업인으로서의 그를 탐색하고 조명하는 무게 있는 책이 2권이나 발간된 것만 보아도 그의 인물됨을 입증시키기에 충분할 것이다. 그리고 일본의 주요 신문이나 방송에 그에 대한 보

도는 헤아릴 수 없고 한국, 중국의 매스컴에도 수 차례 소개될 정도로 중량감을 가진 인사다. 그럼에도 불구하고 필자가 일본에 두 번이나 건너가 그를 만나고 주변 취재를 한 것은 그의 기업인으로서의 삶이 한국의 기업인들에게 훌륭한 귀감이 될 것이라는 전제를 부여했기 때문이다.

무엇보다도 필자는 평소 성공한 기업인이야말로 진정한 리더가 될 수 있다는 생각을 가지고 있다. 그에 더하여 기업의 경영적 마인드로 사회와 국가를 혁신 시키는 것이 정치와 행정보다도 더 효율적일 것이라는 생각을 굳히고 있기 때문에 한국에서도 많은 중소기업인들이 코마츠 사장의 삶이나 「마법의 경영」을 벤치마킹 할 수 있도록 유인하기 위해 이 글을 쓴 것이다.

필자는 향후 기회가 마련되면 코마츠 사장을 초청하여 한국 기업인과의 자리를 주선하여 두 나라의 기업인이 지혜를 모우고 정보를 나누면서 두 나라 사회를 혁신시키고 평화를 증진시키는 프로그램을 정례화 하도록 노력해 볼 생각이다.

취재한 대로 글을 쓰자면 한권의 책으로도 부족할 수밖에 없을 정도로 그에 대한 쓸거리는 무진장 많았다. 지면을 이유로 들성들성 짚는 것이 못내 아쉬울 뿐이다. 취재에 흔쾌히 응해주신 코마츠 사장과 도움을 준 조수환 사장, 윤희준씨께 깊은 감사를 드린다. ☺

『市民時代』7月号

市民時代が会った人「日中韓の平和運動展開をする日本の中小企業人小松昭夫氏」

徐 世旭（ソ セウク）／編集主幹

筆者は去る3月と4月に独島（日本名：竹島）領有権の問題で知られている日本の島根県を訪れた。1回目の訪問は3月10日、財団法人人間自然科学研究所が主催する「平和環境健康特別区」申請特別国際シンポジウムに参加するためであった。

筆者がこのシンポジウムに参加したのは、「木曜学会」の会員である李挺錫（イ ジョンソク）先生のお勧めであった。日本の歴史と文化に見識をもつ李先生が偶然な機会に人間自然科学研究所の理事長であり、小松電機産業（株）の社長である小松昭夫氏の独特な活躍をみて、筆者に一度お会いするようにと勧めてくれたからである。

しかし、筆者は個人的な人間関係としてのつながりよりも、公的であり、大義名分が立つ出会いを通して、必要に応じて「市民時代」に載せたい考えで、李先生を含む10名の韓国参加団に合流した。

釜山から島根県まで行くのには、そうとう大変だった。金海空港から仁川空港を経由し、日本の鳥取県米子空港に到着、そして島根県の中心都市である松江市に入らなければならなかった。

釜山を朝7時に出発し、目的地の松江市までは5時間の所要時間をかけ、正午に到着した。米子空港に到着した私たちを小松理事長と職員らが温かく迎えてくれた。

午後2時からシンポジウムが開催されることを考慮すれば、シンポジウムを総括する小松理事長が空港まで迎えにきてくださったのは、私たちに対する格別な関心を持っていることを示唆している。

筆者の2回目の島根県の訪問は4月23日だった。先月の訪問がシンポジウムの参加と小松理事長に関する情報収集が目的であったが、4月は彼の取材が目的であった。2回目の訪問は韓国の事業パートナーである東宇技研（株）の曹秀煥社長が同行した。

2回目の訪問の際にも小松理事長が米子空港まで迎えに来てくださった。短い期間の間で外国人との再会は珍しいことであった。3月の出会いは公式的な枠の中で行われたので個人的な付き合いは難しかったし、国際シンポジウムを開催した理事長としても個人的な付き合いには限界があったと思う。

二回目の彼との出会いは服装から気楽だった。筆者が一ヶ月余の間に再会し、取材

に感心を持ったのは、中小企業人としての彼の生き方がユニークであり、企業人としての行動半径が韓国の企業人に高い教訓を与えられる一つの典型になると期待しているからである。

事実、彼に対する資料を収集し、会社を訪問・調査しながら、韓国と宿命的である日本人の取材をするのが果たして妥当なことなのか、何回も躊躇った。

しかし、筆者は、彼が日本人である前に一人の人間として、自由と平和の価値を信奉し、歴史の教えを刻み、文化を愛する品格をもった特別な存在であるとアピールすることは、「市民時代」の読者にとって一風変わった話題になると思った。

小松、彼は何者か

彼の名前を漢字解釈してみると「小さな松」の意味である。この意味を連想してみると、日本の伝統的な盆栽で見られるかわいい松を描くことができる。

今年、61歳の彼は典型的な日本人の風貌をお持ちの人である。大きくない背に少し痩せた小柄に見える体型、全体的に漂う雰囲気は質実剛健な気風で端正なイメージが感じられる人である。それに純朴感と穏和なイメージが顔に現れ、親しみを感じる印象であった。世の中にはこのようなタイプの人々の中で大物になるケースが多い。言わば日常生活では穏やかで柔軟だが、決定的に勝負を賭ける際には冷静で断固として対応するスタイルの人である。彼と多くの時間を一緒にすることはできなかったが、公式、非公式の席での多様な雰囲気から彼の行動様式を観察した結果、彼は確かに傑出した人物であることに間違いなかった。彼が生まれたのは島根県の中山間地の八束郡八雲村である。島根の意味は「島」の「根」である。日本列島の根として解釈され、日本史に神代の昔からの、韓半島との歴史の根は、私たちが知っている以上に深い。

特に、出雲市にある出雲大社に関する神話は、この地域の人々に韓半島との運命的な関係を振り返らせる象徴であった。しかし最近、島根は両国が独島（竹島）領有権問題で対立しているところだと韓国人は意識している。彼らが自国の領土だと主張している竹島（独島）は行政区域が島根県に属しており、独島（竹島）問題が話題になるたびに、韓国人にとってややもすると「島根」という地名は不快に感じる所である。

歴史的に、また現実的に不可分の関係にある島根は、日本の都道府県の中でも所得水準と文化水準が中位層に位置する比較的に物産が豊かな所である。そして、自然環境は日本有数の景勝地に比べて少しも遜色がないだけでなく、むしろはるかに優れた条件であるといっても過言ではない。島根県全体をみると、山紫水明の景勝地とも言える。山と川、海、そして日本のどこにもある優れた温泉を備えている所である。こ

こは世界一の銀鉱をはじめ、日本でも有数の砂鉄の生産地として知られているだけでなく、日本一の「仁多米」が生産できる所でもある。それに質のよいシジミが大量に採取され、海と川が混合した中海と宍道湖からの豊かな物産は、この地域が持つとても優秀な競争力である。特に島根県の中心都市である松江市（人口20万人）は一言で中海と宍道湖に囲まれた「水郷」でオランダの首都であるアムステルダムを連想させる。

筆者は二回目の訪問の初日、小松理事長の招待により松江市の伝統日本料理店に招かれ夕食を一緒にした。そのお店はそんなに大きくない5階建てのビルだった。ビル全体が料理店で店の場所が絶妙だった。1～5階まで各階から湖と松江市を眺められるように設計された建物だった。店が定休日だったが、島根県のVIPで著名人の小松理事長の特別な願いで開店したと、中年の仲居さんが話してくれた。特別な接待を頂くと思ったら恐縮で、夕やみが迫る宍道湖を眺めながら小松理事長の配慮に大変感動した。本当に美しい夜景で、酒を飲まずにはおられなかった。平素は、あまり酒をたしなまない小松理事長も遠いところから尋ねた友人と交わるため、酒を遠慮しなかった。やはり酒はどこで、誰と一緒に飲むのかによって味が変わっていくことを教えてくれた席だった。

そして翌朝、ジョギングをするために早く起き、ホテルを出かけた際、小松理事長の心配りと配慮がよく分かった。ホテル前の湖に数百隻のシジミ採り船が朝日に美しく染められた湖をゆらゆら揺れている姿に筆者は感動を受け、しばし目が釘付けになった。まことに神秘的な光景だったし、うっとりした心持ちで鳥肌が立っているようだった。「ああ、この世界を吟味して欲しいがために、前日のお店とホテルを選んで下さったんだな」と思った。小松理事長がいかに自分の故郷を愛し、誇りとして思っているのかがよく分かった。

このように美しくて優れた自然環境を背景として成長を成し遂げた小松さんは1963年島根県立松江工業高校を卒業し、10数年間のサラリーマン生活を経て、彼の生まれ故郷で事業を興した。1973年、弟さん（現小松電機常務）と2人で、10万円の元手と中古車1台から創業し、日本全国に代理店網を構築する優良中小企業として成長した。そのきっかけが1985年に開発したシートシャッター「門番」である。「門番」は一時的に市場シェア6割まで確保するほど怪力を発揮し、小松電機は一躍成功したベンチャー企業として取り上げられ、マスコミや経済界から注目された。この成功で、企業はさらに健全化し、個人的にも富を得ることが出来た。

韓国企業に無償の技術供与

彼が開発したシートシャッターは、私たちの周りの工場や商店街などでよく見掛ける保安用の鉄シャッターとは材料が違った。半透明の特殊ビニール製のため、軽くて瞬間的に開閉できる機能があり、鉄材に比べ設置が容易で経済的なので爆発的に需要が伸びた。彼の製品が日本で成功の道を歩んでいた 1990 年、韓国の事業家の一人が島根県を訪れ、小松社長に技術供与の話を慎重に申し入れた。彼が 40 代の事業家である曹秀煥さんだった。

勿論、曹社長は国際慣例に従い所定のロイヤリティーを払う前提で小松社長と相談した訳だ。しかし、どうということか曹社長の相談を受けた小松社長は無償の技術供与を約束した。曹社長としては予想外の展開で面くらった。しかし、それは事実だった。勿論、日本で成功した技術が韓国でも 100% 成功するとは言えないが、当時の状況からその技術を韓国で展開すると大儲けになると期待できたと思われる。

小松社長が韓国に無償で技術を供与したのは特別な訳があった。歴史的に日本は昔から韓国から数多くの恩を受けたにもかかわらず、愚かな政治家らが韓国を侵略、支配したことで韓国民に苦痛と困難を与えた日本人の子孫として、恥ずかしさと罪悪を感じ、自分の能力が至るところまで韓国に償いたい気持ちでそうやったそう。

筆者は 1 億 2 千万の日本人の中で小松さんのような考えを持つ人がほかにいるのかと考えてみた。国際社会でエコノミックアニマルと言われる日本人の利害打算的な考え方を思ったら、小松さんのような思考を持つ人は殊勝でないかと思った。まことにユニークで奇人な人である。

故郷を愛する運動に献身

小松社長の企業家としての成功がもっと輝くのは、首都圏や大都会でなく、地方からヒット商品を生み出したからである。韓国でもたまに地方から創業し成功するケースもあるが余程難しいことである。日本も地方から全国的な需要を創出する企業を経営するには数多くのデメリットがあるのは、どうしようもない地方の限界である。

更に、農業、漁業、工業など 1 次産業が主である島根県の特性を考えた時、彼の成功は島根県の誇りである。

とりわけ、彼の成功は彼に相応しい社会的な評価を導き出した。1991 年「中小企業研究センター賞」、「ニュービジネス大賞」「地域社会貢献企業人賞」をはじめ、日本経済新聞の「地域活性化貢献企業賞」などの権威ある公的機関で、全国企業人を対象にする権威ある賞を受賞するに至った。彼が受賞した賞の中で地域社会貢献と地域

活性化貢献の部門が特に目立つ。一介の中小企業家が、地元のために如何に偉大な業績を積み上げてきたかが分かり、注目に値する。

彼が地域発展のために行った代表的な業績をいくつか紹介する。島根県商工会とタイアップ、若手経営者 20 名で「知革塾」をスタートし、地域経済の活性化のため相互情報交流と学習活動を引っ張ってきた。また異業種 7 社で協同組合「テクノくにびき」を設立、企業の特徴を最大限に引き出し、相乗効果を挙げ、地方企業の経済力を再認識させる活動を導くことをはじめ、1994 年の「一村一志運動」、1995 年島根県の歴史的な治水の偉人「周藤彌兵衛」伝を小説と漫画、児童文学として出版し、1998 年には同じく島根県の歴史的な治水の偉人「清原太兵衛」に関する小説・漫画・児童文学を出版した。古くから島根県は洪水が多く治水が生存と直結する問題であった。その洪水の苦しみから、村人を救うために立ち上がったのが、周藤彌兵衛と清原太兵衛である。国家官吏でもない、平民の立場で一生治水に力を注いだ彼らは島根県の大いなる英雄である。

小松社長はこれら偉人に対する出版事業をはじめ、彼らの業績を再評価する学術行事と共に、銅像まで製作するなど故郷に対する愛を見せている。特にこのような追慕事業は多額の予算が必要なことを考えれば、事業から出た利潤を地域に還元する小松社長の見識と眼目は誰もが持つことできないレベルのこととして高く評価されている。

財団法人人間自然科学研究所の設立

1994 年に設立されたこの研究所は今まで行った事業は驚くべきものであった。設立以来、小松さんが理事長を勤めながら拡大してきた事業は、すべて彼自身が企画し、運営している。彼の人生観、企業観、そして哲学と信念がそのまま残っている。財閥あるいは大手企業の規模でもない社員 100 人未満の中小企業がいくら利潤を出すのかは知らないが、膨大な資金が用いられる充実した社会事業を持続的に推進するのは、韓国の大手企業も実行し難いことである。このような意義深い事業が間断なく持続的に行われるのは経営主義国家と社会に対する無限の使命感がなくては不可能なことである。

この研究所が設立され、今年で 12 年。その間、日本国内外で展開した事業実績をみると、その規模と質において全ての事業がはっきりとした目的と位置付けの元に展開されている。

まず、研究所が設立された年に開催された「神在月縁結び世界大会」が挙げられる。この大会は、神話伝説を現代化した象徴的なイベントである。その神話では島根県出

雲市にある出雲大社に旧暦の十月に全国の神々が集まって男女などの縁結びの会議を開くという。参考として出雲大社は日本の天皇が巡礼するほどの旧官幣大社である。この神話を背景に小松理事長は、日本国内は勿論、国際レベルで高い理想をもつ人物が集まり新たな時代を創造する出会いの場を提供する目的で、今日まで 6 回に掛けてこの大会を開催した。

次に、マクロビオテックの世界的な指導者である久司道夫先生を招き、「人と水と食」のシンポジウム、「中海・本庄工区の未来構想」のシンポジウムなど、国際レベルのシンポジウム及びセミナーを数十回開催し、数十回の会議、講演会も開いた。

そして、前述の出版とともに、孔子の「論語」を日中英対訳新版として出版するなど多様な出版事業を行った。

韓国独立記念館に 100 万円を献金

筆者は小松理事長を取材し、彼に対する資料を調べる内にこのような考えが浮かんだ。「世の中には真にありとあらゆる人がいて、珍しい人も多いな」と。一体この人の始まりと終わりはどこなのか全く見当がつかなかった。彼の思考と行動パターンは論理的で、純理的、理性的な部分が多い半面、典型的な頑固な人のように手に入るのはあれこれすべて取り纏める意識と感情の起爆が激しいタイプではないかと思われ、度々見分けがつかなかった。

しかし、彼が歩んできた人生をよくみると理想を追求している人であることが解る。そうだといって、ひたすら地に足の着かない夢を追う幻想主義でなく、冷酷な現実に基づき自分の国と地域、そして日本と地理的、歴史的、経済的に必要不可欠な関係の隣国のための、理想的な目標を目指す旺盛な活動を続けているのである。

彼は 1997 年に韓国独立記念館を訪問し、自分の先祖が犯した過ちを痛烈に反省すると共に、過去を直視し、どう未来に結びつけるかを考えた。そこで日韓両国民の歴史認識が深まり、新たな人類の活動の輪が広がることを願って 100 万円を寄付した。これは日本人の誰もができなかった大いなる歴史に対する自覚と、本心から沸いてきた贖罪行為であった。

ところで、彼のそんな行為は韓国でのある出来ことがきっかけだった。25 年前に韓国を訪問してタクシーに乗ったところ、日本人だという理由だけで相乗りの人から侮辱されたことがあって、そこから韓国人の日本に対する深い恨みを痛感し、日本人としての恥ずかしさを痛切に感じた。しかし、そのような出来事は珍しい。植民地政策

を経験し日本から苦痛を直接に受けたか、その直系子孫ではないと、あまり表には出さない。本音としては日本人が嫌いかもしれないが、建前では外に出さないのが通例である。たまたま小松理事長が異例の人にお目に掛かったということだ。しかしそれによる衝撃が大きかったようで、そこから韓国と日本との歴史を深く学び、知ることができた。

また、そのきっかけよりも前に、自分が開発した製品の技術供与を何の代価もなしに韓国に供与した。その後、彼は島根県の指導者を数人招待し、独立記念館、西大門刑務所、白凡金九記念館の訪問をはじめ、大韓赤十字社を訪ね、北韓食糧支援金 500 万円を寄付するなど日本人として誠意を示した。

孔子・孟子銅像を建てた知識人

小松理事長の中国に対する関心と交流は韓国に比べ、もっと深く見えた。2000 年に中国の山東省に訪中文化経済交流団を派遣された際、チャーター便を利用するほどだからである。

韓半島の西海岸の反対側にある山東省には孔子の故郷の曲阜があり、韓国の企業も集中的に事業展開をしている青島、そして未来の港湾といわれる大連と山東省の省都である済南も含まれていた。

小松理事長は中国の近代化過程に重要な機能を果たしている都市を訪問することをはじめ、2001 年度にもチャーター便を利用し 80 名で西安・済南・曲阜・北京訪問をした。「中国人民抗日戦争記念館」を訪問し、献花ならびに趣意書と運営基金としての 100 万円を寄贈すると共に孔子、孟子の銅像製作を依頼した。

ここで小松理事長は何のために孔子、孟子銅像を製作したのか。とても興味津々だった。

一時期、孔子の国である中国では“盗跖が犯した解説は一時的だったが、盗丘（孔子）が残したわざわいは万歳に至る”と言い、五・四運動の際に思想家である呉虞は中国を滅ぼした主犯として責め立てた。

そして「批林批孔」－“孔子と林彪を批判した運動”の文化大革命の際に毛沢東は“私は始皇帝は認めるが、孔子は認めない”といい「批林批孔」に力をいれた。

この反孔子論のため今日の中国人は孔子と儒教に対する認識が薄い。幸いに鄧小平の改革・開放政策以来、優秀な文化を宣揚するため、孔子の思想を中華民族の生きる源泉としてほめたたえ、大学キャンパスに孔子銅像も建てた。

中国文化院を孔子研究院に変えるなど中国の中興のため孔子を積極的に活用し始め

た。

事実上、孔子と孟子が教えた儒教が世界で一番花咲いたのは韓国である。しかし、孔子、孟子銅像を建てた話は寡聞にして聞かない。しかしながら儒教思想が崩れ落ちた日本に莫大な資金を使い孔子、孟子銅像を製作し、それを日本に建てたのは極めて異例なことだと思われる。

なんと言っても、小松理事長は人類の知恵人孔子、孟子を尊敬し、その教えが人類を救えると強い信念を日本人に今更悟らせ、後世に伝えたい強い意思が銅像を建てるまでに至った人だ。彼が孔子の「論語」を日中英対訳新版に出版し、配布したことをみてもよく分かる。

筆者が二回目に日本を訪れた日に彼はそのまま孔子と孟子銅像が建てられた燕趙園という中国式庭園に案内してくれた。その庭園は島根県の隣の鳥取県に所在している日本最大の中国式庭園であった。東郷湖という湖と接している平地に、瓦まで中国から輸入して中国庭園を建てたことをみて縮み志向の日本独自の文化を感じることが出来た。

ちょうどこの庭園の片方に孔子・孟子銅像が並んで建てられていた。小松理事長が中国から依頼・製作したもので燕趙園に贈呈したものであった。

空港に到着してから中国式庭園に走ってきたのも筆者に何よりもこの銅像を見せたかったからである。孔子、孟子の国でもない日本で、人類の偉大なる知恵人の銅像に頭をさげ、静かに心落ち着かせることができた。

そして小松理事長が行っている数多くの事業の中で、凡人としてはとても発想さえできないこの事業を莫大な予算を掛けて実行していることに敬意を表すしかなかった。

この他にも小松理事長は数回に掛けて中国を訪問し、日本軍の残虐な生体実験が行われた「731部隊記念館」を訪問し、先祖が犯した罪をかみしめた。また、山東省棗荘市の「台児荘大戦記念館」に運営基金として 100 万円を寄付したのをはじめ、対中国交流に情熱を注いでいた。そのような彼の対中国民間外交は膨大な資金が用いられるので誰もが出来ることでもないし、もし資金があるとしても国際平和に対する素直な意志と識見がなくては不可能なことである。

企業人としての NGO 運動家

韓国で企業人が市民運動をやるのは強い意志と勇気がなくてはとても難しいことである。たまたに企業家の中で市民運動をサポートする人はいるが、企業家自身が主体的に市民運動を展開するのは特別な場合に限って、可能なことである。

そうだとって、日本の企業家の中で市民運動を主導する人が多いとは限らない。小松理事長のような人物でないと、とても想いもよらない。筆者は今まで実践に移した数多くの活動を調べた結果、彼は平和・環境・健康・地域共同体の革新のために多様な事業を展開してきたのがわかった。これも全て小松理事長が企画し展開したことである。

二回目の訪問の際、昼食のため中国庭園に行く道の途中にあるレストランに寄った。お葬式場のリムジンが何台か停車している所だったが、そのレストランは小松理事長夫人が運営している自然食のレストランで、料理長は息子が担っていた。食事をするうちに、このあまりお金にはならないようなレストランを、夫人が運営するように（小松理事長が）応援している意図がわかった。小松夫人は病で苦しんでいたが、玄米食を主食にする自然食のお陰で健康を回復し、自然食の信奉者になり、その方面の専門家として多様な活動を行っている。自然食に対する信念がいかに強かったのかが、息子にまでその仕事を継承しようとしていることから分かる。正直に言うと、玄米食は砂を嚙んでいるような歯応えで、コース料理に出された料理もあまり口に合わなかったが、薬を服用する気持ちで全部御馳走になった。

金にはならないようなこのレストランこそ自然食運動の発信地だった。この食堂には世界的に有名な自然食研究家で運動家である久司道夫先生が著述した各種の本や資料などが展示、販売されている。これだけみても単純にレストランの運営が目的ではないことがわかった。小松理事長が何故、私たちをそのレストランに案内したのかはよくわからなかったが、彼が展開する一連の社会運動が生命の健康に重点を置いていることを表すには十分なことだった。考えてみるとお金、権力、名誉、そして社会の平和も、個々人の健康な生命力から起因する。彼の健全な食文化運動がいかに大きな意味を持つのか改めて感じる事が出来た。

彼が 100%出資して設立した財団法人人間自然科学研究所で、莫大な予算を投入してまで展開してきた事業の内容は全て市民運動レベルになっている。特に、彼が 2005 年 6 月に小泉首相に提出した「平和環境健康特別区」申請は今まで彼が展開してきた数多くの事業と運動を集大成する意味を含めている。

この特別区申請は人類の平和を念願し、実現するための大きな事業で、そもそも国家レベルで展開すべき規模の事業である。今年 3 月 10 日に島根県松江市で開かれた国際シンポジウムもこの特別区の推進のためである。小松理事長は必死に、この特別区のため努力を注いでいるとも言える。特別区の概要は、島根県と鳥取県を流れる中海圏の米子市崎津地区（77.8ha）の干拓地に人類の「和」を創造するため、近代日本

との戦争で亡くなった方の追慕館と戦争に対する各種資料を収集して保存する施設と「世界の戦争と平和」写真映像記念館をはじめ、戦争を予防し、平和を構築する記念石碑公園などが含まれる。言わば、自由と平和を愛する世界人が一つになって平和・環境・健康を目指すための特別区造成である。非常に大きいスケールで、政治家でもない企業人がこのようなプロジェクトを構想し実現するための具体的な努力を注いでいる。小松理事長の野望は実に驚くものである。

魔法の経営者

先月 9 日から開幕された「2006 ワールドカップ」の予選戦で「魔法」という言葉をよく耳にした。日本とオーストラリアが 1 対 0 で負けていたオーストラリアが競技の終了 8 分前 3 ゴールを集中させ、3 対 1 の奇跡のような逆転勝ちを導き出したオーストラリアの「ヒディンク」を称して「ヒディンクの魔法」が知られている。

彼は 2002 年ワールドカップの時、日本と共同主催国である韓国に魔法のようなベスト 4 を達成させ、世界を驚かせる「魔法」を見せたことがある。今回も彼の「魔法」が効くのかと関心を表わす世界の人々が多いようだ。

そこで、ここで言っている「魔法」とは、魔術や手品を使うという意味より、卓越した能力をさす。

小松社長に「魔法の経営者」というのは魔術や妖術をかける意味よりは優れた能力を含めたことに違いない。小松社長に「魔法の経営者」という表現をするのは筆者の判断でなく、早川和弘というジャーナリストが著述した小松さんの伝記に当てはまる「魔法の経営」という本から引用したものである。

小松社長が代表取締役である小松電機産業株式会社は大きく分けて 3 種類の事業を展開している。

父の地方議員の落選で家庭が経済的に苦しくなり、大学進学を放棄して農業機械メーカーに入社し、設計部門に勤めた。しかし、その会社が倒産し、大阪の設計事務所に勤めたがうまくいかずやめて、拾ったパチンコ玉で稼いで生活するなどの彷徨の後、地元に戻ってきて弟と一緒にトイレ、下水道などの詰まりを解消する仕事を始めた。そんな彼が一躍日本でも著名なベンチャー企業家として成功を成し遂げたことをみても「魔法の経営人」と呼ばれる根拠になる。彼の成功は自ら研究、開発したシートシャッターがヒットになってからである。

「門番」は従来の概念を脱皮し、原資材から異なる画期的な商品として防寒、防塵、防虫性にエネルギーの節約効果まで加えられ工場、倉庫、商店などで爆発的な人気を

集めている。小松社長は「門番」の開発により、日本のニュービジネス大賞を受賞した。

二番目の事業は「やくも水神」という上下水道遠隔監視制御システムの開発と運営である。このシステムは高度の先端事業として、世界的な通信会社であるNTTドコモの携帯電話から i モード・インターネットで施設を制御監視するものである。このシステムは日本科学技術庁で「注目発明選定証」を交付されるほど日本政府が公認した技術であり、効率的な上下水道管理に寄与した商品である。

三番目の事業は地球蘇生事業である。小松社長からは生産的な企業活動を通じて自然環境と社会環境の変革を齎す努力が見える。新しい概念の「門番」とインターネットで制御監視する「やくも水神」の開発も包括的に環境のコンセプトを元に行っている。

特に小松社長が「水神」をブランド化した意味を吟味してみると、水に対する愛着心がいかに大きいのがよくわかる。“水は神だ”という命題は人類が一番深刻に受け入れ、使命感をもって取り組む必要がある問題である。彼は近年に石油問題よりも水問題で平和が脅威にさらされることを予言し、それに対する準備を強調した。

それで多く投資をしながら段階的に成功している事業が排水処理システムである。小松社長の案内で二度にわたって訪問した農村地域の生活下水処理場は、電機・電子技術がどこまで発展するのか、その可能性をみせてくれた現場であった。

住民約 900 名が排出する生活排水を、微生物による複合醗酵工法により、最後の放流水が飲用水レベルまで処理できるようにする下水処理場である。そこはたった一人の職人により運転されているが、それは自動制御システムが備えているからである。

現在は生活下水を処理するレベルだが、これからは畜産排水、工業排水を完全処理し、資源化できる段階まで発展させ水資源の不足に対応し、汚染された海と湖を復元させることにも貢献したいとする信念強い事業計画である。これからどれほどの時間と努力が必要なのか予測できないが、現在に実行されている一連の過程を見た通りでは近いうちに地球環境を蘇生させる「魔法の経営」が再び作用され大きく貢献すると期待している。

一方で小松社長の「魔法の経営」が行われている小松電機産業を二度にわたって訪問し調べるうちに、彼の独特な性格と経営観を感知することができた。

ある程度に規模のある企業には社是、社訓、経営理念といった会社のスローガンがあちこちに貼られている。韓国の場合は大体が硬い文章で書かれている。日本企業が一般的にどういった文章にするのかよく分からないが、小松電機の経営理念は奇異なものだった。

“おもしろ、おかしく、楽しく、愉快に”が会社の経営理念である。このおかしく、楽しい経営理念こそが魔法を作り出す出発点だと確信を持たせるようだ。それだけでなく、会社は宍道湖周辺に位置しているが、むしろその場所にはホテルやレストランを建てたほうが相応しいくらい眺めがいい所だった。

工場の内部も筆者の常識からは外れた奇抜な所だった。製品を生産する工場には何人かの労働者が働く中で、すべての設備が自動化され、水が流れるような光景に気を取られ眺めているのも魔法に掛かっているようだった。

食堂からは工場全体の動きが観察できる、怖いほど緻密な設計になっていた。そして食堂に付いているバーラウンジでは宍道湖を眺めながら一杯のカクテルを飲めるようになっており、小松社長のヒューマニズムとロマンティズムをたっぷり感じられる所だった。

そこは人間を人間らしくする真におかしく、楽しい人間の工場であり芸術的な感覚と眼目が目立つ、美しい魔法の工場であることに間違いなかった。とりわけ小松社長はおかしく、楽しい方だった。

昔、誰かがこう言った。“自分だけのために努力する人は「小人」であり、他人、共同体のために努力する人は「大人」である” ついこの言葉を思い出したのは、この言葉は小松社長に当てはまることだと思ったからである。世の中には小松社長のように体型は大きくないが、思考と能力が大きい人は数多く存在している。“小さいトウカラシが辛い”という韓国のことわざのように、体型が小さい人が大きい人世を送る場合が多い。

それでは自分の会社のことも忙しく、ライバル会社からの挑戦にも刻々対応し、準備しないといけないのに、規模が大きい社会事業のアイデアと推進力はどこから出るのか。小松社長は社外活動の中で、学校と公共機関に招かれ、講演の講師としても活躍している。しかし面白いのは小松社長が本をあまり読まないことだった。世の中の流れを掴むため、主に新聞を活用していた。いくつかの新聞には必要な情報と知識が溢れている。本を読む必要がないからではなく本を読む時間が足りないことだ。新聞から多くのことを得ると言う小松社長の話を聞いてみると、いつも手軽で手に入れるのが新聞だと思った。新聞は高度の専門性を備えた知識人が参加して作られる。そして世の中に溢れる数多くの知識と情報の中で必要な部分だけを取り上げ整理された記事を読むことができるから、これほど安い価額で高い価値を得る方法はないだろう。特に最近の新聞はより雑誌化され、多様化、多事化された世の中の潮流を反映してくれるため、多くの時間を掛けて本を読むよりは安い費用で適正な情報を得ることが出

来る。

多くの人々は新聞を読む際に習慣的に大タイトル、中タイトル、小タイトル程度くらいで大ざっぱに読み上げるが、小松社長は新聞を精読する習慣を持っているようだ。

成功する人には一般人と違う特性と習慣があるのが定説だ。それで一番良い子供の教育は、良い習慣を身につけるように誘導することである。

そして彼は新聞から得た知識と情報をそのまま受け入れるのではなく、自分の思索を通じて内面化させる過程を習慣的に繰り返しているようだ。このような彼の特有な面は、対話に染み付いている哲学的、理想的な面から感じられた。彼が設立した研究所と今まで不断に実践してきた社会活動の内容が、ずばりこの理想主義的で哲学的な傾向からスタートされたといっても間違いはないだろう。

とりわけ小松社長は滅多に見掛けられない日本的な企業家であり、偉大な人物である。

企業人として成功した小松社長を探索し、証明する本が 2 冊も発刊されたのをみても彼に対する立証は終わったと思う。そして日本の重要新聞とメディアが彼を取り上げたものも数多くあり、韓国と中国のメディアからも数回紹介されるほど社会に影響力を及ぼす人物である。それなのに筆者が二度も日本に渡り、彼と会って周り取材したのは、彼の企業人としての生き方が韓国の企業人に立派な手本になると信じたからである。

筆者は成功した企業人こそが真なるリーダーになれると考えている。企業の経営マインドで社会と国家を改革させることが、政治と行政よりも効率的だと考えているので、韓国からも多くの中小企業人が小松社長の生き方と「魔法の経営」をベンチマーク（基準点）にするように誘導したくこの記事を書いた。

筆者は今度機会があれば、小松社長を招き、韓国の企業人と交流会を開き、両国家の企業人が知恵を搾り出し、情報を分け合うことで両国家の社会を改革させ平和を増進させるため努力するつもりである。

取材したものを全部述べようとしたら一冊の本でも足りないほどの分量である。紙面の理由で纏めるのが名残惜しい。取材を気持ちよく受けてくださった小松社長と協力してくれた曹秀煥社長、尹熙竣さんには深い感謝をささげる。

부산경제의 활로모색을 위한 전문가·시민 토론회

- 부산경제를 살리기 위한
지역사회의 역할

일 시 _ 2006.10.19(목) 16:00~17:30

장 소 _ 부산광역시청 국제회의실(12층)

주 최 _ 부산은행

주 관 _ (사)목요학회

 고객과 함께 미래를 여는 —
부산은행
www.pusanbank.co.kr



木曜學術會

「グローバル時代における 経営者マインド」

발제자: 小松昭夫

- ▶ 小松電機産業株式会社代表取締役社長
- ▶ 財団法人 人間自然科学研究所理事長

「グローバル時代における経営者マインド」

■ 小松昭夫

〈目 次〉

- | | |
|---------------------|----------------------|
| I. グローバル時代の民主主義 | III. グローバル時代における企業とは |
| II. グローバル時代における国家とは | IV. まとめ |

ヨロブン、アンニョンハシミカ（皆さん、こんにちは）

先ほどご紹介させて頂きました小松昭夫でございます。このような場を設けてくださった木曜学会と釜山銀行に感謝申し上げます。

特に 木曜学会は 二回にわたる来日取材を通じて、深い洞察力で私の活動と実績を正確な形で、市民時代七月号、続く特別号で取り上げていただきました。この場を借りまして厚くお礼申し上げますとともに、日韓相互理解はもとより、北東アジア、そして人類の歴史の評価に耐える構想とその実現に道筋をつけるため、最善の努力を致す所存でございます。みなさまのご指導を願うと共に、同志的結合を築くきっかけになればと願っています。

世界が安定的に存立しなければ、国家、企業、家庭、個人の安定的発展はありません。企業が安定かつ、活力に満ちた活動が持続できる環境とは何かを考察するなかから、グローバル時代における「民主主義」「国家」「企業」を、人間自然科学研究所が長年の実践と研究から見出した視点でお話したいと思います。

I グローバル時代の民主主義

民主主義、自由、基本的人権の尊重、この三つの柱が、近代国家の基本ということになっています。

21世紀の民主主義の原点は、人類は上下の格差をなくし、現状認識を共有化し、当事者意識を持って、論理的に議論することを条件に自由を保障すれば、困難を克服する新たな知を生み出すことができる。のことをギリシアでは“偉大な生命体”を意味するマクロビウスとっております。こうした条件を備えて、初めて市民、人間として認められます。

今までの民主主義は大衆を愚民化する方策を取っていました。つまり、掌握する方とされる方の二極化をすることで出来上がった文化の上で、花開いた文明です。多少の変化は始まっていますが、いまでも大多数が学校に行き、卒業すれば就職することに異を唱えていません。

飢餓と殺戮を克服し、衣食住が足りた後は、人は掌握する、される関係ではなく、パートナーシップの関係になります。ここに行くことによって楽しく、持続的に生きることができます。

IT技術の発達と大量輸送時代を迎え、時間と空間を超えて、地方と世界の社会問題と、その経緯と背景を共通認識化することができる環境が整いました。そのことによって、太古の民主主義をグローバル化した、21世紀の新たな民主主義を実現することが可能となってまいりました。

II グローバル時代における国家とは

「企業」を語る前に、グローバル時代における「国家」とは何かを考えねばなりません。グローバル化によって、国家の定義と役割が変わり、国家という概念を生命、人類、人間、という本質的な視点から見直し、具体的な計画の発表、行動、成果を通じて、国内外から尊重される新たな国家像を示すことが、個人も含めて国家が世界の中で存在するために必要不可欠になってきたと認識しています。

まず、「グローバル時代」とは何か。世界的な金利の自由化、市場の整備と拡大が進むにつれて、投資家にとっては資金の保全と運用のチャンスと、リスクが急拡大しました。企業の資金調達も銀行借入（間接金融）から、市場から直接資金を調達する直接金融の時代へ変わってきました。短期間のうちに、膨大な資金調達と、企業合併を繰り返すことによる経営の急拡大、および巨大な破綻が、日常茶飯事になっています。

企業に投資するのはもはや国内の資本家に限りません。金融市場から資金を調達するためには、当然、全世界的な意義と目的を構築することが求められます。ビルゲイツ財団に代表されるように、巨大な寄付の文化の潮流も始まっています。

人材、物資、資金、情報の、高速大移動時代が世界規模で進み、相乗効果（シナジー：Synergy effect）で進化、退化の、双方の面が進行しています。生命体としての人類にとって、業態によっては整合性が取れなくなり、生命学の視点から持続不可能な様相も多々見受けられるようになってきました。

交通機関が未発達な時代には、お互いに干渉することが少なかった文化と文明が、時間と空間を超えて交流するようになっていきます。当然、そこに異なる文化と、文明の衝突が起きる懸念があります。

今の時代は国家間が密接に結びつき、一国のみで生きられる国はありません。また、隣の国を選ぶこともできません。世界、北東アジアの中で自国の役割は何なのか、それを地理、気候、環境、歴史、インフラと先端技術を組み合わせ、国家の核を連携の中から再構築するしかありません。

飢餓と殺戮が終わり、物質的な繁栄を享受している韓国と日本は共同して、歴史問題を克服し、いまだ残る「飢餓と殺戮の社会」が自立できるよう支援すると共に、「楽しく持続可能な社会」を作るための世界的モデルを具現化するところから始める必要があります。

人は衣食住が足りた社会では、より楽しく生きたいという欲求が生まれます。人類進化の視点でメディアと企業と国家の戦略的な提携により、社会に性善説が定説となる状況を生み出し、持続する環境を整えることが、今、もっとも必要とされています。これがソフトパワーの真髄ではないでしょうか。

Ⅲ グローバル時代における企業とは

企業の本質とは、政治的目的を具現化するためと、個人の欲望を具現化するための装置と認識しています。企業は法律・政策・条約によって守られ、また、規制も受け、支援も受けています。そして、もっとも社会の風潮、景気、市場の影響を受ける組織です。

企業は人の集まりであり、かつ、顧客なくしては存在しません。そして顧客は市場、社会の中に存在しています。それぞれの構成要員は、すべて人です。よって、生命・人類とは何か、その時代の人間の定義ということから考察しなければ、経営の本質を理解することはできません。

日本ではよく、「政治と経済は別である」という言い方がされますが、これは社会の本質を理解していないことからおきる誤解です。企業は政治的目的を具現化するための装置以外の何ものでもありません。

衣食住が足った社会においては、より楽しく生きたいという欲求が生まれます。しかし、価値観の多様化により、人それぞれの欲求は違っていきます。国民の価値観が多様化し、企業が限度を超えて肥大化したり、発展の方向を誤ると、国民の利益と相反することがおきます。その結果、自分たちが一所懸命に努力をすればするほど善良な人が息苦しい社会になってしまうことがあります。

そのため、生命、人類の特性から考察した「楽しく持続可能な社会を作る」価値観を共有、欲望・欲求を目的具現化のために誘導、自発的にその方向に発展するよう法律・制度を整備、運用、さらに科学と技術を最大限に活用した結果として、自国の継続的利益にもつなげるのが21世紀の企業経営と考えています。その中から地球益と整合性のとれた、真の愛国者が生まれるのではないのでしょうか。

日本では四百年前、二宮尊徳という人が「理念なき経済は罪悪であり、経済を伴わない理論はたわごとである」と言っています。これに21世紀は生命科学の成果を加えることによって、更なる持続的発展が期待できると確信しています。

グローバル時代の経営者に要求されるのは、知識、能力もさることながら意識がもっとも重要であり、それは想像力、先見性、決断力の三つで構成されます。実践においてはさらに、見識、勇気、胆力を必要とします。

出来るか、出来ないかではなく、やる意義があるか、ないか、が判断基準です。解りやすく意義の高い情報を発信、共感者を増やし、ホームページから過去の実績を知ることにより納得、積極的な水平分業（パートナシップ）がはじまります。

組織の効率的な運用のための文化・教育システムはどうあるべきか。ポイントは、地球学の視点で地理的な位置、気候、歴史、文化と、最先端の技術を組み合わせ、企業経営の核をつくり、ビジネスモデルを構想、組織をつくり、人間の想いと欲望を誘発・誘導することにより、成果に繋がる具体的行動を促す体制を整えるということになります。

地球学の視点で時代の潮流と地の理を生かし、過去の実績を背景に、啐啄同時で人の和を生み出し、右脳主導の経営が主流になるよう誘導する以外に、企業・国家・人類が生き延びることはできないと理解しています。

Ⅳ まとめ

人類の歴史の中でいま、世界恒久平和の入り口を開くために、韓国、北朝鮮が重要な役割を果たす時代を迎えたと認識しています。中国、ロシア、米国の見識ある方々の理解のもと、韓国、北朝鮮と一緒に、日本の山陰地域が、全世界のソフトパワーを結集し、恒久平和の突破口を開く時に来ています。韓国からの国連事務総長輩出と、北朝鮮の核実験実施を契機に、現実を直視し、未来志向で歴史問題を正面から受け止めれば、平和への大きなエネルギーを生み出すことが出来ます。もしこれに失敗すれば、北東アジアはもとより、世界に大きな災いを広げることにもなりかねません。

このような状況下、日本の植民地・対戦国だった国では、巨額の資金を投じて、たくさんの戦争と平和、独立記念館が作られてきました。日本では、近・現代史を総合的に考察した施設は造られず、また教育もほとんど行われてきませんでした。このままでは歴史認識の差は開くばかりであり、このような状況で備忘策を労し、表面を取り繕っても根本的な解決にはなりません。それどころか、ますます解決の道は遠のくばかりです。本質的な議論ができる人材の生まれる環境の整備からはじめるしかありません。

そこで、私は写真と映像で世界の「戦争と平和記念館」を同じ場所で総合的に学ぶことができるし、戦争と平和に対して大局、具体的な思考が生まれる環境を整えたいと思っています。ユーラシア大陸、朝鮮半島の対岸である日本・山陰地域で定期的に各界の平和会議を開催することにより、北東アジアから平和への流れを生み出すことができます。

世界の記念館を写真と映像で観覧できる施設は、世界に先例が無く、想像を超える効果が生まれる可能性が高いです。ブロードバンドの普及によって、世界の記念館の展示内容の変化を即座に見ることもでき、また、入場者の反応も共有することができます。

「世界写真・映像 戦争と平和記念館」は、各地の記念館を訪問するきっかけと、記念館同士の縁結びとなり、平和への自立的な動きが期待できます。世界の人々が定期的にこの記念館に集まり、ブロードバンドを使って未来志向で議論を重ねる中から、恒久平和への動きが始まります。このプロセスを世界に広報することは、メディアにとって重要な役割であります。また、スポンサーにとっても、社会有用企業として認められる良い機会を提供することになります。

私の話が、日韓の相互理解の進展、韓国、釜山広域市の発展と、今日ご参加のみなさま方の経営に少しでもお役に立てば幸いです。

最後に、1997年に発表された「人間の責任に関する世界宣言」第11条と、老子の言葉をご紹介します。

「あらゆる財産と富は、正義に則し、人類の進歩のために責任を持って使われなければならない。経済的および政治的権力は、支配の道具としてではなく、経済的正義と社会的秩序に役立つように使われなければならない。」

理不尽なことの多い社会で、道理を追求するうちに、ヒラメキが起き、仮説が生まれます。老子の言葉から、大きなエネルギーが生まれる時代を迎えています。

「道の追求は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」

ご清聴ありがとうございました。

ガムサハッミダ（ありがとうございました）。

「글로벌시대의 경영자 마인드」

■ 코마츠 아키오

〈목 차〉

- I. 글로벌시대의 민주주의
- II. 글로벌시대의 국가

- III. 글로벌시대의 기업
- IV. 마무리

여러분 안녕하세요.

방금 소개를 받은 코마츠 아키오라고 합니다. 제가 이 자리에 설 수 있도록 힘써 주신 목요학술회와 부산은행에 감사의 말씀을 드립니다.

목요학술회는 두차례의 일본 취재 방문을 통해, 세밀한 통찰력으로 저의 활동과 실적을 정확하고도 자세하게 「시민시대 7월호(특별호)」에 실어주셨습니다. 다시 한번 깊은 감사의 말씀을 드리며, 이 자리를 계기로 한층 더, 한일관계의 이해는 물론, 동북아시아, 그리고 인류 역사에 남을 만한 미래 구상을 구현시키기 위해 최선의 노력을 다하겠습니다. 여러분의 지도와 회합을 이루는 계기가 되었으면 하는 바람입니다.

세계가 안정적으로 존립하지 않으면 국가, 기업, 가정, 개인의 안정적인 발전은 없습니다. 기업이 안정되고도 원활한 활동을 지속할 수 있는 환경이 무엇인가를 생각하면서, 글로벌 시대의 「민주주의」 「국가」 「기업」에 대해 인간자연과학연구소의 오랜 실적과 연구 성과를 토대로 말씀 드리겠습니다.

I 글로벌시대의 민주주의

근대국가는 민주주의·자유·기본적 인권의 존중, 이 세가지가 기본 요소입니다.

21세기의 민주주의 원점은, 인류간의 상하(上下) 차별을 없애고, 현상(現狀)에 대한 인식의 공유화와 주인의식을 가지고 논리적으로 의논할 수 있는 자유를 보장해 준다면, 어려운 상황을 극복할 수 있는 새로운 지혜가 창출되는 것입니다. 이것을 그리스에서는 “위대한 생명체”라는 의미로서 마크로비우스(Macrobius)라고 합니다. 이와 같은 조건이 갖추어졌을 때 비로소 시민으로서, 인간으로서 인정받을 수 있습니다.

지금까지 민주주의는 우민정책(愚民政策)을 취해 왔습니다. 즉 권력을 잡는 쪽과 잡히는 쪽이라는 양극화 문화 속에서 꽃 핀 문명입니다. 다소의 변화는 시작되었지만, 아직까지 학교를 다니고, 졸업하면 취업하는 것을 이상하게 생각하고 있지 않은 것처럼 . . .

기아와 살육에서 벗어나 의식주가 풍요로워지면서, 인간을 권력으로 장악하거나 장악당하는 관계가 아닌, 파트너십 관계로 바뀌었습니다. 이로 인해 지속적인 즐거움을 누릴 수 있게 되었습니다

IT정보 기술의 발달과 대량수송시대를 맞이하여 시간과 공간을 초월하여 세계의 사회문제와 지방의 문제, 그리고 그에 대한 경위와 배경을 공통인식화 하는 것이 가능한 시대가 도래하였습니다. 즉, 태고의 민주주의를 글로벌화시켜, 21세기의 새로운 민주주의를 실현시킬 수 있게 되었습니다.

II 글로벌시대의 국가

「기업」을 논하기 전에 글로벌 시대에 있어서의 「국가」란 무엇인가를 생각하지 않으면 안됩니다.

글로벌화에 따라, 국가의 정의와 역할이 바뀌고, 국가라는 개념을 생명·인류·인간

이라는 본질적인 시점부터 새롭게 재검토하여, 구체적인 계획에 의한 발표·행동·성과를 통해 국내외로부터 존중 받을 수 있는 새로운 국가상을 제시하는 것이야말로, 개인은 물론, 국가가 세계 속에 존재하기 위한 필수 불가결이 아닐 수 없습니다.

우선, 「글로벌 시대」란 무엇인가? 세계적인 금리 자유화와 시장의 정비(整備)와 확대가 진행됨에 따라, 투자가는 자금의 보전과 운용의 기회 혹은, 위험이 급격하게 확대되었습니다. 기업의 자금조달도 은행차입(간접금융)에서, 시장에서 직접 자금을 조달하는 직접금융 시대로 바뀌었습니다. 단기간에 방대한 자금조달과 기업합병을 반복함으로 인해 기업의 급격한 확대와 대규모 파탄이 혼한 일이 되었습니다.

뿐만 아니라, 기업에 대한 투자도 국내 투자자들에게 한정되어 있지 않습니다. 금융시장에서 자금을 조달하기 위해서는 세계적 규모의 의의와 목적을 갖추어야 합니다. 빌 게이츠재단으로 대표되는 것처럼 거대한 자금을 기부하는 문화의 조류도 시작되고 있습니다.

사람, 물자, 자금, 정보의 초고속이동 시대가 세계규모로 진행되어 상승효과(Synergy Effect)로 진화와 퇴화 양방향으로 진행되고 있습니다. 생명체인 인류는 업무나 운용에 따라, 정합성(整合性)을 갖추기 힘들게 되었고, 생명학의 관점에서도 지속 불가능한 양상이 나타나고 있습니다.

교통기관이 발달하지 못한 시대에는 상호간에 교류가 적었던 문화와 문명이 지금은 시간과 공간을 초월하여 교류하게 되었습니다. 물론 다른 문화(異文化)와의 문명 충돌이 있을 수 있습니다.

현 시대는 각 국가가 밀접한 관계로 연결되어 자국의 힘만으로 살 수 있는 나라는 없습니다. 또한 이웃 나라를 선택할 수도 없습니다. 세계, 동북아시아에서 자국의 역할은 무엇이겠습니까?

그것은 지리, 기후, 환경, 역사, 인프라와 첨단기술을 조합한 후, 국가의 핵을 연계하여 재구축하는 것 밖에 없습니다.

기아와 살육이 끝나 물질적인 번영을 누리고 있는 한국과 일본은, 역사문제를 극복하고 아직까지 남아 있는 「기아와 살육의 사회」가 자립할 수 있도록 지원하는 동시에,

「지속적으로 즐겁게 살 수 있는 사회」를 만들 수 있도록 세계적인 모델을 구현하는 것부터 시작해야 된다고 생각합니다.

인간은 의식주가 풍족한 사회에서는, 보다 즐겁게 살고 싶어하는 욕구가 생겨납니다. 인류의 진화가 시작되면서부터 미디어와 기업, 그리고 국가의 전략적인 관계에서부터 사회에 성선설(性善說)이 정설(定說)이 되는 상황을 만들었으며, 지속적인 환경을 만드는 것이 무엇보다도 필요하게 되었습니다. 이것이 소프트파워의 진수입니다.

Ⅲ 글로벌시대의 기업

기업의 본질은 정치적 목적과 개인의 욕망을 구현하기 위한 장치라고 생각합니다. 기업은 법률·정책·조약에 의해 보호 받으며, 제약도 받고 지원도 받고 있습니다. 그리고 무엇보다도 가장 사회의 풍조·경기·시장의 영향을 받는 조직입니다.

기업은 사람의 모임이며, 고객 없이는 존재할 수 없습니다. 그리고 고객은 시장과 사회 속에서 존재하고 있습니다. 각각의 구성요원은 모두 인간입니다. 그러므로 생명·인류란 무엇인가, 그 시대의 인간의 정의로부터 생각하지 않으면, 경영의 본질을 이해할 수 없습니다.

일본에는 「정치와 경제는 별개」라는 말이 있습니다만, 그것은 사회의 본질을 이해하지 못하는 것에서부터 생겨난 오해입니다. 기업은 정치적 목적을 구현하기 위한 장치 이외에는 아무것도 아니기 때문입니다.

의식주가 풍족한 사회일수록 보다 더 즐겁게 살고 싶은 욕구가 생겨나는 것입니다. 그러나, 가치관의 다양화에 따라 한 사람 한 사람의 욕구는 다릅니다. 국민의 가치관이 다양화되고, 기업이 한도를 넘어 비대화되거나, 발전의 방향이 잘못되어 버리면 국민의 이익과 상반되는 결과를 초래하게 되는 것입니다. 그렇게 되면 결과적으로는, 최선을 다해 노력하면 할수록 선량한 사람들이 고통 받는 사회가 되어 버리는 것입니다.

그러므로 생명·인류의 특성에서부터 고찰한 「즐거운 삶이 지속 가능한 사회를 만든

다」는 가치관을 공유하고, 욕망과 욕구를 목적으로 구현하기 위해 유도함으로써, 자발적으로 그 방향으로 발전하도록 법률과 제도를 정비·운용하면서, 과학과 기술을 최대한 활용한 결과, 자국의 지속적 이익으로 연결시키는 것이 21세기 기업경영이라고 생각하고 있습니다. 그 속에서 지구의 이익과 정합성이 갖추어지는 진정한 애국자가 태어나지 않겠습니까.

400년 전의 일본에서 니노미야 손토쿠(二宮尊徳)라는 사람이 「이념 없는 경제는 죄악이며, 경제를 수반하지 않는 이론은 실없는 소리에 불과하다」고 말했습니다. 여기에 21세기는 생명과학의 성과를 첨가함으로써 더욱더 번창할 것으로 확신합니다.

글로벌 시대의 경영자에게 요구되는 것은, 지식, 능력은 말할 것도 없지만, 그 무엇보다도 의식이 가장 중요합니다. 그것은 상상력, 앞을 내다볼 수 있는 선견성, 결단력이 세가지로 구성되었습니다. 뿐만 아니라 실천에서는 견식(見識)·용기·담력을 필요로 합니다.

또한 될 것인가, 되지 않을 것인가가 중요한 것이 아니라, 할 의의가 있는가 없는가가 판단의 기준이 되어야 합니다. 그러므로 알기 쉽고, 의의 있는 정보를 알려, 공감할 사람을 늘리고, 홈페이지로부터 과거의 실적을 알게 됨으로써 보다 잘 이해해, 적극적인 수평분업 즉 파트너십을 이룰 수 있는 것입니다.

조직의 효율적인 운용을 위해 문화 교육 시스템은 어떠해야 할까요? 그 포인트는 지구학의 관점에서 지리적 위치, 기후, 역사, 문화와 최첨단 기술을 조합해, 기업경영의 핵심을 만들어 비즈니스 모델을 구상하고 조직을 만들어 인간의 바람과 욕망을 유발시켜 유도함으로써 성과로 연결되는 구체적인 행동을 촉진하는 체제를 정비해야 합니다.

지구학의 관점에서 시대의 조류와 지리를 활용해, 과거의 실적을 배경으로 가장 적절한 시기에 사람들의 화합을 창출하고 우뇌(右腦)를 사용하는 경영이 이루어지도록 유도하는 것 이외에는 기업·국가·인류가 연명할 수 있는 방법은 없다고 생각합니다.

IV 마무리

인류의 역사 가운데 지금은 세계영구평화의 입구를 찾기 위해 한국, 북한이 중요한 역할을 담당해야 할 시대가 왔다고 인식하고 있습니다. 미국, 중국, 러시아의 견식 있는 분들의 이해 하에 한국, 북한과 함께 일본의 산인(山陰)지역이 전세계의 소프트파워(Soft Power: 화합력)를 결집시켜, 영구평화의 돌파구를 모색할 때라고 생각합니다. 한국의 유엔사무총장 배출과 북한의 핵실험실시를 계기로 현실을 직시하고 미래지향적으로 역사문제를 정면으로부터 받아들이는다면 평화를 위한 큰 에너지를 낼 수 있으나, 만일 실패한다면 동북아시아는 물론이며 세계에 크나큰 재앙을 불러올 것입니다.

이런 상황 하에 일본의 식민지, 교전국이었던 나라들도 거액의 자금을 투자해 여러 곳에서 전쟁과 평화, 독립기념관을 많이 건립하였습니다. 그 반면, 일본에는 역사 교육은커녕 근·현대사를 종합적으로 고찰할 수 있는 시설 조차도 없는 실정입니다. 이대로라면 역사 인식에 대한 차이는 점점 더 커질 것이며, 이런 상황 속에서 표면화된 문제들을 해결한다고 해도 미봉책에 불과하여 본질적인 해결은 될 수 없을 것입니다. 오히려 해결의 길은 점점 더 멀어 질 것입니다. 본질적인 의논이 되는 인제가 양성될 수 있는 환경의 조성부터 시작할 수 밖에 없습니다.

그래서 저는 사진과 영상으로 세계의 「전쟁과 평화 기념관」을 한 장소에서 종합적으로 배울 수 있고, 전쟁과 평화에 대해 전체적인 흐름과 과정, 그리고 결과를 구체적으로 생각할 수 있는 장을 만들려고 합니다.

유라시아 대륙과 한반도의 건너편인 산인(山陰)지역에서 정기적으로 각계의 평화회의를 개최하게 되면 동북 아시아에서 평화에 대한 흐름을 주도할 수 있게 됩니다.

세계의 전쟁과 평화기념관을 사진과 영상으로 관람할 수 있는 시설은 세계에서도 선행이 없으며 상상을 초월한 시너지효과를 낼 것으로 기대합니다.

뿐만 아니라 브로드밴드(broadband : 광대역)의 보급으로 세계의 기념관의 전시 내용과 관람객의 반응도 공유할 수 있는 최적의 장소가 될 것으로 믿고 있습니다.

「세계의 사진과 영상 그리고 전쟁과 평화 기념관」은 각 지역의 기념관을 방문할

계기를 제공하며, 기념관의 관계자들과의 인맥을 형성하게 되어 평화에 대한 자발적인 운동을 기대할 수 있습니다. 세계의 사람들이 정기적으로 이 기념관에 모여 브로드밴드를 사용한 미래 지향적인 논의를 거듭함으로써 항구적인 평화 운동이 시작될 것입니다.

이 프로세스를 세계로 홍보하는 것은 미디어의 중요한 역할입니다. 또한 스폰서는 사회에 유용한 기업으로서 인정받을 수 있는 좋은 기회이기도 합니다.

저의 이야기가 한일 양국간 상호이해의 진전, 그리고 한국, 부산광역시의 발전과 오늘 참가하신 여러분들의 경영활동에 조금이나마 도움이 되었으면 합니다.

마지막으로 1997년 발표한 「인간의 책임에 대한 세계선언」 제11조와 노자(老子)의 말씀을 소개해 드리겠습니다.

「모든 재산과 부는 정의에 따르고, 인류의 진보를 위해서 책임을 지고 사용하지 않으면 안 된다. 경제적 및 정치적 권력은 지배의 도구로서가 아니고 경제적 정의와 사회적 질서에 도움이 되도록 사용하지 않으면 안 된다」

도리에 맞지 않는 것이 만연하는 사회에서 도리를 추구하다 보면 번뜩임이 생기고 가설이 세워질 수 있습니다.

지금 노자의 명언으로부터 큰 에너지가 생겨나는 시대를 맞이하고 있습니다.

"도는 하나를 낳는다. 하나는 둘을 낳는다. 둘은 셋을 나으며 셋은 만물을 만든다"

경청해 주셔서 감사합니다.





다시 세상이 만난 사람

국제적인 ‘和의 文化’ 전도사

재단법인 인간자연과학연구소

고마츠 아키오(小松昭夫) 이사장



▲ 2005 APEC 본회의장이었던 해운대의 누리마루 앞에 선 고마츠 이사장

시네마현 마츠에의 괴짜 기업인

고마츠 이사장은 일본 시마네(島根)현의 마츠에(松江)에 소재한 고마츠(小松)전기주식회사의 대표이사다.

그의 조상들이 대대로 살아온 시마네현은 한자의 뜻풀이는 ‘섬의 뿌리’가 된다. 곧 섬나라 일본의 뿌리가 되는 곳으로 해석될 수 있다. 특

히 이 지명이 한국인들에게 익숙한 것은 자기들 이름으로 ‘다케시마(竹島)’라고 하는 독도가 바로 시마네현에 속하는 것으로 인구에 회자되기 때문이다(일본인들이 대나무 한 그루 없는 바위섬인 독도를 무슨 뜻으로 다케시마(竹島)라 하는지 모를 일이다).

시마네현의 현도는 마츠에(松江)다. 고마츠 이

사장의 이름에 마츠(松)가 들어 있는 건 그가 마츠에에 뿌리를 내리고 사는 운명적 관계를 설명하는 듯하다.

전통적으로 일본인들은 나무 중에 소나무(松)와 대나무(竹)를 국목(国木)처럼 선호한다. 사람 이름이나 지명에 松(마츠)과 竹(다케)은 약방에 감초만큼이나 많이 쓰이고 있다.

필자는 6년 전 마츠에를 두 번 방문한 적이 있다. 순전히 고마츠 이사장을 만나기 위해서였다.

松江(마츠에)의 이름에 걸맞게 그 도시는 흙사물에 떠 있는 것처럼 보였다. 도시의 규모는 인구로 보아 20만 명쯤 되는 중소도시였지만 도시라기보다 하나의 그림 같은 휴양지 같은 분위기가 물씬했다. 특히 바다와 강이 조우하는 기수(汽水)지역이란 특성이 이 예쁜 물의 도시를 더욱 매력적으로 느끼게 했다.

필자는 지금까지 일본의 크고 작은 도시를 포함해 30여 곳을 둘러보았지만 松江만큼 감명을 주는 곳은 없었다. 어느 곳에서도 물과 소나무를 볼 수 있는 그곳이 더욱 아름답게 보일 수밖에 없었던 것은 고마츠 아키오란 괴짜 때문이었던 지도 모를 일이다.

작달만한 키에 왜소하기 조차한 이 괴짜 사나이에 대해서는 이미 6년 전 '시민시대'에 소개한 바 있어 기억의 끈이 팽팽한 독자들 중에는 각인되어 있을 줄 안다.

필자가 고마츠 이사장과 인연을 맺은 것은 3년 전 세상을 떠난 이정석 선생의 소개로 이루어졌다. 선생은 목요학술회 회원으로 필자에게 많은 도움과 지도를 해준 은인이었다.

선생의 일본에 대한 총체적 지식은 때때로 일본 지식인들을 압도할 정도로 탁월했다. 선생이 고마츠 이사장을 소개한 까닭은 그의 유별난 한국에 대한 관심과 행동이었다.

무엇보다도 그는 과거 일본인들이 한국인들을 괴롭히는데 대하여 사과하고 조금이라도 그에 대

한 보상을 하고자 독립기념관, 백범기념관, 안중근 의사기념관 등을 찾아가 헌화하고 성금을 기탁하는 행위를 서슴치 않았다.

최근(5월 초순)에는 유럽의 네덜란드 헤이그로 날아가 독립지도자 이준 열사의 기념관을 찾아 머리를 숙이기도 했다. 그리고 과거 일본의 폭력이 한국뿐만 아니라 아시아 전체의 평화를 유린하고 수많은 인민들에게 불행을 안겨준 과거사를 단순히 반성하고 보답하는 한시적인 것으로는 이 지역의 항구적인 평화를 담보할 수 없다는 생각에서 국제적인 평화운동에 나선 것이다.

고마츠 이사장의 이 같은 행동을 지켜보고 평가한 故 이정석 선생은 필자를 비롯해 많은 사람들에게 그를 알리는 일에 앞장서곤 했다. 고마츠 사장을 취재한 이후 지난 6년 여간 거의 1년에 한 번 꼴로 만나곤 했는데 3년 전 목요학술회 창립 30주년 때에는 기꺼이 부산을 찾아 축하를 해주기도 했다.

필자가 이번 호에 그와의 대담 기사를 게재하게 된 것은 지난 6월 14~17일까지 부산BEXCO에서 개최한 국제식품산업전시회에 그의 회사가 참여한 것을 계기로 6월 16일 부산을 방문한 후 여수EXPO를 관람할 일정이 필자에게 알려진 것이 계기가 되었다.

그런데 필자는 그의 부산방문 일정에 제주 일정이 있었지만 취소하고 그의 부산 일정에 함께하기로 했다. 그런 후 일정을 하루 앞당겨 6월 15일 부산을 방문할 수 없는지 의향을 물었다. 이유는 그날 오후 6시 '시민시대'의 발행처인 목요학술회가 부산상공회의소에서 임진왜란 420년을 맞아 국내 최고의 이순신 장군 연구가인 헌법재판소의 김종대 헌법재판관이 쓴 「이순신, 신(臣)은 이미 준비를 마쳤나이다」의 출판을 기념하고 저자의 강연회를 개최하는 자리에 고마츠 이사장의 참여가 큰 의미를 가질 것으로 생각했기 때문이다.

그 자리에 그의 참여는 그에게도 큰 정보와 도움이 될 것으로 판단한 것은 일본이 한국을 식민지화한 역사는 꺾고 있었지만 풍신수길의 지휘한 임진왜란의 역사와 임진왜란을 승리로 이끈 세계적인 영웅 이순신 장군에 대해서는 잘 알지 못하고 있는 것 같았기 때문이다.

다행스럽게 이사장은 필자의 요청을 수락하고 하루 먼저 입국했고 오랜 가뭄을 해결시키는 단비를 맞으며 행사장에 도착해 주었다.

이튿날인 6월 16일 오후 필자는 그를 해운대 동백섬으로 안내했다. APEC정상회담 장소인 '누리마루'를 소개하는 것은 아시아의 평화를 위하여 노력하는 그에게 어떤 영감을 줄 수 있지 않을까 해서였다. 그리고 경관이 빼어난 해운대의 상징이면서 대한민국 최고의 Walking 순환코스를 거닐면서 대화를 나누는 것이 한층 의미가 있을 것 같았기 때문이다. 통역은 본지 성현정 기자가 맡았다. 대답은 그가 최근 몇 년 동안 지금까지의 '평화운동'에서 '和(화)의 문화'운동으로 보다 본질적이고 광의적인 평화운동으로 변화를 꾀한데 대하여 초점을 맞추었다. 다음은 그와의 대담내용이다.

인간자연과학연구소 설립 배경과 활동

Q1. 이사장께서는 20여 년 전부터 국제적으로 평화운동을 전개해 왔습니다. 정치인도 아니고 사회운동가도 아닌 기업인으로서 평화운동에 뛰어들 특별한 동기가 있었을 것 같습니다.

A. 공업고등학교 기계과를 졸업 후 8년간 농업기계연구개발에 종사하며 떠오르는 생각들을 연역법·변증법·귀납법을 사용하여 꿈을 실현하는 방법을 몸으로 터득하였습니다. 제가 26세였을 때 그 회사가 도산하여, 1개월간의 좌선에서 죽음을 맞이하는 순간과 죽은 후의 일도 상정하여, 인생의 스토리를 생각하는 사고회로를 얻게 되었습니다. 2년간 오사카에서 소규모 비

즈니스의 실전을 배운 후 1973년 28세에 태어나고 자란 시마네현에서, 동생과 둘이서 펌프수리와 전기기기 조립사업을 시작하였습니다. 그 지역에 1개사 밖에 없었던 제어반과 분전반 사업을 하는 기존회사를 경쟁의 목표로 하여 힘을 합하여 서로 선두를 다투며 노력한 결과로 오늘의 기업을 만들었습니다. 이후 32세에 처음 해외여행으로 계엄령 하의 한국에 왔습니다. 야간합승택시에서 제가 일본인이라는 것이 원인이 되어 말썽에 휘말렸던 일이 있었습니다. 그 이후 방위청 관료였던 海原治(카이바라 오사무) 씨로부터 「명성황후암살사건과 칠탈(七奪): 일본이 한국에서 뺏은 일곱가지. 즉, 주권, 국왕, 인명, 국어, 성씨, 토지, 자원」의 얘기를 듣게 되었습니다만, 앞의 사건과 명성황후암살사건에 대해 알게 된 일 이 두 가지 일이 이후 저의 인생에 큰 영향을 끼치게 되었습니다.

사회 인프라의 변화를 순풍으로 하여, 몸 크기에 맞는 사회문제를 경영자원으로 하여 인재, 자금, 첨단기술을 투입하여 고속자동문 門番(몬반)과 종합물관리시스템 야쿠모 水神, 두 가지의 환경사업을 일으켜 시장을 창조하고, 제품을 브랜드화하여 그 수익으로 사원교육과 연구소의 활동을 이어오고 있습니다.

Q2. 이사장의 평화운동에는 재단법인 인간자연과학연구소가 중심이 되어 왔습니다. 설립취지와 사업, 그동안의 사업실적을 소개해 주십시오.

A. 1988년, 「知」로써 사회를 개혁하는 시대가 올 것을 예감하고 「지혁숙(知革塾)」을 설립하였으며, 1994년 인간으로서의 존엄이 추궁되고 있는 일본인이 미래의 전망을 개척하는 스토리를 그려내기 위해서 인간자연과학연구소를 만들었습니다.

3년 여의 준비 후, 1997년 일본인으로서 처음으로 한국의 독립기념관에 미래를 개척하기 위



▲ 2012년 6월 15일 목요화술회가 주최한 「이순신장군」 관련 책 출판기념회에 참석한 고마즈 이사장과 저자 김종대 헌법재판관(가운데)

해 사죄·헌화·기부를 하고, 그 취지서를 전달 하였습니다. 이후 한국과 중국, 미국, 러시아 유럽 등의 「전쟁과 평화박물관」에 공식 방문과 연구방문을 계속해 왔습니다. 또 제 고향 시마네현의 치수의 위인 「스토야헤에」 「清原太兵衛(키요하라타헤에)」 「大梶七兵衛(오오카지시치베에)」의 소설·아동문학·만화를 출판하고, 기념심포지엄을 개최하였습니다. 중일전쟁 때 島根(시마네) 鳥取(돗토리)의 병사가 큰 재난을 안겼고, 일본 측도 괴멸적인 타격을 입었던 중국 山東省(산둥성)에 세워진 국공합작 기념관을 공식 방문하여 헌화와 기부, 그리고 취지서를 전달하였습니다. 중·일 외교정상화 30주년 기념사업으로써 공자, 맹자, 스토야헤에, 키요하라 타헤에 등 4개의 동상을 제작하였습니다. 그 중 공자와 맹자상은 돗토리현이 만든 일본 최고의 정원 연조원「燕趣園」에 건립하였습니다. 그 이후 일본 七福神(칠복신)의 원류라고 전해지는 팔선인(八仙人)과 서왕모(西王母)의 대리석상 건립을 지원하였습니다. 더불어 손자(孫子)의 고향 중국 동영시로부터 지금까지의 활동을 높이 평가받아 손자의 동

상을 받게 되어 함께 건립하였습니다. 3인의 치수의 위인에 대하여는 한국에서 진행되는 4대강 개발사업에도 전달될 수 있는 메시지가 있다고 하는 의견에 따라 김현철 선생의 지원으로 서울 지사 설립을 기념하여 한국어판 만화로 출판하였습니다. 이후 「국민일보」에도 특집기사가 게재되어 블라디보스톡과 동해의 사카이미나토(境港) 사이를 운항하는 배 안에서 읽을 수 있게 되었습니다. 그리고 1988년 본사공장 준공을 기념하여 중국의 「전세장서傳世藏書」전 123권을 시마네대학(島根大学)에 기증하고 1999년, 연구소의 이론을 체계화한 「태양의 나라 이즈모(太陽の國IZUMO)」를 출판하고, 2002년 「일중영대역논어」, 2008년 「중일한영대역일본고전명언록」, 2011년 「조선반도와 일본열도의 사명(朝鮮半島と日本列島の使命)」의 편찬, 국제심포지엄의 개최, 그리고 활동내용의 영상기록을 만들어 대립과 통합에 의한 발전의 사이클 「和의文化」가 생성되는 “공감의 플랫폼”을 만들 준비를 해왔습니다. 이러한 것들이 평화활동가로 보여지는 원인이 됩니다.



▲ 2007년 3월 안중근 의사 순국기념식 참석 후 명성황후 생가를 방문한 고마츠 이사장(왼편 세 번째)

Q3. 아주 의미있고 인상적인 활동을 많이 펼쳐 왔군요. 그런데 최근에는 그동안 일관되게 추진한 평화운동이 '和의 운동'으로 보다 깊고 넓게 업그레이드 된 것 같은 느낌을 받았는데요. '平和'와 '和'는 언뜻 보기에 비슷한 것 같습니다만 굳이 '和의 文化'를 강조하시는 까닭은 무엇인지요?

A. 핵 억지력의 효과가 유지되고 있는 가운데, 전세계적 금융혼란이 「信」의 붕괴 연쇄현상을 불러 일으켜, 인류가 만들어온 모든 조직은 내부 붕괴냐, 아니면 진화를 향한 새 발걸음을 내딛느냐의 분기점에 서 있습니다. 저는 사업과 연구소의 활동을 통하여 국제사회 속에서 공감의 플랫폼 「平」을 만드는 프로세스에서 「信」을 만들어내고 대립·통합·발전을 반복하여 「和」가 생겨나는 환경을 마련해 왔습니다.

인류가 불을 얻게 되고, 불은 화약, 다이내마이트를 지나 핵에 이르게 되어 히로시마와 나가사키에 원자폭탄이 투하되었습니다. 그로 인해 동서냉전시대를 지나 미국과 러시아, 중국 등 3

대 핵 대국과 기타 많은 핵 보유국과 준 핵 보유국이 생겨났습니다. 또 원자력 발전소는 전세계에서 가동되고 있습니다만 스리마일섬 체르노빌에 이어 심각한 후쿠시마 원전사고까지 일어나 전세계에서 가동 중이거나 건설 중, 또는 계획 중인 원자력발전소에 큰 영향을 끼치고 있습니다. 또, 언어의 발달은 문자와 인쇄, 그리고 스마트폰, 태블릿단말기, 클라우드컴퓨팅 시대를 맞아 정보의 공유화가 전세계적 규모로 급속히 확산되고 있습니다.

인류의 생활기반인 의식주는 국경을 초월하여 분업이 진행되어 되돌릴 수 없는 상황에 이르고 있습니다.

인류의 긴 역사 속에서 3대 핵 대국의 결절점인 「일본열도와 조선반도」에 인류의 진화와 존속을 위한 공감의 스테이지를 만들어 미국의 스마트파워, 중국의 「화해 和諧」, 한국의 「화정 和諍」, 일본의 「화양」으로부터 예지를 빌려 참된 「和」를 만들어 낼 수 있는 견식과 지혜와 용기, 그리고 행동력이 시험되고 있습니다.

‘和’는 중용의 삶에서 확대되는 나선운동

Q4. 和의 문화에 대한 이사장님의 이상과 철학을 읽을 수 있을 것 같군요. 일반적으로 유교나 불교문화권에서 ‘和’는 가장 인간적이며 보편적인 가치로 생활 속에 깊이 배여있어 결코 낯선 개념이 아닙니다. 일본에서의 ‘和의 文化’를 보다 쉽게 설명해 주실 수 있겠습니까?

A. 칸트의 ‘인류는 평상의 상태가 전쟁상태이다. 그러므로 평화는 창조되지 않으면 안 된다.’라는 말은 시사하는 바가 큰 말입니다. 이것은 제 사건입니다만 ‘和’는 공감의 무대 ‘平’의 상위에서 대립·통합·발전을 반복하는 과정으로 정치상태가 아닌 중용의 삶에서 확대되는 나선운동이라고 생각하고 있습니다.

천재였던 弘法大師 空海(코오호우다이시 쿠우카이)는 1100년 전에 중국에서 ‘진언밀교’를 일본으로 가져와 교토의 東寺강당에 입체만다라를 만들었습니다. 저는 이것을 보고 ‘인류는 처한 환경에 따라 한없이 악마에도, 또는 천사에도 가까이 다가갈 수 있는, 상당한 다양성을 가진 생명체.’라고 느꼈습니다. 시간과 공간의 간격을 긍정적으로 활용하여 대화를 나눌 수 있는 환경이 갖추어지면 모든 것은 윤리적으로 해결되고 희망이 샘솟는 미래를 그릴 수 있다고, 글로벌화한 세계에 있어 3대 핵대국에 둘러싸인 조선반도와 일본열도가 긴인류의 역사 속에서 세계로 뻗어가는 ‘和의 文化’를 생성시킬 수 있는 모든 조건이 갖추어진 지역이라는 확신에 이르게 되었습니다.

Q5. 이사장께서 밝히신 ‘和의 文化’를 창출하는 인간자연과학연구소의 프로젝트 구상에서 인류가 당면한 현상을 대립양상으로 진단하면서 인류사회의 새로운 진화를 위해서는 ‘和의 文化’가 필요함을 강조했습니다. 아주 적절한 진단으로 생각되며 처방 또한 옳은 것 같습니다. 그렇

다면 인류사회의 새로운 진화를 위한 ‘和의 文化’의 구체적 실현방안은 무엇인지요?

A. 뭉치면 살고 흩어지면 죽는다. 이것은 만고의 정의다. (合成散敗萬古定理)

번영의 끝에서는 쇠퇴의 싹이 돋지만, 쇠퇴의 끝에서는 번영의 싹이 돋지 않는다. (繁榮の極みに衰退の芽は生じ, 衰退の極みに繁榮の芽は生ず)

일본에서 오랜 생활 속에서 원한과 원망을 품고 사는 사람, 혹은 체념과 무관심한 체 살아온 사람, 거꾸로 그 입장을 긍정적으로 활용하여 경제적 사회적으로 큰 성공을 이룬 사람, 지금부터 그것을 기회로 하려는 사람, 일본에는 40만 명에 이르는 특별영주권을 가진 재일한국인과 재일조선인이 있습니다. 대한민국, 북한의 국민과 일본국민이 함께 중국, 러시아 그리고 미국의 이해를 구해 세계적인 ‘和의 文化’를 창출해야 할 역할이 돌아왔다고 확신합니다. 그 구체화의 출발점은 오키나와, 센카쿠제도(尖閣諸島), 대만의 해협, 독도를 중심으로 한 일본해, 북방영토에 있습니다. 그 시기는 지금입니다. 사용 후의 핵연료의 재처리계획이 앞을 내다볼 수 없는 등 여러 가지 문제가 겹쳐있지만 이것이 실패하면 국가민족의 붕괴만이 아니라 인류붕괴의 도화선이 될 수도 있으며 역사상 유례없는 큰 죄를 범하는 것이 될 수 있습니다.

일본은 아시아 여러나라로 부터 역사문제로 얽힌 지적을 받고 있다

Q6. 그리고 일본 주변의 ‘和의 文化권’으로 오키나와, 센카쿠 열도, 대만의 해역과 독도를 중심으로 한 일본해 등을 언급했는데 이는 너무 일본 위주의 ‘和의 文化’를 위한다는 오해를 불러일으킬 수 있는 여지가 있다는 점과 또 한편으로 ‘和의 文化’의 필요성이 일본에 의해 야기되고 있음을 시인하는 것으로도 이해될 수 있을 것 같습니다. 어떻게 생각하십니까?



▲ 2007년 7월 남경대학살 기념관 포럼에 참가한 고마츠 이사장

A 「和의 문화권」은 결코 일본본위에 의하여 생각하는 것이 아닙니다.

일본이 처음으로 内政化(식민지화) 한 곳은 메이지 유신의 류큐처분으로 인해 생긴 오키나와 현입니다.

또 오키나와는 전쟁 이후 미국의 시정화(施政化)에 들어가 한국전쟁, 베트남전쟁의 전초기지가 되고 일본환원 후에도 미국의 중추기지로써 중동을 포함한 많은 전쟁과 평화에 관계해 왔습니다.

일본열도가 가지고 있는 여러 문제, 센카쿠열도, 대만의 해협, 북방영토문제, 독도/다케시마를 중심으로 한 · 일본해를 둘러싼 한일간 그리고 일본과 북한의 문제, 한국과 북한간의 긴장에 의한 조선반도의 문제, 이 모두가 해당국가간뿐만 아니라, 세계를 내다보는 인류사적인 시점에서 생각하고 인류의 미래를 개척하는 찬스를 우리에게 부여하고 있습니다.

지금 전 세계는 금융경제의 막다른 상황, 핵확산, 방사능, 분쟁, 자살, 「내성균(耐性菌)」의 발생과 면역력의 저하로 인해 다발하는 암과 만연하는 바이러스 등으로 곤란한 상황에 놓여져 있습니다. 그러한 시대배경 속에서 일본은 한국, 중

국과 기타 아시아의 여러 나라들로부터 과거의 역사문제에 대해 엄한 지적을 받고 있습니다.

일본인으로서 20여 년에 걸쳐 가해 측의 전후 책임을 수행하기 위하여 저를 단장으로 방문단을 결성하여 과거 내정간섭을 했던 나라와, 교전을 했던 나라에 사죄하고, 인과관계와 그 배경을 여행을 계속하면서 「和의文化」의 흐름을 만들어 낼 무대를 만들어왔습니다.

Q7. 먼저 오키나와의 경우 그들에게 희생을 강요하고 고통을 안긴 역사는 오로지 일본에 의해 저질러진 만행의 결과이며 독도의 경우도 일본의 무리한 영토확장의 야욕에 따른 결과로 역사는 말하고 있습니다. 일본이 힘으로 한반도를 침략하지 않았다면 독도 문제는 일본이 주장할 아무런 이유가 없는 것으로 알고 있습니다. 이 기회에 이사장님의 독도에 대한 분명한 입장을 듣고 싶습니다.

A. 인류는 지금부터 세계적인 「信」의 붕괴로 인해 곤란한 시대에 직면하게 될 것입니다. 독도 문제, 동해/일본해 호칭의 문제에 대해서는 일본 대한민국, 북한 3개국의 견식을 평가받는 문제로서 인류사의 평가에 세계의 분쟁지대에 희망

과 용기를 불어넣는 사례가 될 수 있게 되기를 기대합니다.

그리고 이것은 전 세계와 함께 살아가야 할 것을 숙명으로 하는 일본과 대한민국, 북한이 반드시 해내지 않으면 안될 것이며 국민국가인 일본과 한국에서 국민이라고 하는 입장에서 논의의 장을 만들지 않으면 안 된다고 확신합니다.

일본과 한국에서도 자주 사용되는 『고유의 영토』라고 하는 표현에 대해서는 약간 다른 견해를 가지고 있습니다. 국민국가의 시대에 이르러 경위와 현상으로부터 미래를 내다보고 관계국의 승인에 의해서 영토를 확정시키는 것입니다. 고유의 영토는 세계 어디에도 없지 않을까 하고 생각합니다. 저의 고향이며 또한 회사의 본사가 있는 시마네현에서 「다케시마의 날」을 제정할 때 저는 숙려한 끝에 찬성하였습니다.

왜냐하면 역사, 독도/다케시마문제, 동해/일본해 바다의 호칭문제로 대립을 테이블에 올려놓고 첨단기술과 시간과 공간의 간격을 활용하여 대립의 에너지를 통합의 에너지와 함께 대립 통합 발전을 반복하는 「和의 문화」를 창출할 수 있는 시기가 왔다고 확신했기 때문입니다.

Q8. 독도 문제는 역사의 관점에서 보아야 답이 나온다고 생각합니다. 기회가 되면 독도문제만 가지고 깊은 대화를 나누어야 할 것 같습니다. 화제를 바꾸어 슬픈 역사의 섬 오키나와에 '국제평화센터'의 창설을 비롯하여 근대 전쟁의 모든 희생자를 기록하는 '메모리얼 타워'의 건립, 세계의 전쟁과 평화에 관련된 사진과 영상을 볼 수 있는 '세계평화·전쟁기념관'의 건설, 평화회의, 평화 공헌자를 발굴하여 널리 알리고, '和의 문화창조 올림픽' 등을 개최하는 '和의 전당' 건설 등을 이사장께서는 제안했습니다. 아주 기발한 아이디어입니다. 실현될 수만 있다면 인류의 평화증진에 대단한 영향을 미칠 것으로 생

각됩니다. 문제는 어떻게 실현시키느냐가 중요한데 이사장께서는 구체적인 복안을 가지고 계십니까?

A. 오키나와는 비극의 섬인 동시에 기지로서의 섬으로서 전세계에 비극을 초래한 두 가지 측면을 가진 섬입니다.

이 섬에 일본, 미국은 물론이고 전세계 사람들의 미래를 개척할 「知」의 시설을 만드는 것은 이론의 여지가 없다고 생각합니다.

우선 일본인과 재일한국인, 조선인들이 서로 얘기를 나누기 시작해야 하지 않을까요?

인류이익이라고 하는 목적을 기본으로 하는 사명을 가진 사람들로 이루어진 집단이 생긴다면, 「사람과 사물, 자본이」 모이는 발전의 사이클이 이루어집니다.

「제로로부터의 창조」를 지향하는 이 프로세스는 21세기의 가정, 회사, 국가, 인류사회 등 모두 본질은 같은 것으로서 지속 가능한 새로운 커뮤니티를 구상하는 열쇠가 될 것입니다.

오키나와 음악을 연구하는 사람들 속에서 박사학위를 취득하는 사람이 계속하여 늘어나고 있다고 들었습니다.

「무기대신 샤미센을 손에 든 류큐(琉球)라는 왕국이 있다」라는 이야기를 나폴레옹이 듣고 「다음에 태어날 때는 그런 나라에서 태어나고 싶다」라고 했다는 일화가 있다고 합니다. 「만나면 형제」라고 하는 말은 오키나와에서 지금도 사용되고 있습니다.

인연이 있어서 네덜란드 헤이그에서의 강연을 계기로 「평화를 위한 박물관 국제 네트워크」이 사회의 통괄디렉터 피터반 덴두겐박사로부터 노벨의 비서였으면서 여성노벨평화수상자 제1호인 베르타 즈토나여사의 기념관건설에 대한 이야기를 들었습니다. 저는 이 기념관을 오키나와에 세울 것을 제안하였습니다. 지금은 초안은 다듬는 단계입니다. 그것에 앞서 즈토나의 흉상을 제작

하고 즈토나전을 오키나와에서 개최하고자 관계자와 협의 중입니다.

이 프로젝트는 핵 대국인 미국, 러시아, 중국 뿐이 아니라, 전세계의 어린이, 여성, 紳士(識者)에게 지속되리라고 확신합니다. 이러한 흐름이 이루어진다면, 한반도 뿐만 아니라 세계 또한 새로운 시대를 향해갈 수 있지 않을까요.

잘못된 과거에서 和의 文化 창출 필요

Q9. 이사장께서는 '和의 文化' 창출에 있어 인류전체 보다는 우선 한반도·일본·중국에 무게를 두고 있는 것 같습니다. 너무나 당연한 일입니다. 현재 이 3나라 간에는 영토, 과거사 문제가 날줄 씨줄로 엮여져 있어 솔로몬왕의 지혜로도 풀기 어렵게 난마처럼 형편어져 있습니다. 한·일간의 독도, 위안부, 강제징용, 문화재 환수 문제가 있고, 일·중간에는 영토문제와 일·청전쟁 이후의 보상문제 등이 걸려 있습니다. 문제는 3나라의 和를 위해서는 무엇보다도 선행되어야 할 일본의 사죄와 그에 따른 법적, 인간적 보상입니다. 일본은 전쟁이 끝난지 67년이 지난 오늘날까지 자신들이 저지른 잔혹한 범죄와 악행을 인정하지 않으려하고 있으며 그에 대한 진심어린 사과도 회피하고 있습니다. 이사장께서도 잘 아시듯이 개인간의 관계에서도 극심한 갈등과 다툼이 있어도 서로 잘잘못을 가리고 잘못된 사람이 사과를 하고 용서를 구하면 화해가 이루어집니다. 바로 이 화해(和解)야말로 이사장님이 이루어 내고자 하는 '和'의 본질이 아니겠습니까? 그러므로 지금이라도 일본과 일본국민이 한국과 중국이 납득할 수 있는 과거의 잘못에 대한 사과와 그에 대한 보상을 한다면 '和'는 일본의 모든 곳에서 분출하는 온천처럼 흘러 넘칠 것입니다. 뿐만 아니라 일본이 잘못된 과거의 역사를 온천에서 말끔히 씻어낼 수 있다면 동북아시아는 물론 세계의 '和의 文化' 창출에 획

기적인 계기를 마련할 수 있을 것입니다. '和의 文化' 창출에 혼을 쏟고 계시는 이사장께서는 먼저 일본 국내에서 뜻을 같이하는 사람들로 하여금 잘못된 지난 역사에 대한 일본과 그 국민의 반성과 사과가 이루어지도록 하는데 모든 노력을 집중하는 것이 '和'를 이루는 출발점이 될 것이라 사료됩니다. 이에 대한 이사장님의 견해를 듣고 싶습니다.

A. 100% 동감입니다. 저는 많은 재난을 남겨준 세대의 자손으로서 일본인으로 각국을 방문하며 전후 책임을 수행하는 출발점으로써 사죄를 해왔습니다. 6자회담국의 회원국인 대한민국, 북한, 일본 이 3개국에 관계된 모든 역사문제를 모두 테이블위에 올려놓고 보면 문제는 너무나 많이 산적해있고 분노와 한숨이 나올 것입니다.

그 산적한 문제들은 저는 「禍」라고 정의합니다. 「전화위복」이라는 말이 있습니다.

이것을 「전전, 전시, 전후 책임」이 세 가지의 책임으로 나누어 기술혁신의 성과를 더하면 「福」 즉 「和」가 생성된다고 믿습니다. 지금 큰 문제가 되고 있는 독도/다케시마, 동해/일본해 호칭문제, 위안부문제는 이 프로젝트를 시작하는 출발점입니다.

2011년 2월 22일 「다케시마의 날」에 발간한 「조선반도와 일본열도의 사명」에서도 기술하였습니다만 2008년 5월 한국방문 시 일본대사관 앞에서 80세를 넘은 위안부 할머니들의 일본에 대한 항의활동과 조우하고, 그 분위기와 그 집회가 이어져온 회수에 강렬한 충격을 받았습니다.

그 항의행동은 1,000회를 넘고, 위안부소녀상도 건립되어 미국에도 이미 2개의 비가 건립되었으며 이후에도 다수의 비가 세워질 것이라고 들었습니다. 이것은 한일양국과 민족의 붕괴로 이어지는 본질적인 문제로서, 일본은 말할 것도 없고 한국인의 견식과 지혜와 용기에 의문을 가지게 됩니다. 그녀들은 전쟁 중 엄청난 수난에



▲ 2010년 7월 고마즈전기 서울지사 개설 기념식에서 대한적십자사 서영훈 총재로부터 명예장을 수상하는 고마즈 이사장

의하여 「존엄의 생명」을 잃었습니다.

우리들에게 일본인, 한국인 또한 인간으로서의 자각이 있었다면 그녀들의 전후 오랫동안의 존엄의 생명을 되찾기 위한 활동을 방치하지는 않았을 것입니다.

전쟁의 책임이란 전쟁을 미연에 막지 못한 전전책임, 전시책임, 그리고 전후 책임 이 세 가지로 분류됩니다. 전쟁 중 어린아이였던 세대 이후는 전전책임과 전시책임은 없습니다. 있다면 전후 책임이 있겠지요. 전전에 만들어진 철도 등 사회의 인프라는 이용하면서 타국과의 관계에서 생긴 원한과 원망은 뒷세대에 미루어 버리는 행위는 용서받을 수 없습니다. 전후 책임이란 전쟁에 이르게 된 배경, 전투행위, 그리고 현대사회의 문제를 조사 연구하여 그 성과를 재차 전쟁을 일으키지 않을 것과 항구평화를 이루는 자원으로써 활용해야 합니다. 일본인은 물론 풍요로워진 한국국민을 포함하여 지금을 살아가는 우

리들의 자손과 인류의 역사에 대한 사명입니다. 사죄와 배상은 그 일부분에 지나지 않습니다.

발효식품은 방사능에 대한 면역력 증진

Q10. '和의 文化'와 관련하여 핵과 방사능에 대해 우려를 표명하면서 후쿠시마 원전사고 때 방사능 재해와 그에 따른 면역력 증진의 필요성을 언급하는 가운데 발효식품의 섭취를 강조하고 있습니다. 이를 통해 인간자연과학연구소가 첨단과학과 정보통신기술을 결합하여 방사능에 대한 면역력을 비약적으로 향상시키기 위한 발효문화의 선진화를 이끌겠다고 하는데 발효식품이 방사능에 대한 면역력을 증진시키는 근거는 무엇이며 발효문화의 선진화는 무엇을 의미하는 것입니까?

A. 저의 오랜 지인인 미국 보스톤에 살고있는 마크로비오틱의 세계적인 지도자인 구보(久司道夫)의 네트워크 「원·피스풀·월드」의 일본대



▲ 2003년 10월 일본 돗토리 현의 중국공원인 연조원에서 공자·맹자 동상 제막식에 참석한 고마즈 이사장(오른쪽 두 번째)

표 大場淳一氏에게 나가사키 원폭 의사의 기록이라는 부제가 붙은 『死の同心円』이라는 책을 소개받았습니다. 그것에 따르면 나가사키 원폭 당시 피폭중심지로부터 1.8km 떨어진 곳에 있는 병원이 피폭당하였습지만, 입원환자도 직원들도 피폭증상 등 방사능의 직접적인 피해로 인해 사망한 사람은 한 사람도 없었다는 이야기를 들은 적이 있습니다.

이 의사는 직원들에게 「짚 된장국을 만들어서 매일 먹게 하도록 하라」고 지시했었습니다. 이 의사가 쓴 책이 영문으로 번역되어 구미(歐美)에서 판매되고 있고 체르노빌 원전사고 이후 유럽에서는 된장이 날개 달린 듯이 팔렸다고 합니다. 된장은 말할 것도 없이 발효식품입니다. 균, 결국 미생물은 각양각색으로 다양하며 인류는 아직 그 전모를 해명하지 못하고 있습니다. 환경변화와 균의 조합에 대한 새로운 상관관계의 발견이 기대됩니다. 조선반도와 일본열도는 김치, 된장, 간장 등 발효식 문화의 전통이 이어져오고 있으며 발효에 적합한 독자적 기후풍토도 있습니다. 첨단기술의 성과와 전통의 노우하우를 활용하여, 또한 3개국에 대립하는 에너지를 활용하여 연구개발과 사업화를 추진하면 이 지역을

인류번영의 기초가 되는 면역력의 비약적 향상을 향한 발효식 문화의 선전기지로 할 수 있다고 생각합니다. 2010년의 벅쿠버올림픽에서의 김연아와 아사다 마오의 활약은 우리들에게 용기와 희망을 주었습니다. 시마네현에서 2012년 7월에 열리는 매일 신문사 주최의 전국농업콩쿠르 전국대회에서 그 구상을 발표할 것입니다.

Q11. 또한 인간자연과학연구소는 세계적인 식량위기를 대비하여 '일본해=동해해양목장'을 제안했으며 이 해양목장의 중심에 있는 독도를 '和의 문화권' 발상지로 하기 위해 '일본을 포함한 조선전쟁 관련국의 민족색 풍부한 여성과 아이들의 군상(群像)을 건립한다.'라고 밝히고 있습니다. 그렇다면 이사장께서는 독도를 일본해에 속한 것으로 단정하고 있는데 무언가 오해하고 있는 것이 아닌지요. 만일 독도를 일본해에 속한 것으로 알고 계신다면 앞으로 한·일관계 뿐만 아니라 이사장님 개인에 대한 한국민의 인식에 엄청난 파장이 있을 것 같은데 이에 대한 이사장님의 입장을 밝혀 주십시오.

A. 「다케시마/독도에 일본을 포함하여 조선전쟁에 참전한 모든 관계국의 민족의상을 입은 여

성과 아이동상을 건립하여 인류사회의 미래를 여는 섬으로~」라고 1999년에 제안하였습니다. 또 2002년에 일본해/동해 호칭을 「中海」로 제안하였습니다만 계속 무시되어왔습니다.

독도/다케시마 문제와 수상의 야스쿠니 신사 참배를 계기로 중국에서는 상해에서 항일운동이 일어나 세계적으로 어려운 시대를 맞이하고 있을 때 다케시마, 센카쿠제도, 북방영토까지 세 가지 영토문제의 분류가 시작되었습니다. 일본도 한국도 서측사회의 일본으로서 은혜를 입어 오늘의 번영을 이루었습니다. 북한에서는 한국에서 보면 동포, 일본에서 보면 전쟁책임과 전후 책임에 관련된 분들이 큰 어려움을 겪고 있다고 들었습니다.

이 문제는 당사자간은 물론 인류사회를 위해 활용하는 것이 지금을 살아가는 관계국민의 세계에 대한 전후 책임이라고 생각합니다. 다케시마와 독도문제, 동해와 일본해 호칭문제는 공개된 장소에 대화를 하지 못한 것이 최대의 문제입니다. 이것은 다른 문제에 있어서도 마찬가지입니다. 결론은 스스로 나올 것입니다.

헤이그의 이준 평화기념관 방문

Q12. 이사장께서는 지난 5월 3일 네덜란드의 헤이그를 방문, 그곳에 있는 한국의 독립지도자 이준 열사 기념관에 들러 현화하고 안중근 의사의 「독립의 서」 복사본을 기증했습니다. 일본인의 이준 열사 기념관의 공식방문은 처음인 것으로 알고 있으며 아주 어려운 여행을 하셨는데 특별히 이준 열사 기념관을 찾은 뜻이 있을 것으로 압니다.

A. 2012년 5월에 국제사법재판소가 있는 헤이그에서 개최된 「평화를 위한 박물관 국제네트워크」이사회에서 강연하였습니다. 그 곳에 있는 이준평화기념관에서 이기항 원장을 방문하고 「獨立」이라는 서예의 필사본을 전달하였습니다. 거

기께까지 이른 경위는 2008년 10월에 교토에서 열린 제6회 국제평화박물관회의에 안중근의사기념관 김호일관장, 이해균 총무부장, 송석원 경희대학교 일본연구소장을 당 연구소가 초대하여 그 당시 안중근의사의 유묵인 「獨立」을 포함하여 몇 점이 일본에 있는 것을 확인하고 한국에서 그 유묵이 전시될 수 있도록 도움을 준 것이 그 시작입니다.

안중근 의사는 여순에서 한국, 일본 등 각각의 독립에 의해서 동양에 평화가 이루어질 수 있다고 주장하셨다고 들었습니다. 글로벌화가 진행된 현대에 있어서는 3대 핵 대국인 중국, 러시아, 미국의 이해를 구해 북한, 대한민국, 일본 3개국이 세계의 기대를 짊어지고 항구평화의 흐름을 만들어내는 특별한 역할을 해야 할 때가 왔다고 생각합니다.

Q13. 사실 한반도는 세계 유일의 분단국가이며 「不和」의 중심지역입니다. 한반도의 분단과 분쟁에는 일본의 책임이 큼니다. 그러나 일본은 책임을 통감하기는커녕 한반도의 분단상황을 즐기고 있는 것으로 보는 견해가 많습니다.

이사장께서는 일본 지도자의 한 사람으로 한반도 통일을 위해 어떤 역할을 하실 수 있겠습니까? 그리고 일본은 어떻게 해야 하는지요. 이 질문은 이사장께서 추진하시는 「和의文化」창출에 가장 핵심되는 사안이기 때문입니다.

A. 조선반도의 분단, 또 조선전쟁이 발발하기까지의 경위에는 일본에 큰 책임이 있습니다.

일본, 대한민국, 북한 등 3개국이 중국, 러시아, 미국의 협력을 얻어 각각의 특징을 활용하여 전세계에 평화를 만들어내는 것. 이것은 조선반도의 통일이 되기 전이어야만 가능합니다. 고난의 역사를 건다가 돌아가신 많은 분들의 자손에 대한 현재를 살아가는 관계국민의 의무와 책임입니다.



▲ 독도에 건립을 제안하는 지구공생 인연맺기의 동상 조감도

Q14. 이사장께서는 지난 20여 년간 일본의 양심으로서 일본의 국익이나 정서에 반하는 거침없는 언행으로 일본 국내에서 비난과 불편을 겪고 있는 것으로 알고 있습니다. 이러한 상황과 관련하여 많은 에피소드가 있을 것 같습니다.

A. 글로벌 시대에 있어서 국익이란 인류의 이익과 국민이 노력하면 「人間」이라고 하는 인식을 확립할 수 있다는 것과 모순이 없어야 한다는 것이 필요 불가결한 것이 아닐런지요? 저의 활동이 가끔 인터넷상에서 화제가 되기도 합니다만 위해를 당하거나 한 적은 없습니다.

2008년에는 연구소에 인턴 십 직원으로 한국에서 온 여학생을 채용하여 「다케시마의 날」전에 심포지엄을 개최하였습니다. 2009년의 「다케시마의 날」에는 6자 회담참가국의 국기를 걸고 심포지엄을 개최했습니다. 우익의 거리 선전용차에 에워싸인 중 경찰이 보호해주는 가운데 700명이 참석하였습니다. 그때 상영한 안중근의사의 영상은 큰 감동을 불렀습니다. 참가자는 시마네현이 마련한 공식행사보다 많았다고 들었습니다. 전국 일간지의 제1면에도 보도되어 많은 관심을 끌었습니다.

2010년에는 「日本海=東海를 둘러싼 朝鮮・

韓国・日本에서 세계평화를」이라고 하는 심포지엄을 여성을 중심으로 개최하여 연구소가 이 행사를 후원하였습니다. 재일조선인들로 구성된 조선가무단의 노래와 무용 공연 이후 모임에 참가한 전원이 손에 손을 잡고 춤을 추기도 했습니다. 회장 안에는 몇 명의 우익으로 보이는 사람도 있었습니다만 손을 맞잡고 함께 춤의 대열에 들어왔습니다. 여성에 의한 기획으로 인한 신선함이 참가자들에게 강렬한 인상을 남게 했습니다. 이 경험은 프로젝트의 진전에 밝은 전망을 느끼게 해주었습니다

일본의 6천여 곳에 종합물관리 시스템 사업

Q15. 끝으로 지금 경영하고 계시는 사업을 소개해 주십시오.

A. 일본의 293개 지방자치단체, 6,000개소의 시설도입 실적을 가진 클라우드에 의한 종합물관리 시스템 야쿠모수신「やくも水神」으로 세계 평화의 플랫폼 구축의 일익을 짊어질 만들어 내도록 현재 중국, 한국을 방문하고 있습니다.

중국에서는 6월 21일 영업기획본부장이 중국의 수리부(한국의 수자원공사와 같은 조직)를 방문하여, 실무책임자를 비롯하여 JICA의 관계자들과의 모임에서 야쿠모 水神「やくも水神」시스템의 금후 중국진출의 가능성에 대하여 대화하였습니다. 이 사업은 중국에서 엄청난 발전이 이루어질 수 있는 분야로서 가까운 시일 내에 프레젠테이션을 계획하고 앞으로도 협력해나가기로 합의하였습니다. 올해는 일중국교정상화 40주년의 해입니다. 중국산동성, 국공합작의 땅에서 야쿠모 水神「やくも水神」의 브랜드명의 유래인 치수의 위인스토아체에의 동상을 제작하고자 계획하고 있습니다. 한국에서는 6월 25일 가와노, 현지법인 코마츠코리아의 간부사원들이 한국수자원공사를 방문, 주임연구원을 비롯한 10여 명의 관계자들과 미팅을 하였습니다. 한국은



▲ 2012년 5월 3일 헤이그 이준 열사 기념관장에게 안중근 의사 독립필사본을 전달하는 고마츠 이사장

소규모수도시설의 감시시스템이 아직 미비하여 야쿠모 水神「やくも水神」시스템의 도입을 검토하고자 하고 있습니다.

이후 인적 교류를 포함하여 많은 면에서 관계를 유지해나갈 것을 합의하였습니다. 일본에서 시장창조에 성공한 門番(스피드 자동문)사업은 2010년 현지법인 코마츠코리아를 설립, 4회에 걸쳐 서울과 부산의 전시회에 출전하여 자동차 기계 전자 출판 물류 의약 식품업계의 많은 분들의 관심을 모았습니다. 그 결과 서울뿐 아니라 부산과 경상도 지역으로부터도 당사의 경영이념에 찬동한 대리점도 나타나고 있습니다. 본격적인 클라우드 컴퓨팅, 스마트폰 시대를 맞아 시민시대와 부산의 여러분과 함께 「門番」과「水神」의 사업뿐이 아니라, 발효식품과 무역 등 새로운 비즈니스 모델의 구축에 임하고자 합니다.

고마츠 이사장은 일본의 진정한 애국자

필자는 고마츠 이사장과 인터뷰를 끝내면서 이 사람이야말로 가장 일본적인 사람이며 누구보다도 일본을 사랑하는 애국자라고 생각했다.

개인적으로도 자기자신에 대한 확고한 신념이나 자신감 없이는 남을 배려하고 사랑하는 건 쉽

지 않은 일이다. 하물며 자기의 고향, 자신의 나라에 대한 사랑과 충성없이 이웃 나라에 따뜻한 관심을 가지고 행동에 옮길 수는 없기 때문이다. 그러므로 1980년대 초부터 시작된 그의 한국에 대한 관심과 행동은 한·일 두나라 간의 특수한 역사관계를 이해하고 그러한 역사인식을 바탕으로 전개되어 왔다고 볼 수 있다.

오랫동안 그와의 교류에서 느낀 것은 남다른 역사 의식과 문화 의식이었다. 그의 투철한 역사관은 인간자연과학연구소를 소개하는 표지에 선명하게 표출되고 있다. '역사에 어두운 사람은 현재에 있어서도 어둡다'고 갈파한 독일의 <바 이츠제커>의 경구와 독일을 독일답게 만든 철인 재상 <비스 마르크>의 다음 말을 올려 놓고 있다. '어리석은 사람은 경험을 통해 배우고 현명한 사람은 역사를 통해 배운다'고...

고마츠 이사장이 이 명언을 첫 머리에 올려놓은 것은 아마도 자신들에게 불리한 역사를 철저히 왜곡하고 외면하고 싶어하는 가장 세계인답지 못한 일본인들에게 들려주고 싶은 말이 아닐지 생각해 보았다.

인터뷰에 기꺼이 응해준 고마츠 이사장께 깊은 감사를 드린다.(편집주간) ●



동화일크레아터 구야의 새 이야기

뱀새라 불리는 붉은머리오목눈이



‘붉은머리오목눈이’라는 다소 긴 이름을 가지고 있지만 유명한 속담에 등장하는 바람에 ‘뱀새’라는 이름으로 유명세를 타고 있다.

거기다 생김새와 맞는지는 모르겠지만 작고 가늘게 찌진 눈을 지칭하는 ‘뱀새눈’이라는 말도 있다. 이렇게만 보면 비호감 이미지가 강하다.

그러나 실제로 보면 인형인가 싶을 정도로 귀여운 모습을 하고 있다.

참새목 새들 중에서도 작은 종류에 속해서 한 손에 쏙 들만큼 앙증맞다. 거기다 ‘뱀새눈’이란 단어가 어울리지 않게 둥그랗고 새까만 조그마한 눈이 부리 양 옆으로 꼭 박혀있다.

어떤 사물이든 보는 방향과 각도에 따라서 조금씩 다른 모습을 보이는데 뱀새눈도 마찬가지로 정면서 봤을 때는 눈이 찌져 보인다. 흔한 데다 별 특징 없는 새라 그런지, 찌진 눈이 강조되

インタビュー

‘和の文化’を創出する日本の人間自然科学研究所 小松昭夫理事長

まえがき（徐世旭編集主幹）

島根県の奇人企業人

小松理事長は日本国島根県松江市にある小松電機産業株式会社の代表取締役（人間自然科学研究所理事長）。

小松家先祖代々がくらして来た島根県は、文字通り“島の根”、すなわち、日本の根となる場所といわれる。特にこの地名を韓国の人びとが聞き慣れている理由は、日本では竹島といわれる独島が「島根県に属している」と人々に広く知られているからである。（日本人が竹が一本も無い岩の島を、なぜ竹島と呼んでいるのか知らないが）。

島根県の県庁所在地松江。小松理事長の名前に「松」が入っているのは、松江に根を張って生きるという運命的関係をあらわしているようにも見える。

日本人は木の中でも伝統的に、「松」と「竹」を国を代表する木のように思い、好む。人の名前と地名に「松」と「竹」は、薬屋にとっての甘草（漢方薬に甘草が不可欠であるように、欠くことのできないもの）のようによく使われている。

筆者は6年前に、松江を2回訪問した。2回とも小松理事長に会うためであった。

松江という都市名に相応しく、その都市はまるで水に浮かんでいるように見えた。規模は人口20万程度の中小都市だが、一枚の絵のような、風光明媚な雰囲気が漂っていた。特に海と河が出逢う汽水であることが、美しい景色を醸し出しているかもしれない。

筆者はこれまで日本の大小あわせて30カ所の都市を訪れているが、松江ほど感銘を受けた街はなかった。どこからでも水と松の木を望む松江が、さらに美しく見えたのは、小松昭夫という奇人がいたからかもしれない。

小柄なこの奇人に付いては、6年前「市民時代」に紹介したことがある。記憶力が良い読者は頭に刻まれていることと思う。

筆者と小松理事長の縁は、3年前お亡くなりになった李廷錫先生の紹介からであった。

先生は木曜学会の会員で、筆者に良いアドバイスをくださった恩人である。先生の日本に対する総体的な理解は、時々日本の知識人を圧倒するほど卓越したものであった。先生が小松理事長を紹介した理由は、彼の韓国に対する格別な関心と行動からだった。

彼は何よりも、過去に日本人が韓国人を苦しめたことを謝罪し、少しでもそれに対して補償したく、独立記念館・白汎記念館・安重根義士記念館などを訪問し、躊躇することなく献花・寄付を続けた。

最近(5月初旬)にはヨーロッパの、オランダ・ハーグに飛び込んで、独立指導者・李儔烈士記念館を訪ねて頭を下げた。そして過去の日本の暴力が韓国だけではなく、アジア全体を蹂躪し、数多くの人民に不幸をもたらした過去を、ただ「反省と補償」をする限定的なものだけでは、この地域に恒久的な平和はつくれないという点に気がつき、国際的な平和運動に取り組むようになったのだ。

小松理事長のこのような行動を見つめた故・李廷錫先生は、筆者を含め多くの人に彼を知らせた。小松理事長を取材して以降、6年余りの間、彼とはほぼ1年に一回くらいの割合で会っている。3年前の木曜学会創立30周年の際には、喜んで釜山を訪れお祝いをしていただいた。

筆者が今月号に彼との対談記事を掲載するようになったのは、先月6月14～17まで釜山BEXCOで開催された国際食品産業展に彼の会社が出展することからだった。小松理事長が6月16日に釜山を訪問した後、麗水EXPOを観覧するというスケジュールが分かったのが契機となった。

私は彼の釜山訪問日程中、済州島に行く予定があったが、それを取り消し、彼の釜山の日程と合わせることにした。彼の日程を、1日前の6月15日に釜山を訪問するようにできないかと意向を伺った。理由はその日の18時、「市民時代」を発行する木曜学会が釜山商工会議所で開く、国内最高の李瞬臣將軍研究家である金ジョンド最高裁判事の壬申倭乱（文禄慶長の役）から420

年を迎えた「李瞬臣『臣はすでに準備を整えました』」出版記念講演会の場に、小松理事長の参席が大きな意味を持つと思ったからである。

それは彼にとってもよい情報になり、手助けになるとなると判断した。それは日本が、韓国を植民地化した歴史事実はよく理解しているとしても、豊臣秀吉が指揮した壬申倭乱や、その戦争を勝利に導いた世界的な英雄、李瞬臣に付いてはそれほど理解していないだろうと思ったからだ。

幸い理事長は筆者の要請を受けて1日早く入国し、雨不足を癒す恵みの雨の中、会場に到着された。

あくる日、6月16日午後、筆者は彼を海雲台（ヘウンデ）の椿島（ドンベクソム）の「ヌリマル」へ案内した。APEC首脳会談があった場所である。その場所を紹介するとアジアの平和のために努力する彼に、ある種のインスピレーションを与えることが出来るかも知れないと思ったからであった。

そして、美しい海雲台が象徴する韓国最高のウォーキングコースを歩きながら対話するのが、より意味があると思った。

通訳は、本誌の成賢貞さんが務めた。彼はこの数年間、これまでの「平和運動」から、「和の文化」運動へ、より本質的で広い意味の平和運動に、変化を図っていることに、会話の焦点を合わせた。次は彼との対談内容である。

Q1 理事長は、20年あまり前から国際的な平和運動を展開して来ました。政治家でもなく、社会運動家でもない企業人として、平和運動に関わった特別な動機がありましたか？

工業高校の機械科を卒業後8年間、農業機械の研究開発に従事、閃きから想いを描き、演繹法・弁証法・帰納法を用い、現実化させる手法を身につけました。26歳のとき、その会社が倒産、1ヶ月間の座禅で、未来ではっきりしているのは死のみと気づき、どのように死を迎えるかとい

うことを確定、死後のことも想定して、人生のストーリーを思索する思考回路が生まれました。2年間、大阪で小規模ビジネスの実践を学んだ後、1973年、28歳のときに、韓国でもよく知られている「竹島の日」をつくった島根県で、弟と2人でポンプ修理・電気組み立て業を始めました。地域に1社しかなかった制御盤・配分電盤業の会社を目標に、力を合わせ“追いつき追い越せ”で、家族と社員が生きていくための30人の家業をつくりました。

32歳の時、初めての海外旅行で、戒厳令下の韓国に行きました。夜間の相乗りタクシーで私が日本人ということが原因でトラブルに巻き込まれたことと、その後、軍事評論家・海原治氏の講演で、「明成皇后暗殺事件と七奪」という話を聞いたことの2つが重なり、その後の私の人生に大きな影響を与えました。

社会インフラの変化を追い風にして、身の丈に合った社会問題を経営資源と捉え、人材、資金、先端技術を投入、シートシャッター門番と、総合水管理システムやくも水神の2つの環境事業を興し、市場を創造、ブランド化、その収益で社員教育と研究所の活動を続けてきました。

Q2 理事長の平和運動には、財団法人人間自然科学研究所が中心になって来ました。その設立趣旨と事業、その間の事業実績を紹介してください。

1988年、知で社会が改革できる時代が来ることを予感し「知革塾」を立ち上げ、1994年、人間としての尊厳が問われている日本人が、未来への展望を拓くストーリーを描くために「人間自然科学研究所」をつくりました。

3年かけて準備をし、1997年、日本人として初めて韓国の独立記念館に、未来を拓くために謝罪、献花・寄付、そして趣意書を手渡しました。その後、韓国、中国、米国、露国、欧州の「戦争と平和博物館」への公式訪問と研究訪問を続けました。また、郷土の治水の偉人、周藤弥兵衛、清原太兵衛、大梶七兵衛の小説・児童文学・漫画を出版、記念シンポジウムを開催。日中戦争で島根・鳥取の兵士が大きな災難を与え、日本側も壊滅的な打撃を受けた中国山東省、国共合

作の地の記念館に公式訪問し献花・寄付、そして趣意書を手渡しました。日中国交正常化30周年記念事業として孔子、孟子、周藤弥兵衛、清原太兵衛の4体の銅像を、その地で制作。孔子、孟子像は鳥取県につくられた日本一の中国庭園「燕趙園」に建立しました。その後、日本の七福神の源流ともいわれる八仙人と西王母の大理石像建立の支援、さらに今までの活動を、孫子のふるさと中国東莞市から評価され、孫子の銅像をいただき、あわせて建立しました。ソウル支社設立を記念して、韓国で大運河の建設計画が進められていることから、金顕哲先生のご支援を得て、韓国語で3人の治水の偉人の漫画を出版しました。「国民日報」でも3人の治水の偉人の特集記事が掲載され、ウラジオストク、東海、境港を結ぶフェリーで、韓国語漫画とともに読めるようになっています。また1998年、本社工場竣工記念として、中国「伝世蔵書」全123巻を島根大学に寄贈、1999年、研究所の理論を体系化した「太陽の國IZUMO」を出版、2002年「日中英対訳論語」、2008年「中日韓英対訳中国古典名言録」、2011年「朝鮮半島と日本列島の使命」の編纂、国際シンポジウムの開催、そして活動の映像記録をつくり、対立・統合・発展のサイクル「和の文化」が生まれる“共感のプラットフォーム”をつくる準備をして来ました。これらが平和活動家と見られる原因だと思います。

Q3 ところで、今までの一貫して推進した平和運動が、最近は「“和”の運動」としてより広くて深くグレードアップされた感じを受けますが、“平和”と“和”は、どこか似たように見えますが、あえて「和の文化」を強調する理由は何でしょう？

核の抑止力が効くなかで、世界規模の金融混乱が「信」の崩壊の連鎖を招き、人類がつくってきたあらゆる組織は内部崩壊か、進化かの分岐点に立っています。

私は事業と研究所の活動を通じて、北東アジアを中心に、共感のプラットフォーム「平」を創るプロセスで「信」を生み出し、対立、統合、発展を繰り返す「和」の生まれる環境を整えてきました。

人類は火を取り込み、火は火薬、ダイナマイトを経て核に至り、広島、長崎に原子爆弾が投下され、東西冷戦の時代を経て、米国、露国、中国の三大核大国と、たくさんの核保有・準核保有国をつくりました。また原子力発電所は世界中に作られ稼働していますが、スリーマイル島、チェルノブイリに続き、深刻な福島原発事故が起き、世界の稼働中・建設中・計画中原発に大きな影響を与えています。

また言葉は文字、印刷、そしてスマートフォン、タブレット端末、クラウド・コンピューティングの時代を迎え、情報の共有化が世界規模で急速に広がってきました。人類の生活基盤である衣食住は国境を超えた分業が進み、後戻りできない状況に至っています。

人類の長い歴史のなかで、三大核大国の結節点である「日本列島と朝鮮半島」に、人類進化存続のための共感のステージをつくり、米国のスマートパワー、中国の和諧、韓国の和諍、日本の和譲から叡智を借り、真の「和」を生み出す、見識と知恵と勇氣、そして行動力が試されています。

Q4 一般的に儒教・仏教文化圏で“和”は、一番人間的であり普遍的な価値で、生活の中に深く染み込んで、決してなじみの無い概念ではありません。日本における‘和の文化’をもう少し分かりやすく説明して頂けないでしょうか？

カントの「人類は通常の状態が戦争状態であり、それゆえ平和は創り出さねばならない」は、示唆に富んだ言葉です。これは私見ですが、「和」は、共感の舞台「平」の上で、対立・統合・発展を繰り返す過程であり、静止状態ではなく、中庸の生き方から生まれる拡大する螺旋運動と考えています。

天才、弘法大師空海は1100年前に中国から真言密教を日本に持ち帰り、京都の東寺講堂に立体曼荼羅をつくりました。私はこれを見て「人類はおかれた環境により、限りなく悪魔にも、天使にも近づく、非常に多様性のある生命体」と感じました。時間と空間の間合いを生かし、会話のできる環境を整えれば、あらゆることは論理的に解決、希望の生まれる未来を描くことが

でき、グローバル化した世界において、3大核大国に囲まれた朝鮮半島と日本列島が、長い人類の歴史のなかで、世界に広がる「和の文化」を生み出せるあらゆる条件が整った唯一の地域であると確信するに至りました。

Q5 理事長が言われる「和の文化」を創出する人間自然科学研究所のプロジェクト構想で、人類が遭遇した現状を、対立様相を生かし、人類社会の新しい進化のためには、「和の文化」が必要であると強調されました。とても適切な分析と思われ、その処方も正しいのではないかと思います。それであるのならば、人類社会の新しい進化のための「和の文化」の具体的な実現方案は何でしょうか？

「合成散敗萬古定理」（合わせれば成り、散れば敗れる、普遍の定理）

「衰颯的景象 就在盛満中 發生的機緘 即在零落内」（繁栄の極みに衰退の芽は生じ、衰退の極みに繁栄の芽は生ず）

日本での長い生活のなかで、怨念・恨みを抱く人、あるいは諦め・無関心を装う人、逆にその立場を生かして経済的・社会的に大きな成功をおさめた人、これからチャレンジしようとしている人など、日本には40万人ともいわれる特別永住権をもつ在日韓国朝鮮の方々がいらっやいます。そういう方々と、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、日本の国民とともに、中国、露国、米国の理解を得て、世界的な「和の文化」を創出する役割がまわってきたと確信しています。その具体化への入り口は沖縄、尖閣諸島、台湾の海峡、独島竹島を中心とした日本海、北方領土にあります。その時期は今です。

使用済み核燃料の再処理計画の先行きが見えないことも重なり、これに失敗すれば、国家民族の崩壊のみならず、人類崩壊への導火線ともなり、史上かつてない大きな罪を犯すことにもなりかねません。

Q6 そして、日本周辺の“和の文化圏”として、沖縄・尖閣諸島・台湾の海域と、独島を中心とした、日本海などと言及されましたが、これは、余りにも日本本位の「和の文化」を考えると、誤解の余地があるという点と、一方では‘和の文化’の必要性が日本のためにひき起こされると見ることもできるだろうと思いますが、この点はどのように思いますか？

和の文化圏は、決して日本本位で考えていることではありません。

日本が初めて内政化（植民地化）した地は、明治維新後の琉球処分から生まれた沖縄県です。また沖縄は大戦後、米国の施政下に入り、朝鮮戦争、ベトナム戦争の前線基地となり、日本返還後も米国を中心とする西側社会の中核基地として、中東を含むあらゆる戦争と平和に関わって来ました。

日本が持っている諸問題、尖閣諸島、台湾の海峡、北方領土問題、独島竹島を中心とした日本海を巡る日本と韓国、日本と朝鮮民主主義人民共和国、韓国と朝鮮民主主義人民共和国間の緊張による朝鮮半島の問題、すべてが当事国間だけではなく、世界を見渡し人類史的な視点から考え、人類の未来を拓くチャンスを私たちに与えています。

今、世界は金融経済の行き詰まり、核拡散、放射能、紛争、自殺、耐性菌の発生と免疫力の低下からくる癌の多発とウィルス蔓延など、困難な状況に陥っています。そういう時代背景の中で、日本は韓国、中国や他のアジアの国々から、過去の歴史問題について厳しい指摘を受けています。日本人として20年にわたり、加害側の戦後責任を果たすため、私を団長とする訪問団を結成し、過去に内政化や交戦した国々に謝罪と、因果関係とその背景を学ぶ旅を続け、「和の文化」の流れを生み出す舞台をつくる準備を進めてきました

Q7 まず、沖縄の場合、彼らに犠牲を強要し、苦しみを抱かせた歴史は、もっぱら日本による蛮行の結果であり、独島の場合も日本の無理な領土拡張の野望による結果であると歴史が言っています。日本が武力で朝鮮半島を侵略しなかったら、独島問題は日本が主張する何の理由も

無かったことと思います。この機会に理事長の独島に対するはっきりとした立場をお聞きしたいです。

これから人類は世界規模の「信」の崩壊から困難な時代に直面します。独島竹島、日本海東海呼称の問題については、日本、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国の三カ国の見識が問われる問題であり、人類史の評価にたえ、世界の紛争地帯に希望と勇気生まれる事例にしたいと考えています。そしてこれは世界の中で生きることを宿命付けられた、日本と大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国が必ずやらなければならないことであり、まず日本と韓国から、国民という立場で、議論の場を設けなければならないと確信しています。

日本、韓国でもよく使われる「固有の領土」という表現については多少違う見解を持っています。領土は国民国家の時代以降の概念だと考えています。経緯と現状を踏まえ、未来を見通し、関係国の協議・承認によって領土が確定します。このプロセスが国民の見識を深めるのです。

「固有の領土」は世界中どこにもないのではないかと考えています。

私の故郷であり、また会社の本社がある島根県が「竹島の日」をつくることに、私は熟慮の上、賛成しました。なぜならば、歴史、独島竹島、海洋呼称問題など、あらゆる問題をテーブルの上に上げ、先端技術と時間・空間の間合いを生かし、共感のステージで、対立のエネルギーに統合のエネルギーを組合せ、対立・統合・発展を繰返す「和の文化」を創出できる時機が来たと確信したからです。

Q8 悲しい歴史の島、沖縄に'国際平和センター'の創設を始め、近代戦争のすべての犠牲者を記録する'メモリアルタワー'の建立、世界の戦争と平和と関連する写真と映像が見れる'世界平和・戦争記念館'の建設、平和の貢献者の発掘し、世界に知らせ、'和の文化オリンピック'などを開催する'和の殿堂'建設などを理事長は提案されました。とても奇抜なアイデアです。これが実現さえすれば人類の平和増進に、大変な影響を及ぼすと思います。問題はどのように

実現するかが重要ですが、理事長が具体的な腹案はおありでしょうか？

沖縄は悲劇の島であったと同時に、基地の島として、世界に悲劇をもたらした、両方の側面をもつ島です。この島に日本、米国はもとより、世界の人たちの未来を拓く知の施設をつくることは、異論のないところだと確信しています。

まず日本人と在日韓国朝鮮の方々との間で話し合いから始めるべきではないでしょうか。人類益という目的のもとに、使命を帯びた人による集団ができれば、ヒト・モノ・カネが集まり、発展のサイクルが生まれます。「ゼロからの創造」のプロセスは21世紀の家庭、会社、国家、人類社会などすべて本質は同じであり、持続可能な新しいコミュニティを構想する鍵になります。沖縄音楽の研究者から、次々と博士が生まれていると聞いています。「武器の代わりに三味線をもった琉球という王国がある」ということを、ナポレオンが聴き、「つぎに生まれてくるときは、そういう国に生まれたい」と言ったという逸話が残されているそうです。「会えば兄弟」と言う言葉は、沖縄でいまでも使われています。

縁あって、ノーベルの秘書を務めたこともある、女性ノーベル平和賞受賞者第1号であるベルタ・フォン・ズットナー女史の記念館建設の話が、オランダ・ハーグでの講演を契機に、「平和のための博物館国際ネットワーク」理事会の統括ディレクターのピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士から、私のところに持ち込まれました。この記念館を沖縄につくることを提案。これから素案をまとめる段階です。これに先立ち、胸像を制作し、ズットナー展を沖縄で開催したく、関係者と協議中です。

このプロジェクトは核大国である米国、露国、中国のみならず、世界の子どもたち、女性、男性に支持されると確信しています。このような流れになれば、朝鮮半島、日本列島、そして世界も新しい時代に向かうのではないのでしょうか。

Q9 理事長は、'和の文化'の創出において、人類全体よりも、まず、朝鮮半島・日本・中国に重点を置いているように見えます。とても当然のことと存じます。現在、この三ヶ国間には、領土・過去史問題が横糸と縦糸で編まれ、ソロモン王の知恵でも解き難い乱麻のように絡まっています。韓・日間の独島・従軍慰安婦・強制徴用・文化財回収の問題があり、日中間には、領土問題と日清戦争以後の補償問題がかかっています。問題は、3カ国の和のためには、何よりも先行されなければならない日本の謝罪とそれに伴う法的・人間的補償です。日本は、戦争が終わって67年が経つ今日まで日本が行った残酷な犯罪と悪行を認めようとしないで、それに対する真の謝罪も回避しています。

理事長もご存知のように、個人間の関係でも激しい葛藤と対立があっても、お互い是非を明確にし、誤った人が謝罪をし、容赦を求めると和解が出来ます。この和解こそが理事長が成そうとする“和”の本質ではないでしょうか？ですので、いまにでも、日本と日本国民が誤った過去の過ちについて謝罪をし、それに対する補償をすると“和”は日本国全体で噴出する温泉のように溢れるでしょう。東北アジアは勿論、世界の“和の創出”に画期的な契機を備えることが出来るのではないのでしょうか？「和の文化」創出に尽力なさる理事長が率先して、日本国内で意を一緒にする人に、誤まった歴史に対する日本と日本国民の反省と謝罪が出来るためにすべての努力に集中されるのが“和”を成す出発点になると存じますが、これに対する理事長の見解を聞かせてください。

まったく同感です。多大なる災難を与えた世代の子孫として、日本人として各国をまわり、戦後責任を果たす入口として、謝罪をしてきました。六カ国協議のメンバーである大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、日本の三カ国に関わるあらゆる歴史問題をすべてテーブルにあげると、問題が山積みになり、憤りや、ため息が出るはずです。

山積した問題群を、私は「禍」と定義しています。「禍転じて福となす」という言葉もあります。これを戦前、戦時、戦後責任の、三つの責任に分け、技術革新の成果を組合せれば、「福」

すなわち「和」を生み出すことができると確信しています。いま大きな問題になっている、竹島独島、日本海東海呼称、慰安婦の問題はこのプロジェクトが始まる入口です。

2011年2月22日の「竹島の日」に発刊した「朝鮮半島と日本列島の使命」で述べていますが、2008年5月の訪韓時に日本大使館前で、80歳を超えた元慰安婦の方々の日本に対する抗議活動に遭遇し、その雰囲気と回数に強烈な衝撃を受けました。この抗議行動は1000回を超え、少女の像も建立され、米国にも既に二つの碑が建立され、今後も多数の碑がつくられると聞いています。これは日韓両国家と民族の崩壊につながる本質的な問題であり、日本人はもちろんのこと、韓国人の見識と智慧と勇気が問われています。彼女たちは戦争中、大変な受難によって「尊厳の命」を失いました。私たちに日本人、韓国人、人間としての自覚があれば、彼女たちの戦後の長い間の困難な尊厳の命を取り戻す活動を放置することはできなかったはずです。

戦争責任とは、戦争を未然に防げなかった戦前責任、戦時責任、そして戦後責任の3つに分類されます。戦争中に子どもであった世代以降は、戦前責任、戦時責任はありません。あるのは戦後責任です。戦前に作られた鉄道など社会インフラは利用するが、他国との関係から生じた怨念、恨みは先送りするということは許されません。

戦後責任とは、戦争に至った経緯と背景、戦闘行為、そして現代社会の問題を調査研究し、その成果を再び戦争を起こさないことと、恒久平和を生み出す資源として生かすことです。日本人はもちろんのこと、豊かになった韓国の方々を含めた、今を生きる私たちの子孫と人類の歴史に対する使命です。謝罪と償い金は、わずかな部分にしかすぎません。

Q10 「和の文化」と関連し、核と放射能について憂いを表明され、福島原発事故時の放射能災害やそれによる免疫力増進の必要性を言及する中で、発酵食品の摂取を強調しています。これを通じて人間自然科学研究所が先端科学と情報技術を結合し、放射能に対する免疫力を飛躍的に向上するための発酵先進化を導くというのですが、発酵食品が放射能に対する免疫力を増進するという根拠は何であり、発酵文化の先進化とは何を意味するのでしょうか？

免疫力向上の鍵は、文化、生きることの普遍的な意義の確立と、それを実現しやすい社会システム、そして食習慣にあると考えています。すなわち私の申し上げている「和の文化」そのものです。

妻の古くからの知人である、アメリカ・ボストン在住のマクロビオティックの世界的な指導者である久司道夫氏のネットワーク「ワン・ピースフル・ワールド」日本代表の大場淳一氏に、長崎被爆医師の記録という副題の付いた『死の同心円』という本をご紹介いただきました。それによれば爆心地から1.8kmのところにあった病院で被爆したのですが、その病院の入院患者も職員も、原爆症など放射能の直接の害によって亡くなった方は一人もいなかったというのです。この医師は職員にこう指示したそうです。「塩からい味噌汁をつくって毎日食べさせろ」。この医師の書いた本が英訳されて欧米で販売されており、チェルノブイリ原発事故の後、ヨーロッパで味噌が飛ぶように売れたといえます。味噌は言うまでもなく発酵食品です。

菌つまり微生物は多種多様で、人類はまだその全貌を解明できていません。環境の変化と菌の組み合わせの、新たな相関関係の発見などが期待できます。

朝鮮半島と日本列島にはキムチ、味噌、醤油など、発酵食文化の伝統が受け継がれており、発酵に適した独自の気候風土もあります。先端技術の成果と、伝統ノウハウを生かし、三カ国の対立エネルギーに統合のエネルギーを組合せ、研究開発と事業化に取り組み、この地域を人類繁栄の基礎となる免疫力の飛躍的向上に向けた発酵食文化の先進地とすることができると考えています。

2010年のバンクーバーオリンピックにおける金妍兒と浅田真央の活躍は、私たちに希望と勇気を与えてくれました。対立のエネルギーと統合のエネルギーの組合せが、互いに自己新記録を更新し、金妍兒は史上最高得点、浅田は史上初の計3回のトリプルアクセル成功という素晴らしい結果を生んだ事例と言えます。

Q11 また、人間自然科学研究所は、世界的な食糧危機に備え、'日本海=東海海洋牧場'を提案され、この海洋牧場の中心にある独島を'和の文化圏'の発祥地にするため、'日本を含む朝鮮戦争 関連国の民族衣装を着た女性と子供の群像を建立する'と言っています。それは、理事長が独島を日本海に属したものと断定しているように見えますが、何か誤解があるのではないのでしょうか？もし、独島を日本海に属するものと認識していましたら、韓日関係だけではなく、理事長の個人に対する韓国人の認識に大きな波長があると思います。これに対する理事長の立場を明らかにして下さい。

当研究所は、世界的な食料危機に備え、建築家・安藤忠雄氏も提言されている「日本海＝東海海洋牧場」構想を提案しています。この海域を免疫力向上に資する魚介類の世界最大の生産基地とする構想です。

これに先立ち、1999年に「竹島独島に朝鮮戦争に参戦した日本を含むすべての関係国の、民族衣装を着た女性と子どもの群像を建立し、人類社会の未来を拓く島に」と提案しています。

また2002年に、日本海東海の呼称を「中海」に、と提案していますが、無視され続けています。独島竹島問題と、首相の靖国神社参拝を契機に、中国では上海で抗日運動が起こり、世界的に困難な時代を迎えているときに、竹島、尖閣諸島、北方領土の、三つの領土問題が紛糾を始めました。日本も韓国も西側社会の一員として恩恵を受け、今日の繁栄が生まれました。朝鮮民主主義人民共和国では、韓国の方々から見れば同胞、日本人から見れば日本の戦争責任・戦後責任に関わる方々が、大変な苦勞をなさっていると聞き及んでいます。

この問題を当事者はもとより、人類社会の未来のために生かすことが、今を生きる関係国民の、世界に対する戦後責任だと考えています。竹島独島問題、日本海東海呼称問題は、公開の場での話し合いがもたれていないことが最大の問題です。これは他の問題も同じです。結論は自ずから出るはずで。

Q12 理事長は、先月の5月3日、オランダのハーグを訪問され、その町にある、韓国の独立指導者リジュン烈士記念館にて献花をされ、安重根義士の『獨立』の書のレプリカを寄贈されました。日本人のリジュン烈士記念館の公式訪問は最初であったと認知しており、とても難しい旅行をされましたが、特別に李儼烈士記念館を訪れた意味があると思います。教えてください。

2012年5月に国際司法裁判所があるハーグで開催された「平和のための博物館国際ネットワーク」理事会で講演しました。その地にある、李儼平和記念館にて、李基恒院長を訪ね、『獨立』の書のレプリカをお渡ししました。

ここに至る経緯は、2008年10月に京都で開催された第6回国際平和博物館会議に、安重根義士記念館の金鎬逸館長、李惠筠総務部長、宋錫源慶熙大学校日本研究所長を研究所が招待し、そのおりに安重根義士の遺墨『獨立』を含む数点の確認と、韓国展示のお手伝いしたことから始まっています。

安重根義士は、旅順、韓国、日本のそれぞれの独立によって、東洋に平和がもたらされると主張したと聞いています。グローバル化の進んだ現代においては、三大核大国である中国、露国、米国の理解を得て、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、日本の三カ国が、世界の期待を担い、恒久平和の流れを生み出す、特別な役割を果たす時がきたと考えています。

Q13 事実、朝鮮半島は、世界唯一の分断国であり、“不和”の中心地域です。朝鮮半島の分断と紛争には、日本の責任も大きいです。しかし、日本は責任を痛感するどころか、むしろ朝鮮半島の分断状況を楽しんでいると認識する見解も多いです。理事長は日本の指導者の一人として、朝鮮半島の統一のためにどのような役割が出来ますか？そして、日本はどのようにすべきであるでしょうか？この質問をする理由は、理事長が推進する『和の文化』創出に一番核心となる事案であるからです。

朝鮮半島の分断、また朝鮮戦争に至る経緯には、日本に大きな責任があります。日本、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国の三カ国が、中国・露国・米国の協力を得て、それぞれの特徴を生かし、世界の平和の流れを生み出す。これは朝鮮半島統一の前にしかできません。苦難の歴史を歩み亡くなっていった方々と子孫に対する、今を生きる関係国民の義務と責任です。

Q14 理事長は、これまで20年間、日本の良心として、はばかりことなく日本の国益・情緒に反する言行で日本国内で非難を受けたりされ、ご不便なこともあったと存じますが、このような状況と関連し、たくさんのエピソードがあると思いますが、ここでご紹介頂けないでしょうか？

グローバル時代における国益は、人類益と、国民が努力すれば「人間」としての認識が確立できることとの整合性が、必要不可欠ではないでしょうか。

たまにインターネット上で話題になることはありますが、危害を加えられるというようなことはありません。2008年には、「竹島の日」前日に、研究所にインターンシップに来ていた韓国の大学院の女学生を入れてパネルディスカッションを、2009年には「竹島の日」当日の2月22日に六カ国協議参加国の国旗を掲げ、シンポジウムを開催しました。右翼の街宣車を取り囲む中、警察に護られ、700人が参加しました。その時に上映した安重根義士の映像は、大きな感動を呼びました。参加者は、島根県が開催した公式行事よりも多かったと聴いています。全国紙の一面にも報道され、多くの関心をいただきました。

2010年には「日本海＝東海を囲む 朝鮮・韓国・日本から 世界平和を」というシンポジウムが女性を中心に開かれ、研究所はこれを後援しました。在日朝鮮の方々でつくる朝鮮歌舞団の歌と踊りのあと、会場全員で手をつないで踊ることになりました。会場には、数人の右翼とおぼしき人がいたのですが、手をつないで踊りの輪に加わったのです。女性による企画の新鮮さを、参加者に強烈に印象付けました。この経験はプロジェクトの進展に、明るい展望を感じさせました。

Q15 この機会に日本人として、日本と日本人をどのように表現出来ますか？

長・短点両方をお願いします。

この質問は、誤解を招くおそれがありますので、控えます。

Q16 最後に、今経営する事業をご紹介をお願いします。

日本で293自治体、6000施設導入の実績を持つクラウド型総合水管理システム「やくも水神」で世界平和のブラットホーム構築の一翼を担う流れを生み出すべく、今回中国、韓国を訪問しました。

中国では、6月21日、河野営業企画本部長がJICAの方と一緒に中国水利部を訪問。「やくも水神」システムの今後の中国での可能性について話し合いました。中国では極めて大きな発展が出来る分野で、近くプレゼンテーションを計画、協力して行く事で合意しました。今年は日中国交正常化40周年の節目の年。中国山東省の国共合作の地で、「やくも水神」のブランド名の由来である、治水の偉人・周藤弥兵衛翁の銅像の制作に入りたいと計画しています。

韓国では、6月25日、河野、現地法人コマツコリアの尹理事、金マーケティング本部長が韓国水資源公社を訪問、10数名の方々に、「やくも水神」システムの概要と、今までの経緯、現状、これからの展望を説明させていただきました。韓国は小規模水道施設の監視システムが未整備で、「やくも水神」システムの導入を検討したいということでした。今後、人的交流を含め、多くの面でつながりを持って行く事で合意しました。

日本で市場創造に成功した門番事業は、2010年、現地法人コマツコリアを設立、4回のソウル、釜山での展示会に出展。自動車、機械、電子、出版、物流、医薬、食品業界の方々の関心を集めました。その結果、ソウルのみならず、釜山・慶尚道地域からも弊社の経営理念に賛同した代理店も現れています。

本格的なクラウド・コンピューティング、スマートフォン時代を迎え、市民時代と釜山、韓国、世界の皆様と共に「門番」「水神」事業のみならず、発酵食品や貿易などを組み合わせた、関係する方みんなが幸せになるような新しいビジネスモデルの構築に取り組んでいます。

終わりに（徐世旭編集主幹）

小松理事長は日本の真の愛国者

筆者は、小松理事長とのインタビューを終え、この人こそもっとも日本的な人であり、誰よりも日本のことを愛する愛国者であると思った。

個人的にも自分自身に対する確固たる信念、もしくは自分の行動に自信が無ければ、人を気遣い、愛することはよっぽどのがなければそう簡単には出来ない。まして自分の故郷・自分の国に対する忠誠心がないと、隣国に対し温かい関心を持って行動に移すのは無理だろう。

1980年初めから始まった彼の韓国に対する関心と行動は、韓日両国の特殊な歴史関係を理解し、そのような歴史認識に根ざして展開してきたと見える。

長い間の彼との交流で感じたのは、彼は抜きん出た歴史認識と文化意識を持っていることである。彼の卓越した歴史観は、人間自然科学研究所を紹介する資料の表題に鮮明に表れている。

「歴史に暗い人は現在においても暗い」と喝破したドイツのワイツゼッカーの言葉と、ドイツをドイツらしく創り上げた鉄人宰相ビスマルクの次の言葉を掲載してある。

「愚者は経験から学び賢者は歴史から学ぶ」と...

小松理事長がこの名言を最初にあげているのは、おそらく、自分に不利な歴史を徹底的に歪曲し、背をむけたがる、グローバル人になれない日本人達に聞かせたい言葉であるからではないか、と考えてみた。

最後にインタビュー要請を快く受けてくださった小松理事長に深く感謝を申し上げる。

(終わり)



WA-JO
IZUMO

The radiant beauty of the world
Compels my inmost soul to free God-given powers of my nature
That they may soar into the cosmos,
To take wing from my Self And trustingly to seek myself
In cosmic light and cosmic warmth.

和 讓